# Jahresbericht 40

JAPANISCH-DEUTSCHE GESELLSCHAFT
WESTJAPAN

年報 第40号

平成28年5月

西日本日独協会

FUKUOKA　JAPAN　2016

表紙の写真
ドイツ大使歓迎の夕べ
（2015年８月７日）

本文イラスト
藤 多恵子
（P25, 47, 49 左上除く）

# 目　次


## 挨　拶

創立60周年記念の年に際して ― 熊本大震災の折に ―　池田 紘一…… 1

## 寄　稿

ウィーンのホイリゲあれこれ（Der Wiener Heurige – Episode）　梅野 健…… 2

ミヒャエル・エンデに席を取られた話　高柳 英子…… 5

ふるさとテュービンゲンでの同窓会　加島 清士…… 7

故トーマス・シュルツェ君のこと　稲元 萠…… 10

ドイツ語専攻の大学を夢見る高校生　本田 和親…… 12

## 例会と催し

〈5月特別例会〉　ワインの会　藤野 成爾…… 14

アスパラガスについて　松野 正邦…… 15

〈6月例会〉　ベネズエラ・ギアナ高地旅行
― ロライマ山・グランサバナトレッキング、エンジェルフォール ―　立花 健吾…… 17

《感想》　愉しい日独協会例会　萱野 通子…… 20

〈8月特別例会〉　ドイツ大使歓迎の夕べ ― 講演と懇親会 ―　池田 紘一…… 21

《感想》　敗戦から70年・彼我の差　宮崎 亮…… 24

《感想》　大使と出会って　松本 美和…… 24

《感想》　大使に聞いた“ハタラキカタ”　森 光一郎…… 25

〈9月例会〉　ウルリッヒ・ロスマン氏講演
「ドイツ近代史の足跡を訪ねて ― ベルリンとブランデンブルク州 ―」　加藤 元也…… 26

《感想》　ベルリン メモアール　古賀 勲…… 28

〈11月例会〉　ドイツ近現代卓上ゲームの歴史にみるドイツらしさ　平松 智久…… 30

〈12月特別例会〉　クリスマス会
― 子どもたち、ドイツ人留学生と祝う楽しいドイツ風クリスマス ―　池田 園子…… 34

《感想》　福岡でのクリスマスパーティ　エミーナ・ベギッチ…… 35

《感想》　従僕ループレヒトと聖ニコラウス、福岡にも現わる　オーリヴァー・モーア…… 37

〈2月例会〉　日本語指導を通じて国際交流20年
― 活動の中で見えてきたこと ―　中村 昭…… 39

《感想》　夢と情熱、研究と実践　葉 照子…… 41

青年部通信

「若手会員の集い」と「秋祭り」に参加して　田野 武夫…… 42

ようこそ、日独ボードゲーム会へ! ― 童心に返り、大人げなく楽しもう ―　緒方 愛実…… 44

会員だより …… 46

2016 年度役員等名簿 …… 52

事務局報告

Ⅰ．2015年度会員動向および2016年度会員 …… 54

Ⅱ．2015年度活動報告 …… 54

Ⅲ．2015年度協会会計・留学生基金収支決算報告および会計監査報告 …… 57

Ⅳ．2016年度活動計画 …… 59

Ⅴ．2016年度協会会計・留学生基金収支予算 …… 61

青年部報告

Ⅰ．2016年度青年部会員 …… 63

Ⅱ．2015年度青年部活動報告 …… 63

Ⅲ．2015年度青年部会計収支決算報告および会計監査報告 …… 64

Ⅳ．2016年度青年部活動計画 …… 65

Ⅴ．2016年度青年部会計収支予算 …… 65

西日本日独協会会則 …… 66

西日本日独協会青年部規定 …… 70

西日本日独協会組織図 …… 72

入会のご案内 …… 73

編集後記 …… 76


**◉広告一覧**


(株)千鳥饅頭総本舗 …… 4

シュタット・マインツ …… 9

城島印刷(株) …… 11

藤産婦人科医院 …… 13

(株)同学社 …… 33

西部ガス(株) …… 74

KKRホテル博多 …… 74

南州マイスターヴェルク …… 75

## 挨　拶

# 創立60周年記念の年に際して
## ― 熊本大震災の折に ―

会長　池田 紘一

「年報」は、毎年５月下旬に発行されるが、その中身は前年度の、今号であれば2015年４月から2016年３月に至る協会の事業や活動の報告が主体である。つまり回顧誌の性格が強い。しかし、ご承知のようにわが協会は今年度中に、すなわち2016年12月６日に創立60周年記年日を迎える。そのために昨年度は理事会内に創立60周年特別委員会が設けられ、ささやかではあるが記念の年に相応しい事業、催し、例会等が企画された。それゆえ回顧は脇に置いて（特別記念号となる次号では60年間の協会の歴史の大回顧が企図されている）、すでに始まっている2016年度のことを少し記しておこう。そこには折しも熊本で大きな地震があって、未だ大変な時期にあるという事情もある。

実は、すでにこの４月17日にはわが協会の2016年度定期総会が開かれ、その日の夕刻には60周年オープニングパーティが催され、会員であるテノールの山崎勝幸氏とピアノの多田裕子さんによるシューマン「詩人の恋」で幕が切って落とされた。この日は熊本大地震の本震（４月16日午前１時25分発生）の翌日であったが、幸い福岡市内は無事であった。

そして４月22日、23日の両日は、60周年記念事業の一つとして、立花事務局長を中心に昨秋より準備を重ねてきた一大事業である全国日独協会連合会年次総会と「若手会員の集い」の福岡開催の日であった。熊本では余震が断続的につづいており開催は危ぶまれたが、福岡市内の安全を確認した上で予定通り実施に踏み切った。総会には、熊本や南九州からの参加は論外であったが、北海道を含む全国の24の日独協会の代表者が集まり、事は盛会裡に運んだ。しかし参加者の大きな関心と心配はなによりもクマモトであり、総会では犠牲者への黙禱と復興への祈りがささげられた。懇親会には、昨年８月にわが協会で講演されたフォン・ヴェアテルン駐日ドイツ大使も、伊勢志摩サミット前のご多忙にもかかわらず東京からとんぼ返りで参加されたが、クマモトを非常に気にかけておられた。

感動的だったのは、新しく大分県の竹田市に市長を会長に設立され、今回の総会で連合会加盟が承認される予定であった大分日独協会から、総会の午前中だけではあったが無理をおして三人の会員（市職員）が参加されたことである。竹田はいうまでもなく大分での震源地の一つであった。こうして、全国各地から集まった人々が、翌日の「集い」の日独の若者たちを含め、九州の地を踏むことによってクマモト、オオイタをいっそう身近に感じたのは、結果としては良かったと思う。

わが協会は2016年度から、初めての女性副会長に高田淑、新事務局長に藤野成爾、新理事（企画委員長）に小黒康正、新理事（編集委員会委員長）に立花雅子の各氏を迎え、新たな布陣で船出する。今後も60周年を記念してバイエルン独日協会（本部ミュンヒェン）との若者交流事業や、多彩な記念例会が展開される予定である。多くの会員に参画、あるいは参加いただき、これを機に、わが協会が還暦を経て、新たな船出を果たすことを切に願う。合わせて、会員の皆様と共に、被災地熊本、大分の一日も早い復興と安全を祈りたいと思う。

（2016年４月26日記す）

● 寄　稿

# ウィーンのホイリゲあれこれ（Der Wiener Heurige – Episode）

梅野 健

2015年５月20日に催された西日本日独協会の特別例会「ワインの会」に福岡ウィーン倶楽部８名の仲間と参加させていただきました。初めての参加でしたが協会会員の皆さまが温かく迎えてくださり、楽しい交流の輪に加えていただきました。フランケンワインに白アスパラガス、そしてチーズ、そのそれぞれに詳しいレジュメを準備され、初めてお聴きすることも多い刺激的な説話は、さすが日独協会と感心させられました。十分すぎるワインの上に、料理はドイツのソーセージやハム、チーズにライ麦パン、最後はスイーツまで、すっかりおよばれ気分に浸りました。

ところでその折にウィーンの「ホイリゲ」も話題に上り、年報に何か書くようにとのご要望がありました。ご承知のようにホイリゲという言葉には、ワインの新酒の意味の他に、ブドウ農家が自家製の新酒を飲ませる居酒屋の意味があり、ウィーン郊外にはこの種の居酒屋が集まった有名な地区がいくつかあります。ここでお話しするのはこのホイリゲのことです。

とは申しても、実のところ私の知るホイリゲは、ハイリゲンシュタットとヌスドルフの４、５軒しかありません。はなはだ乏しい知識と体験しかありませんので、力不足はもとよりですが、過去の資料や遠い昔の記憶を辿って、できるだけ役目を果たしたいと思います。

## 初めてのホイリゲ

最も印象深いのは、1993年９月、福岡ウィーン倶楽部のウィーン旅行で、ウィーン・フィルの元楽団長ウィルヘルム・ヒュープナー夫妻に案内されて訪れたホイリゲです。W. ヒュープナーさんは、1963年ウィーン・フィルに在籍のまま、NHK 交響楽団を指導するため来日された大の親日家でありました。そのヒュープナーさんと原田ウルズラさんとの運命的出会いをきっかけにウィーン・フィルとの親交が始まり、その後のウィーン倶楽部創立へと発展していったという、忘れることのできない恩人といえる方です。

当日私たちは、あこがれのウィーン国立歌劇場で「ラ・ボエーム」を鑑賞後、夜遅くハイリゲンシュタットへ車を走らせました。オペラの興奮も冷めやらぬところへ、つい先刻「ミミ」を熱演して聴衆の涙を誘ったソプラノ、アンゲラ・ゲオルギュが駆けつけてくれたのです。W. ヒュープナーさんの配慮があってのサプライズに違いありません。彼女も私たちの踊りの輪の中に入り、雰囲気は一気に盛り上がりました。想えば人気のプリマドンナを囲んでの最高のホイリゲ体験でした。

## 私が訪れたハイリゲンシュタットのホイリゲ２軒

ベートーヴェン記念館、いわゆる「ハイリゲンシュタットの遺書の家」の並びにヴェルナー・ヴェルザー（Werner Werser）という家族経営のホイリゲがあります。前述のようにW. ヒュープナーさんに案内され訪れたところで、ウィーン・フィル楽団員の贔屓だとか。

もう一つは、この近く聖ヤーコブ教会に隣接する通称「ベートーヴェン・ハウス」と呼ばれ

ているマイヤー・アム・プファルプラッツ(Mayer am Pfarrplatz)。マイヤー家は1683年からこの地でワインビネガーの醸造を生業としていた由緒あるホイリゲで、1817年夏ベートーヴェンがこの家の２階に滞在し、交響曲第９の一部を作曲したと店のパンフに説明があります。

ワインの性格は辛口のコクの深い白ワインで「フランツ・マイヤー・ベートーヴェン」の銘柄で日本にも輸出されています。

### ホイリゲの歴史

ホイリゲには先にも申しましたように、「今年のワイン」つまり前年に収穫し仕込んだぶどうの新酒の意味と同時に、この新酒を飲ませる居酒屋をも指しています。ウィーンにおけるホイリゲの出現は、今から200年以上も前のことです。当時はワインの販売は高額な免許税と引き換えに、一部の商人が既得権を得ていました。マリア・テレジアの長男で啓蒙的皇帝といわれたヨーゼフ２世が、1784年ワインの自由販売を認可し、続いて1789年、ウィーン郊外の一定地域のぶどう農家に自家製ワインの小売販売と食事提供を認める特別な権利を与えました。こうしてハイリゲンシュタットやグリンツィングにホイリゲが急増しました。学校や病院の建設などと併せて、これも彼の「善政」のひとつといえるでしょう。

ホイリゲ ヴェルナー・ヴェルザーの前で
筆者　2004 年

### ホイリゲの解禁

その年の新酒が解禁されるのは、毎年11月11日の「聖マルティンの日」と定められています。それから向こう１年間、それは新酒、つまりホイリゲと呼ばれます。新酒ありの目印は、店の軒先に吊り下げられた松やモミの小枝です。不思議なことに日本の蔵元の杉玉とそっくりです。解禁前の９月・10月にはモストというアルコールなしの甘いブドウ・ジュースや、この時期しか飲むことができないシュトルムが出されます。このシュトルムはモストを４週間ほど寝かせたもので、まだ発酵途中で「おり引き」が終わってなく白く濁っています。季節商品ですから試してみるのも一興ですが、口当たりが良く、甘くて飲みやすい反面、アルコール度数は高めですから、飲みすぎると二日酔いは覚悟の上で。ホイリゲではワイングラスは見かけません。素朴な４分の１リッターのジョッキがドーンと出てきます。もちろん８分の１ジョッキもあるようです。

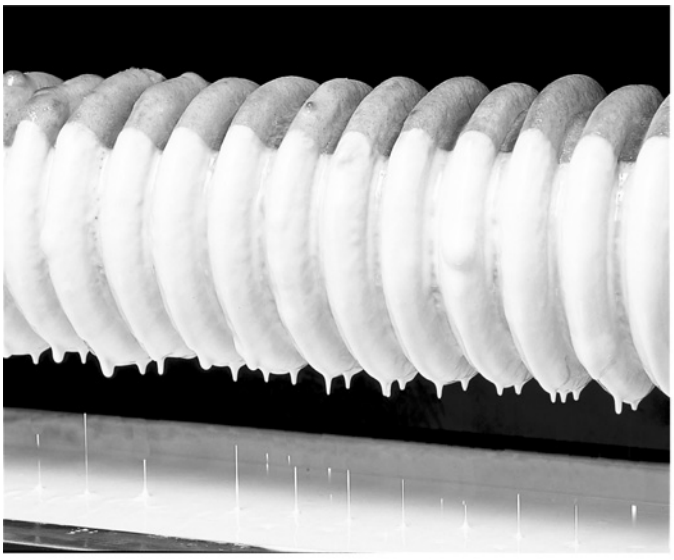
### シュランメル音楽とシュランメルン

ウィーンの街には至るところに音楽が溢れていますが、ホイリゲと切っても切り離せないのが「シュランメル音楽」(Schrammelmusik)です。その誕生はヨハン・シュトラウス２世の晩年にあたる1884年。ヨハンとヨーゼフ・シュランメル兄弟（Johann & Josef Schrammel）のヴァイオリンを中心に、ト調クラリネットとコントラ・ギターを加えた「シュランメル四重奏団」(Schrammelquartett) の結成でした。その後、伝統的なボタン式アコーディオン又はチターを加えた型が伝統的編成で、シュランメル四重奏団に始まるこの編成方式は「シュランメルン」(Schrammeln シュランメルの複数形）の愛称で親しまれることになります。

シュランメルンの生演奏

楽団結成当時から兄弟は、昔はやったウィーン独特の民謡を演奏するかたわら作曲も手がけ、広く知られていましたが、国外の演奏旅行で更に有名になり、ウィーンの民俗音楽を「シュランメル音楽」というひとつのジャンルに創り上げました。現在ウィーンには５～６人編成のシュランメルの名を冠した演奏グループ、つまりシュランメルンが、数え切れないほど存在するといわれています。実際ホイリゲでは、その時々に応じて楽器の組み合わせはいろいろです。もちろん、ウィーン・フィルのトップクラスの楽員で編成される「ウィーン・フィルハーモニア・シュランメルン」もあります。この楽団はシュランメルンの伝統と本質を最も良く受け継いでいるといわれており、日本にも度々訪れています。

（うめの たけし 会員、福岡ウィーン倶楽部）

守り続けたい
伝承の味。
伝え続けたい
真心の味。

愛情のお菓子
千鳥屋
CHIDORIYA
1630
(株)千鳥饅頭総本舗
福岡市博多区上呉服町10-1
博多三井ビル1F
TEL 092-283-8101 ☎0120-192-193
ホームページhttp://www.chidoriya.co.jp/

千鳥屋は、1969年よりドイツ菓子を作り続けております。

# ミヒャエル・エンデに席を取られた話

高柳 英子

かれこれ30年前、国際児童図書評議会世界大会が東京で催された時の話である。20代のころからこの組織の会員とはいえ、あの当時、ドイツの児童文学評論雑誌の海外スタッフとして日本からレポートを送りわずかの原稿料を得る仕事をしていた程度の私には、大枚をはたいて上京し、この「子どもの本の世界大会」に出席するのは、かなりの決断がいった。

けれど基調講演者のリストにラーベンスブルガー出版の社長の名を見つけた時は、もう直談判しかないと腹をくくったのだ。日本ではもっぱら知的ゲームや知育オモチャの会社として有名だが、ここの児童出版部門は、良心的な優れた作品を世に送り出している。ここから出ているオットー・シュタイガーの「泥棒をつかまえろ！」こそは、私の翻訳デビュー作となるべき作品だった。

外国人労働者差別、青少年による集団暴行、学校でのいじめ、そんなことがまださほど顕著ではなかった当時、日本でも本書のテーマは将来必ずや切実なものになる、という確信が私にはあった。けれど何の肩書きもコネも持たずに地方都市に住む身では、どうあがいても出版社を見つけることができず、私は悶々としていたのだ。九大のミヒェル先生も東大の教授たちに推薦状を書いてくれたりしたが、畑違いの児童文学ではラチがあかなかった。

当時はイタリアに住んでいたミヒャエル・エンデにファンレターを送り、何度か手紙を交わした後、そんな悩みを打ち明けたのもそのころだった。これはとりあえず諦めて、もっと軽い編集者好みの作品でデビューをはたすべきだろうか、と迷う私に、「いまどきの編集者なんて、目先の利益しか考えていない。これこそ自分が世に問うべき作品という思いをもっているなら、決して妥協しないで」、という忠告をエンデはしてくれたのだ。

「面白い内容だけど外国人労働者の問題なんて、日本人にはピンとこないし……」などと断られ続けて、落ち込んでいる私に、「自分の信念をまげないで。あなたには訳者の才能があります。交わした手紙から私はそれを断言できます」という彼の過分な褒め言葉は、その後、挫折しそうになる私を励まし続けてくれた。

自分も「ジム・ボタン」のデビュー作を出してくれる出版社を求めて、ドイツ中を何十社渡り歩いたか数知れない、とエンデは手紙の中で自身の思い出を語ってくれた。東京一極集中の日本と違ってドイツは各地方都市に出版社がちらばっているので、行脚も大変だったに違いない。どの編集者も、大変面白い作品だと認めつつも、「しかし児童書にこの大作はありえない。あなたは初めてで知らないのだろうから、教えてあげますが、子どもの本というものはもっと薄くないとだめなのです。こんな分厚いものは誰も読んでくれませんよ」と、さかしらに若きエンデに説教をたれたという。けれど自身の読書体験から、子どもというものは、どんなに分厚くても、多少難解でも、面白ければ本に食らいつくものだ、これはそれほど面白い作品なのだと確信していたエンデは、大幅に削るなら出してあげよう、という条件をことごとく蹴り、そのままの長さでいいという出版社を求めて最後まで諦めなかった。ついにシュトゥットガルトのティーネマン出版が快諾してくれて、出版されるやドイツでベストセラーとなり、賞を取

り、テレビ化されて、世界に知られることになったのである。

そんなミヒャエル・エンデの基調講演が今回の東京大会の目玉でもあったのだが、「ジム・ボタン」シリーズに続く「モモ」ですでに押しも押されもせぬ世界的ベストセラー作家になっていた彼は、常に十重二十重に人々から取り囲まれていて、私なんぞは近寄ることさえできなかった。けれども、それはかまわない。私の目的はラーベンスブルガー出版の社長だったのだから。講演を終えた社長を捉まえ窮状を訴えると、即座に自分たちが取引している東京のエージェントに紹介状を書いてくれ、すぐにそこを訪ねるようにといってくれた。かくて私の処女翻訳の出版への扉は開かれた。

会議の最終日、オプショナルの能の鑑賞会に申し込んだ私は、意気揚々と能楽堂に赴いた。福岡ではまだ大濠公園の能楽堂もできておらず、ドイツ語を学ぶために東京に住んでいたころも、憧れの能は高額でそうそう鑑賞できるものではなかった。今でこそ年二回の宝生流の会には高いチケットをはりこむが、昔は目付柱が邪魔で首を傾けなければ見えない席だったり、正座で足が痛くなる桟敷席がせいぜい。それが今回、世界大会に出席した外国人参加者へのサービスの意味もあったのであろう、早い者勝ちの全自由席とあっては、何としてでも正面席を手にいれたく、一番乗りしたのだ。真ん中の一番いい座席を陣取ってホクホクしていると、劇場の関係者が近寄ってきて頭をさげた。

「まことに申し訳ございませんが、今、電話があって、主賓客用に席をいくつか空けておいてくれと頼まれまして。移動していただけないでしょうか。」

その列の端っこにはいきたくなかったので、しかたなく同じ位置の一列後ろに退却した。開演間際、お付きの一行に先導されてやってきて、先ほど私が確保した席についたのは、なんとミヒャエル・エンデその人であった。

「船弁慶」が終わって休憩時間、背後から、席を取られた恨みを冗談めかして語りかけ、「でもあなたに取られて光栄です」というと、「それはすまないことをした」、とエンデは笑い、私は隣の席に移って歓談することになった。彼は私との文通を覚えていて、「その後、翻訳家になれましたか、この会議に参加したということは、たぶんそうなのですね」、と問うので、私は「後一歩です」、と答えた。私が九州から持参した処女原稿はすでにエージェントの手に渡り、いよいよ出版への道を歩み始めていたのであるから。出版の翌年ＮＨＫの連続ラジオドラマ化された本書は何度か増刷を重ね、その後長らく絶版になっていたが、昨年、大幅改訂をして童話館出版から再版もされ、原作者オットー・シュタイガーは私が生涯追い求める作家となった。

「波風も。静を留め給うかと。……」静御前の幽玄の舞をみるたびに、エンデの後塵を拝して鑑賞したあの能楽堂の記憶が蘇る。そうしてエンデの手紙の文言を遺言状のごとくに守り、目先の利益を優先する作品だけは出版すまいと、私は今も、ろくに売れもしないマイナーな作品の翻訳を続けている。

（たかやなぎ えいこ 会員、ドイツ児童文学翻訳家）

# ふるさとテュービンゲンでの同窓会

加島 清士

昨年６月、同窓会に参加するため約17年振りに南ドイツのテュービンゲンに行ってきました。気持ちの上では、まさに久しぶりの里帰りという言葉がぴったりの旅でした。なぜなら、この町は、僕が15歳から21歳までの約６年間、シュトゥルム・ウント・ドラングの青春時代を過ごした、忘れられない思い出がいっぱい詰まった、心の古里だからです。

昨年から数えてちょうど50年前、1965年の春、イースターの時に、僕はこの町を初めて訪れ、シュタイナー学校に入学しました。なぜこの町にしたのかというと、たまたま僕の家族の知人で、当時学習院大学で心理学を学んでいた方が、テュービンゲン大学に留学されていたからです。今振り返って考えると、なんて無謀な、と自分でも思うのですが、動機は単純で、好奇心の強かった僕は、とにかくドイツに行ってドイツという国を知りたいという思いで、中学校時代３年かけて父を説得して、知人に頼んで身元引受人（未成年だったため）と学校と下宿先を探してもらい、中学校を卒業後、単身でドイツに向かったのです。

テュービンゲンは、当時人口が７万人で、その内大学生が２万人弱（現在は人口９万人弱で、学生が３万人近くとのこと）という、15世紀に創設された歴史ある大学があり、保守的な気風が根強いにもかかわらず、非常に自由な雰囲気の学生の町で、時折羽目を外して騒ぐ学生にも寛大で、よそ者に対しても好意的で住みやすい町でした。

シュタイナー学校は小・中・高一貫校で１年生クラスから13年生クラスまであり、僕は年齢から言えば10年生のクラスに入るところを、言葉も文化も分からない日本人という理由で、８年生のクラスに編入することになりました。２クラス下のクラスに編入したおかげで５年間シュタイナー教育を受けられ、ドイツ人の子供たちに混じって非常に密度の濃い青春時代を過ごすことが出来ました。もちろんこの経験は、僕のその後の人格形成に大きな影響を与えました。テュービンゲンに行き、そこでシュタイナー学校、そして沢山の素晴らしい友人や人々に出会えたことは、今でも僕の人生において、大切な宝です。

シュタイナー学校を卒業した後はチューリッヒ、ベルリンで学生生活を送り、大学を卒業後、第一の心の古里である日本へ戻りました。しかし、ドイツ、それも青春を共にした親友たちがおり、彼らとの思い出がいっぱい詰まったテュービンゲンは、第二の心の古里として、今も変わらず僕の心の中に大きな位置を占めています。

歳を重ねるとともに、第二の心の古里に対する郷愁が強まっていく中で、先生達や下宿のおじさんやおばさんなど、親身になって面倒を見てくださった人たちの多くが、残念ながら、亡くなってしまいました。だからこそ、まだ少しでも多くの友人が元気でいるうちに、会いたいと思っていた矢先、昨年の一月に親しい同窓生から電話があり、「Kiyoshi さえドイツへ来てくれるなら、それに合わせてみんなに連絡して同窓会を開く準備をするぞ」と言ってくれたことがきっかけで、里帰りを決心したのです。

それからは全てが一気に進み、僕の訪問スケジュールが決まると同時に、同窓会の日程も決まり、同窓生のリスト作りが行われ、同窓会の

仲良しの同窓生と

案内が郵便やメールで発送されました。最後に同窓会が開かれたのは38年前、僕がドイツを離れた年で、その後テュービンゲンを離れた同窓生も多く、それ以来開かれていませんでした。しかし、町を離れていた者が帰郷していたり、年金生活に入っている者が増えていたりで、9割近くから参加の返事が返ってきたのは予想外でした。

幹事のところに届いたメールはリスト登録者全員に配信され、そこに記された同窓生からのメッセージは全て読むことができましたが、名前を見ると、長い間お互いに音信不通であったにもかかわらず、不思議と当時の思い出がよみがえり、何とも言えない懐かしさがこみ上げてきました。そこに、皆どんなに変わっているのだろうか、会ってお互い誰か分かるのだろうか、という好奇心と不安の入り混じった気持ちも加わり、6月が待ち遠しくて仕方なくなりました。

今回は家内も連れて行きたかったのですが母親の介護をしているため叶わず、6月10日に一人でドイツへ旅立ちました。目的地は、一番の親友エルマーの家族が住んでいるシュトゥットガルト。空港でエルマーに5年振りに再会したときは（5年前に夫婦で訪日）、お互いに感動がこみ上げてきて、気がついてみると子供のようにはしゃいでいました。ドイツ滞在中はこのエルマー家に逗留させてもらいましたが、その後の一週間は毎日のスケジュールがいっぱいで、目まぐるしく過ぎていきました。

着いた次の日の晩は、同窓生の中でも特に親しかった7人だけで友人の自宅に集まり、僕の歓迎会を行ってくれ、深夜まで昔の思い出話しや、それぞれの人生で起こったことを語り合いながら、楽しい一時を過ごしました。シュタイナー学校を卒業してから今までの45年間のあいだに、彼らがそれぞれの人生において思いもよらない経験をしてきたことを聞いて、波乱万丈な人生を送ったのは自分だけではない、人生とは実に不思議なものだと改めて思いました。

次の日は、当時テュービンゲンで下宿していた家主夫妻の長男がはるばるノルウエーから駆けつけてきてくれ、お世話になったおじさんとおばさんのお墓参りに行ったり、当時一緒にアビトゥーア（大学入学資格国家試験）を受けた友人と会食したりと、慌ただしくも楽しい時間を過ごし、そうこうするうちに、待望の同窓会の土曜日がやってきました。

週末は嵐が来るかもしれないという天気予報は有り難いことに外れ、その日は朝から青空が広がりました。集合場所である旧市街の野外喫茶店に同窓生が集まり始め、みんな揃ったところで、まずは同窓生のご主人である歴史学者が、テュービンゲンの町の歴史を説明しながら旧市街の主な建物と名所を案内するという趣向で同窓会は始まりました。この町の歴史的価値と素晴らしさを改めて再認識した後は、ネッカー川の川下りです。船着き場に下り、水の流れと両岸の木立や建物をゆっくり満喫し、船を降りると、今度は川沿いのレストランの一室に案内されました。郷土料理に舌鼓を打ちながら昔話に夢中になって過ごした時間は、文字通り夢のような一時でした。食事の後は外のビヤガーデンに移動して、ジョッキに注がれたビー

ネッカー川の川下り

ルを少しずつ飲みながら、夜遅くまで語り合いました。

不思議だったのは、30年も40年も会っていなかった相手でも、顔を合わせた瞬間、タイムスリップしたように、気持ちは互いに当時の子供のころに戻り、気が付いたら当時のままのしぐさや表情で会話していることでした。そこには、子供のころに体験を共有することを通して育まれた信頼の絆という不思議な力が働いていたように思います。

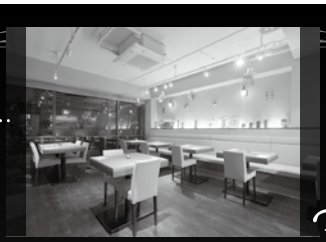
しかし、やはり年齢と共に色々健康の悩みを抱えている者も多く、一人はすでに病気で亡くなっており、いま一人は女性ですが、がんに侵され、抗がん剤治療で髪の毛が抜け落ちていました。それにもかかわらず駆けつけてくれた彼女に会えたのは、本当に嬉しいことでした。それやこれやを思うにつけ、まだ多くの同窓生が元気なうちに同窓会を実現できたのは何よりのことでした。次回はさらに参加人数が減っているかも知れませんが、みんなに会いにまた近いうちにテュービンゲンを訪れることを約束して、この町を後にしました。

日本の町は、古い町でもほとんどが10年も経つと様変わりしてしまうのに較べ、ドイツの古い町は500年前も今も景観が変わらないよう保存されていて、テュービンゲンもその例にもれず、いつ行ってもそこで暮らした当時のままの風景を見ることができ、しかも今回のようにそこで青春時代の思い出を共有する友人に会えるとすれば、それはまさに古里と呼ぶしかありません。このような素晴らしい古里がある自分は本当に幸せ者だと、今回改めて感じた次第です。

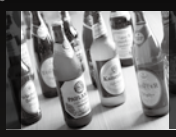
（かしま きよし 会員、整体師）


ゆったり空間で
ドイツの美味を堪能 ...

素材にこだわった
Deutsches Essen



RESTAURANT
ZUR STADT MAINZ



ドイツビール、こだわりの厳選素材や料理を取り揃え、
皆様のお越しを、心よりお待ちしております。

シュタットマインツ
TEL. 092-521-5011
福岡県福岡市中央区薬院伊福町11-1KAZ ビル2F
［営業時間］
ランチ　/ 11:00 ～ 15:00(OS.14:30)
ディナー / 18:00 ～ 23:00(OS.22:00)
定休日＝月曜日

# 故トーマス・シュルツェ君のこと

稲元 萠

Thomas Schulze といっても覚えておられる方は少ないであろう。とりわけ西日本日独協会と深い縁があった人というわけでもないから致し方ないわけであるが、本稿末尾で触れるように、1999年から2013年までライプツィヒ独日協会の会長だった人物と言えば、あるいは少しは関心を寄せていただけるかも知れない。

20年近く前の1997年秋から翌々年春にいたる頃、カール・デュイスベルク協会の支援をうけて６名の男女のドイツ青年が福岡にやって来た。そのなかの一人がトーマス・シュルツェ君であり、ライプツィヒ工科大学卒の33歳の青年であった。カール・デュイスベルク協会については平成13年５月刊の「年報」25号に，日本カール・デュイスベルク協会の専務理事であった坂本明美氏が紹介文を書いておられるので御一読いただければ有難い。来日したシュルツェ君たちは最初の数ヶ月、日本語の特訓をうけ、その後それぞれの特技を生かす会社に入って職業訓練を経験したようである。シュルツェ君はグラフィック技術が専門で、凸版印刷という大会社に紹介される幸運を得た。

何が縁だったか今ではしかと思い出せないのであるが、トーマスと我が家（といっても私と妻）は仲良しになった。そしてある時、我が家の近くの飯盛神社の境内で行われた弓道大会に彼が出場しているのを発見した時の驚きと一種の感動！彼は帰国するまでに二段位を取得したのであった。クリスマスのころに彼が我が家でグリューヴァインをつくってくれたことも忘れられない。トーマスを介して彼の両親とも親しくなり、私たちが訪独の折はベルリン近郊のシュルツェ家に泊めてもらったこともあり、またシュルツェ夫妻も来日して我が家を訪ねてくれた。トーマスはライプツィヒに弓道の日本精神を持ち帰っただけでなく、妻となる一日本女性を同伴もした。

ライプツィヒのトーマス・シュルツェ夫妻ははなはだ筆無精で、その暮らしぶりについてまったく書いてよこさなかったが、それに反してベルリンのトーマスの母親レナーテさんは筆まめでしばしば便りをくれた。2014年の11月の彼女の手紙に、トーマスが膵臓癌にやられているが、肝臓癌への転移は20％抑えられたとか、息子はスウェーデンでの膵臓癌の治療実験

ライプツィヒ独日協会から送られてきた訃報の葉書

での被験者になることに期待を寄せている、それは実現するであろうとか記されていてびっくりした。その体調でも学校の勤めには励んでいるということなので、私は（素人の浅はかさ！）楽観視していたところ、半年後の昨年５月下旬レナーテさんから訃報をいただいた。トーマスがホスピスで息を引き取ったのは３月12日のことであり、５月の今ごろになってようやく私への手紙を書く勇気が生まれたとあるのを読んで、息子の予期せぬ早世に直面したその悲痛さには察するに余りあるものがあったが、私の下手なドイツ語では型どおりの弔意を書き送るしかなかった。そのことを残念に思う私の気持ちをいささか慰めてくれたのは、４月９日に行われたライプツィヒでの葬儀に駐独日本大使夫妻が参列され、そしてそれ以前にトーマスにたいして日本政府による叙勲がおこなわれていたということである。

トーマスの後を継いでライプツィヒ独日協会の会長に就任したRoy Richterという方からのE-Mailには次のようにある。„Er (Thomas Schulze) starb am 12. 03. 2015 und wurde am 09. 04. 2015 im Beisein des Botschafters Japans auf dem Südfriedhof in Leipzig im Schatten des Völkerschlachtdenkmals beigesetzt. Über hundert Freunde und Angehörige begleiteten ihn auf seinem letzten Weg[...]Seiner Frau und seinem Sohn geht es soweit gut. Wir sind freundschaftlich verbunden und unterstützen sie in allen Belangen.“（彼は2015年３月12日に亡くなり、2015年４月９日、駐ドイツ日本大使の参列のもと、ライプツィヒ南墓地の諸国民戦争記念碑のかたわらに葬られました。100名を超す友人たちや親族の方々が見送られました。〔中略〕奥様と息子さんはこれまでのところお元気です。私たちライプツィヒ独日協会会員はおふたりに変わらぬ友情を抱き、あらゆる点でおふたりを支えていきます。）

こういった素晴らしい日独交流があることに私は感動を覚えずにはいられない。

（いなもと めぐむ 会員、福岡大学名誉教授）

言花

もはや、「言葉」では、満足できない。

●

小さくても雄々しく咲いているものを。
実をなす季節を纏っているものを。
一摑みの文章。一握りの作家。
毒があってもいい。甘い蜜ならなおのこと。
言花をもつ本が、一冊でも多く陽を集めるよう。
人々に、色と薫りを運ぶよう。

●

いま、ここに種を蒔く。

同人誌・会報・機関誌、
小説集、歌集、句集、自分史などの
自費出版物を編集発行します。

花書院
図書出版
〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9番2号
TEL.092-526-0287　FAX.092-524-4411

城島印刷株式会社　〒810-0012　福岡市中央区白金2丁目9番6号
TEL.092-531-7102　FAX.092-524-4411

# ドイツ語専攻の大学を夢見る高校生

本田 和親

私が西日本日独協会の語学講座（入門クラス）を担当するようになって５年目を迎える。毎年平均して10〜12、３名の受講者があるので、これまでに50名を越える生徒さんに接したことになる。年齢や経歴も異なれば、動機となった関心事も、ドイツ語そのものであったり、音楽、サッカー、名所・旧跡巡りの観光であったりと様々であるが、それに近づく最初の関門が「ことば」、つまりドイツ語学習なのである。ドイツ語は習い始めが大変で、私は、春・夏学期に14回、秋・冬学期に14回、時間にして合計35時間という制約の中で、何を、どこまで、いかに効率よく教えるかに絶えず腐心している。

例えば、習い始めに教科書を広げると、定冠詞をはじめとしてたくさんの冠詞類の変化表が出てくる。ドイツ語学習においては英語との違いを知ることが理解を早める有効な手段であると思っている私は、いわゆる「格変化」（Deklination）の重要性を英語と比較して次のように説明する。英語の My brother loves her sister. はドイツ語では Mein Bruder liebt ihre Schwester. である。では、定動詞 loves および liebt の前後を入れ替えてみるとどうか。英語 Her sister loves my brother. は前の文と意味が異なる。ところがドイツ語 Ihre Schwester liebt mein Bruder. は前と同じ意味なのである。秘密は、名詞の文中でのはたらきを示す冠詞類の語尾変化、つまり「格変化」にある。――こうしてドイツ語における「格変化」の重要性を認識してもらった上で、冠詞類の変化表に改めて目を向ける。

このように知恵をしぼりながら一通りドイツ文法の概略を説明して生徒さん達を次のステップへ送り出しているが、受講生の大半は社会人なので、中・高生が入ってくると少々気になる。高校１年生の女子生徒が受講したのは３年ほど前のことだった。理由を聞いてみると次のような事情であった。学校には交換留学の制度があり応募して合格し、オーストリアに行くことになったが、ドイツ語の知識は全くないので、向こうへ行ったとき少しでも不安を軽減するために多少なりともドイツ語に対する予備知識を身につけておきたい、ということであった。学校に通いながらの受講であり、行事や部活等で時折休むこともあったが、出発近くまでまじめに通ってきた。日程の関係で接続法を含む一部の文法は教えられないままであったが、どうにか最低限のことは吸収してもらって送り出した。

昨年秋その彼女から帰国の挨拶をかねて相談したいことがあるとの連絡があった。相談の内容は大学進学に関わることで、大学は出来ればドイツ語学科のあるところへ進みたいというのが彼女の意向であった。ただ、帰国してからセンター試験のドイツ語の過去問に取り組んでみたが、なかなか70点以上が取れないというのである。彼女の自己診断では、きちんとした文法が身についていないのが70点どまりの原因であるという。向こうでの生活が始まって２、３ヶ月は苦労したが、それ以降は日常のコミュニケーションには不自由を感じなくなったとのことである。彼女は１年留学したので高校は１年留年した形になり、現在は高校２年生で、入試までまだ１年以上の時間的余裕がある。私は彼女に、もし個人的に週１回私のところに来る

意志があるなら、曜日、時間はなるべく彼女の都合に合わせる（彼女によると学校の行事等で時々変更する可能性があるとのことであった）ので両親と相談してみなさいと伝えた。すぐに返事があり、かくして昨年11月から１対１の授業が始まり今に至っている。

彼女のドイツ語は当然のことながら完全にオーストリア・ドイツ語そのものになっている。s が母音と一緒になっても濁らない特徴も完全に身に付いており、sagen（言う）は何度出てきてもサーゲンだ。私は手持ちの文法問題集や大学入試問題集、推理小説等を組み合わせて一緒に取り組んでいるが、彼女が自己診断したように文法問題に弱点があるのは明らかである。今後はここに焦点を合わせて力をつけるようにしたいと思っている。ただ何と言っても呑み込みの早さには救われる。

こういうことがあった。形容詞の語尾変化の問題がかなり不正確だったので、向こうでは会話のとき語尾変化はどうしていたの、と聞くと「勘」で適当に変化させていたとの返事であった。確かに形容詞の語尾変化など無視しても、意味を取り違えることはほとんどない。しかしこれもドイツ語の大きな特色である「格変化」の一環なので、少し時間をかけて変化のメカニズムを説明したところ、あっという間に理解してくれた。まさに教師冥利に尽きる一こまであった。このような事を経て彼女との向き合いは私の大きな楽しみであり、またおおげさに言えば、生きがいになりつつある。来年の入試はきっと良い結果になるものと信じている。

彼女に１年遅れて再び一人の女子高生が受講生となった。姓が同じであり、聞けば高校もおなじである。てっきり妹か親戚ではないかと思ったがそうではなかった。ただ彼女の受講の理由も交換留学制度によるオーストリアへの留学であり、昨年８月に旅立った。目下向こうでドイツ語と格闘中のはずである。今年の秋には帰国するが、もし彼女も大学をドイツ語専攻にしたいと言ってきたらどうしようかと不安と期待に包まれた昨今である。

（ほんだ かずみ 会員、広島大学非常勤講師）

藤 産婦人科
Toh Maternity & Women's Clinic
◎診療時間　月･火･水･金／9：00～12：30　14：00～18：00
木･土／9：00～12：30
◎休診日　日･祝日
〒811-2405 糟屋郡篠栗町大字篠栗4868－7
TEL 092-947-0358　FAX 092-947-1058

# ワインの会

5月特別例会 Mai

ワインの会実行委員会副委員長　藤野 成爾

近年５月例会は、「ドイツワインと料理を楽しむ会」として千鳥屋呉服町本店で開催されていたが、昨年から調理設備がなくなり、メニューの選択の幅が少なくなった。今回は会場で調理をしない「ワインの会」として産地をフランケンに絞り、おなじみのソーセージ・ハム類に加えて、ドイツ産チーズ、ドイツ人の春の食卓に欠かせないシュパルゲル（白アスパラガス）を提供することにした。

北芝副会長の司会進行のもと、池田会長の和やかな挨拶でスタートし、岡嶋副会長の音頭によりプファルツ産のゼクト（発泡性ワイン）で乾杯した。小森会員によりバイエルン州北部フランケン地方のワイン３種類の紹介があった。

フランケンワインはマイン川流域の斜面で収穫された白ブドウから造られる白ワインが主流で、かつてはボックスボイテル（山羊のふぐり）と呼ばれる丸い扁平瓶に詰められていて、他の産地との区別が明瞭だった。しかし昨今は収納効率の良さから一般的な形のワイン瓶に詰められることも多いそうだ。写真の左から２番目がボックスボイテル。いずれも辛口で引き締まった味のワインで、アロマの違いなどの説明を聞きなるほどと感じつつも、美味しさに杯を重ね、会話が弾むにつれて相違が曖昧模糊になっていったのは私だけだっただろうか……。

ハム・ソーセージ類は、例年通り小林会員によって鹿児島産の黒豚肉と黒牛肉を原料としたドイツ仕込みの７種類が用意され、ミックスサラダも添えられていた。チーズは筆者が３種類用意し、とりわけヴァイス・ブラウ・ケーゼという白カビの中に青カビが入ったクリーミーなチーズは珍しかったようだ。今回の目玉、白アスパラガスの着想から手配、調理、ソース作りまで一連の奮戦と当日の皆さんの感嘆の様子については、松野会員の別稿をご覧いただきたい。例年通りスベンスカのライ麦入りのドイツパンと千鳥屋のデザート菓子も賞味した。

会場風景

今回の参加者は41名、ワイン等の紹介が終わる前からあちこちで話が盛り上がり、他のテーブルに行って話す人も多く、予定の２時間があっという間に過ぎ、30分遅く閉会となった。

今回は、非会員であるが、わが協会の会員と縁の深い旧ウイーン倶楽部（ウイーンフィルとの交流を楽しむ会？）のメンバー８人を迎え、音楽の話も交わされ、華やかさを添えていただいた。楽しく飲んで食べて語らう会に、次回はさらに多くの会員が集うように知恵を絞りたいと思う。

最後に当日供されたものに関するデータを記しておこう。

*

**小森弘喜会員のセレクトによるワイン：**

1）生産地　2）生産者　3）品種　4）等級　5）味わい
写真左から

**Dr. Deinhard Deidesheim**　1）Pfalz　2）Weingut von Winnig　3）Riesling Extra Brut　4）[Sekt: Sparkling wine]　5）extra trocken

**Weingalerie Grauer Burgunder**（ボックスボイテル瓶）1）Franken　2）GWF（Winzergemeinschaft Franken eG）　3）Grauer Burgunder　4）Q.b.A.　5）trocken

**Scheurebe Kaspar'S 88**　1）Franken　2）Weingut Schloss Sommerhausen　3）Scheurebe　4）Q.b.A.　5）trocken

**Schloss Sommerhausen Dinarazade**

1）Franken　2）Weingut Schloss Sommerhausen　3）cuvée: Muskatsilvaner & Muskateller　4）Q.b.A.　5）trocken

*

**小林武治郎会員のセレクトによるソーセージ・サラミ・ハム類：**

**ヤークトヴルスト**（豚＋牛）、**ビアシンケン**（豚＋牛）、**パプリカリオナー**（豚＋牛）、**コッホサラミ**（豚＋牛）、**ボンレスハム**（豚）、**ロースハム**（豚）、**ラックスシンケン**（豚）

*

ワイン

**筆者のセレクトによるチーズ：**

**カンボゾーラ**（ドイツ産：表面に白カビを、内部に青カビを生やせたもの）

**スモークゴーダ**（ドイツ産：プロセスチーズでなくナチュラルゴーダチーズを燻製にしたもの）

**エメンタール**（スイス産：著名なバイエルン産エメンタールに類似したもの）

*

**松野正邦会員の特別調達による白アスパラガス**については、先にも触れたように、以下の別稿をご覧いただきたい。

（ふじの せいじ 会員、チーズプロフェッショナル協会顧問）

# アスパラガスについて

松野 正邦

ドイツにおける春の旬の野菜といえば何といっても「白アスパラガス」でしょう。アスパラガスのドイツ語はシュパルゲル（Spargel）、白の場合は正式にはヴァイサー・シュパルゲル（weißer Spargel）と呼ぶべきですが、ふつうはシュパルゲルといえば白アスパラガスのことで、白が圧倒的主流、いやそれしか眼中にないという感じです。アスパラガスの季節はおおよそ4月初旬くらいに始まり、終わりは6月24日（洗礼者ヨハネの祝日、夏至）と決まっています。翌年の収穫のためには秋の初霜が降りる前に最低100日間は養分を蓄える必要があるからです。

白アスパラガス

春から初夏にかけて、店頭には新鮮な朝掘りものがたくさん並びます。直径が３㎝もあろうかという太くて長いものが束にくくって売られており、並みのもので一束１㎏（14、５本？）が1000円というところでしょうか。ともかく安くて新鮮で旨い。これにオランデーズソースやバターソースをかけ、ハムやソーセージと共に食するのがドイツ流の一般的な食べ方です。この季節になるとレストランでも誰もが競って白アスパラガス料理を注文し、春の喜びを満喫しているという風情です。

わが九州では、アスパラガスは２月から10月まで見られます。中でも、秋のうちに養分をたくさん取り込み、冬の深い休眠から覚醒して芽生える春芽は栄養価、食味共に、最高で、日本でも旬は春といえます。５月上旬頃まで春芽が採取され、その後は夏芽のために、１株辺り４～５本の芽を立茎させ、側枝、葉（正確には葉状茎）を展開させ、光合成や施肥により養分の蓄積を図りつつ、併行して芽の収穫も継続します。ちなみに、本当の葉は、茎の側面についている尖った三角形の部位で、形から「鱗片葉」と呼ばれています。

白アスパラガスは立茎前に遮光して作られるため春限定といってよく、初夏にかけて出回るのは、白アスパラガス収穫に特化した圃場からのもの以外は、本州や北海道の産となります。

今回は、ワイン会の開催が５月末で本来なら無理なところを、佐賀市の生産農家に特別にお願いして作っていただきました。

この日供された白アスパラガスの素姓はつぎの通りです。

**産　地**　佐賀市鍋島町（佐賀は全国６～７位の栽培面積を有し、単収〔面積当り収穫量〕は全国１位）

**品　種**　ウェルカム

**作　型**　雨よけ栽培（一般的な栽培方法で、無加温ハウスを利用）、ハウス内をフィルムで遮光

**調理法**　茎の皮を剥き下部を取り去り、適量の塩と剥いた皮と共に少時ボイル

ちなみに、今回皮剥きとボイルをサービスで引き受けて下さったのは、青年部会員の三浦杏奈さんがオーナーシェフをつとめる鉄板焼きの「アイン」（福岡市中央区天神１－13－19、天神MARUビルB1F)。オランデーズソースは池田会長のドイツ仕込みのお手製で、好評でした。

最後に参考までに申し添えますと、アスパラガスの栽培は比較的容易で、家庭菜園やベランダガーデニングでも可能です。栽培のコツは、立茎を重要視して、決して収穫し過ぎないこと、立茎以降は雨に当てないこと、春芽前の１月下旬や、収穫後に肥料を施すことなどです。

栄養的には疲労回復に効果的といわれるアスパラギン酸や血管を強くするルチン、造血や動脈硬化予防に効果的な葉酸、ミネラルでは血圧や塩分バランスの調整に重要な働きをするカリウムや食欲増進に必要な亜鉛が多く含まれます。栄養価は白より緑が高いです。

ドイツの家庭ではアスパラ専用の背高ボイル鍋やピーラーが普及しており、日本国内でも購入できます。両者とも他の調理にも利用できますので、ドイツ贔屓の方はいかがでしょう。

（まつの まさくに 会員）

# ベネズエラ・ギアナ高地旅行
## ― ロライマ山・グランサバナトレッキング、エンジェルフォール ―



立花 健吾

**はじめに　― ツアー概要と目的地 ―**

この旅行はある旅行会社の企画ツアー「秘境ギアナ高地を歩く（ベネズエラ）ロライマ山へリトレックとエンジェルフォール15日間」への参加であった。このような「海外ツアー」に初めて参加した。若い頃からこの地域に興味を持ち、訪れたいと思っていたが、この歳になってやっとそれが実現したわけである。旅行全体はその内容がよくできていて、何の不安もなく、実に新鮮、刺激的、面白かった。

参加者は14名（男性９名女性５名、平均年齢は約70歳）、これに若い女性の添乗員が付いてくれた。実施期間は2015年１月27日（火）～２月10日（火）、13泊15日間（復路日付変更線：機中１日を含む）。旅行の目的地はギアナ高地のほぼ中央に位置する、ベネズエラ東部の「カナイマ国立公園」である（下図参照）。中南米（ラテンアメリカ）北部の、メキシコ湾・カリブ海沿岸諸国は馴染みが少なく、今回、ベネズエラが赤道の北（つまり北半球）にあることをあらためて認識した。

旅行ルート概略と目的地の位置

ところで、ギアナ高地（楯状地）は南米大陸の北部、コロンビア、ベネズエラ、ガイアナ、スリナム、フランス領ギアナ、ブラジルの６か国と地域にまたがる高原地帯である。面積は日本の約2.5倍ほどと思われる。カナイマ国立公園は、面積約３万平方キロメートルで、日本の中国地方に匹敵する。そこには、ほぼ全域にグラン・サバナ（大高原）が広がり、ほぼ垂直に切り立ったテプイ（テーブルマウンテン）が数多く点在する。その数は100を超えるといわれている。この公園内に、標高最高のロライマ山（2830m）、落差世界最大（979m）の滝布エンジェルフォールを有するアウヤン・テプイ、未だ人が滅多に入らないチマンタのテプイ群がある。

ギアナ高地を形成している岩石は、主に20億年から14億年前の先カンブリア時代に堆積した砂岩や珪岩からなる。その後、この地域全体が隆起し、途方もない時間の経過の中で、５千万年前にほぼ現在のような楯状の高原となったようである。ギアナ（ガイアナ）は水の国という意味であり、その名の通り、ギアナ高地は年間4000mm を超える降水量がある。乾季は12月から４月、雨季は５月から11月である。

**ベネズエラ内旅行ルートと報告概要**

今回の報告では、はじめの３日間とおわりの３日間は省略した。いずれも航空機、専用自動車での移動だからである。卓話では、次のカナイマ国立公園内９日間の旅行を、画像によって報告した（次頁旅行ルート図参照）。

＊１月30日（金）　カモイランからパライ・テプイまで。

＊１月31日（土）～２月４日（水）　ロライマ山山頂台地とグランサバナのトレッキング。
＊２月５日（木）～２月６日（金）　サンタ・エレナからカナイマまでのセスナ機遊覧飛行、カナイマからエンジェルフォール・キャンプまでのボートクルージング、エンジェルフォール見物。
＊２月７日（土）　カナイマ湖の滝巡り。

ベネズエラ内旅行ルート

## 報告と思い出

日本からロライマ山登山基地のパライ・テプイに着くまで３泊４日、遠かっただけに、標高は低いが（1200m）広々したこの頂上台地から東部テプイ群を眺望した時、非常に感動した。中でもやはり一番東のロライマ山（Roraima）、その左隣の聖なるテプイとされるクケナン・テプイ（Kukenán）の姿は独特の雰囲気を持ち、壮大、威厳すら感じられた。明日、ロライマ山山頂台地に立つのだと思うと、どのような見知らぬ世界が展開するのか、期待感がたかまった。

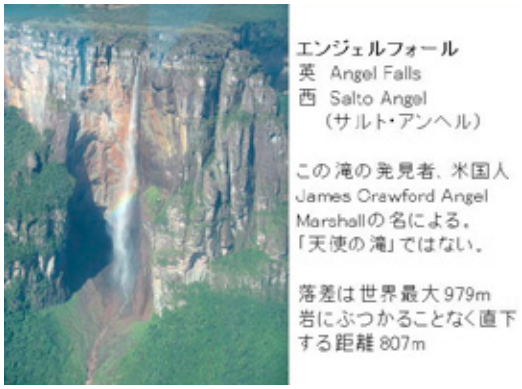
パライ・テプイ到着の翌日、ヘリコプターでロライマ山頂に登った。着陸はテント場の通称「ホテル・ガチァロ（Guacharo）」近くであった。これは山頂台地南西部に点在する７つの「ホテル」の中で一番南にある大きな洞穴のホテルで、条件が一番いいらしい。ヘリポートのすぐ先の断崖上には、クケナン・テプイとグラン・サバナの眺めのよい展望所もある。部屋（テント）、トイレ、料理・食事、飲物などなど、すべて満足。特記すべきことがある。驚いたことに、夕食時、通常の料理・飲物の他に、赤ワインと「ロン（Ron）」が出た。特にロンが美味しかった。この酒のことは前もって知ってはいたが（そして、飲む覚悟でいたが）、まさかロライマ山頂で味わえるとは思いもつかなかった。ロンをチタンのコップにいただき、テントの中や、深夜輝く南十字星を眺めながら味わった。

ロライマ山山頂台地は標高2700m、とにかく岩ばかりである。しかも、その岩石は20億年から14億年前のもの。人間の気配は全くない。下山の日も含め、その岩の上を３日間歩き回ったのであるが、これは今までの登山とは大いに異なる、まことに不思議な感じのするトレッキングであった。奇岩・怪岩が無数に現れるとはいえ、また、多少のアップダウンはあるのだが、歩きそのものはシンプルである。しかし、岩上を流れる水の無上の澄明さ、この山固有種の動植物との出会いに感激した。特に、野生の土蜘蛛の一種「タランチュラ」を観察できたのは幸運だった（これは滅多にないとのこと）。

ロライマ、クケナンとグラン・サバナ

ロライマ山からの断崖の下山、２日にわたるグラン・サバナのトレッキングも（大変きつかったけれども）楽しかった。

サンタ・エレナからカナイマまで、セスナ機で約１時間半、グランサバナを斜めに縦断する遊覧飛行は実に新鮮で楽しめた。途中、東部テプイ群を遠望し、チマンタのテプイ群の側をかすめ、最大のアウヤン・テプイの上を横断した。エンジェルフォールの上をセスナ機が旋回してくれたので、世界最大の落差を持つこの滝を機上から思う存分眺めることができた。この時は乾期であり、その水量は少なかったが、それでもやはりその姿は圧倒するものがあった。雨期ここを訪れるならば、壮大な景観を体感することになるであろう。




エンジェルフォール

この日の午後、５時間あまりかけて、カナイマからエンジェルフォール・キャンプまでカラオ川とその支流チュルン川を船外機付ボートで遡った。この長時間のクルージングは思っていたより遙かに面白かった。途中、何度か大小の中州歩きが適度の気分転換になった。また、ボート上から眺める周囲の景観の変化が実に面白い。特に、チュルン川に入り、アウヤン・テプイの奥深くへ進む辺り、両岸、ジャングルに覆われ、頭上高くテプイの断崖が迫る。夕日に映える右岸（東）の断崖は美しく輝き、荘厳である。いくつかの瀬を難儀して上り、キャンプに近づくと、彼方にエンジェルフォールが見え、大歓声があがった。この日はキャンプで現地スタイルのハンモック泊。ちょっと心配していたが、それは杞憂であった。気持ちよく眠れた。

翌日、ジャングルの中をこの滝の展望所までトレッキング。さらにそこから10分ほどの、エンジェルフォール下流の滝壺まで下り（落下する水は霧状になるため、滝の直下に滝壺はない）、私も含め数名がしばし泳ぎを楽しんだ。何とも贅沢な水浴びであった。

チュルン川のクルージング

## おわりに

今回、ベネズエラ国内の一部を旅行したわけであるが、何となく非常に日本と違うという感じを抱いた。いわばある種の「違和感」である。帰国後、その原因の一つが「メガネ」ではないかと思われた。ポーターや船頭たちは全員眼鏡をかけていない。また、総じて眼鏡をかけているベネズエラの人たちをあまり見かけなかった。私も含め、日本人で眼鏡をかけている人は多い。この違いは何なのか。メガネをかけていないからといって、必ずしも「見る」ことに不自由ではないとは言えないかもしれないが、少なくとも我々ほど「厳密に見る必要がない」のではないかと思われる。このことが、あのギアナ高地の印象と交差する。

この旅行の詳細な記録は次のウェブサイトに掲載しています。ご覧いただければ幸いです。

http://kenta-sanjin.moo.jp/index.html

（たちばな けんご 会員、福岡大学名誉教授）

---

## 6月例会感想

### 愉しい日独協会例会

萱野 通子

骨の髄まで野次馬の私ですが勇気は無いので、地球上の生物と事象の色々を痛い思いをしないで見聞きするために、本を読み講演を聴きます。今回のギアナ高地のお話も期待に違わず興味深く、愉しく拝聴させていただきました。

もちろん、内容によっては肉体的には無傷でも心を痛めることもありますが、自身の意思で積極的に出張り加わり、痛み無し愉しみだけの集りは、ほぼ八十年の経験で日独協会の例会だけでございます。もともと、幼時の兄達の影響で何となくドイツという国が好きでした。兄達の本棚にはドイツの詩集があり耳ざわり良い暗誦を度々聴かされました。昭和17年頃、英語の本は片付けられましたので、その時、ドイツ語ならいいのだと印象づけられました。

日独協会の存在を知った時、入会を申し込みましたら、あっさり受け入れて下さったので、以来、例会を愉しませて頂いています。講演会があり音楽会があり、何度か野外例会ということでピクニックもございました。ご家族お揃いでご参加になる方々のおかげで、集りの雰囲気がぐっと穏やかになり華やかにもなります。講演の場合、演台にお立ちになる方は年齢が混り合う聴衆に困惑なさることもおありかも知れませんが、皆様うまくやり過ごして下さって全員で愉しんでいることも、私の感謝の由縁です。

例会が続きますように！

（かやの みちこ 会員、元九州大学文部事務官）

# ドイツ大使歓迎の夕べ
## ― 講演と懇親会 ―



池田 紘一

2015年８月７日、駐日ドイツ大使フォン・ヴェアテルン氏（Dr. Hans Carl von Werthern）をお迎えして講演と歓迎の夕べが開かれた。広島と長崎の原爆記念日に列席される合間を利用して西日本日独協会の会員に会いたいとの、大使の側からの急なお申し出による催しであったが、そこに、ご挨拶の中にもあったように、東京から遠く離れた地方の人々とできるかぎり交流を持ちたいとの大使の強いお気持ちがはたらいていたことは申すまでもない。お盆前の急な企画であったにもかかわらず予想外の盛況で、大使の政治家としての見識と日独関係の未来に対する思い、そして何よりも、その温厚で真摯なお人柄に誰しもが感銘を受け、会員にとっても協会にとっても記念すべき夕べとなった。

講演は「メルケル首相訪日後の今後の日独関係」と題され、原稿なしの即興、ただし大使館通訳・翻訳部長のフォン・デア・オステン女史の見事な通訳が付いた。３月９日、10日のメルケル首相の来日は８月の段階では未だ記憶に新しく、ためにこのような演題にされたのであるが、話の中心は今後の日独関係にしぼられた。まずはその要点をかいつまんで紹介しよう。ただし、私のメモと記憶を頼りに箇条書き風に記述することをお許しいただきたい。

*

ドイツと日本はたしかに地理的には遠く離れているが、共に民主主義を標榜する国であるということの他に種々の共通点を有し、共通の問題を抱えており、今後とも大いに知恵を出し合い、相互に協力していくことが重要である。なかでも、

講演する大使

１）人口動態（少子高齢化）、２）環境問題（温暖化とエネルギー）、３）戦争体験（歴史から何を学ぶか）の面で学び合えることは沢山ある。

１）日本とドイツほど少子化の進んでいる国はない。20〜30年後にはドイツも日本と同じ状況に直面する。自分にも娘が三人いるが、今夜若い人の参加が多いのは嬉しい驚きである。ドイツでは1960年から1970年にかけて外国人労働者（Gastarbeiter）を募集する政策がとられた。ドイツ全土で深刻な労働力不足に悩まされていたからである。当時は、こうして集められた労働者は数年後にはそれぞれの出身国に戻るであろうと思われていた。ところが大抵の人々がそのままドイツに留まった。その結果、70年代の終わりに国は政策を変更し、彼らをドイツ人として同化する方向に踏み切ったのである。しかし、問題がないわけではない。大切なのは彼らを含めた国民相互のコンセンサスである。

２）ドイツはフクシマの惨劇の直後、2022年までに脱原発を成し遂げることを決断し、再生

エネルギー政策（風力・水力・太陽光発電）、さらには節電可能性などを模索している。この点で日本はドイツから学べることがあるだろう。

逆に、ドイツが日本から学べることもある。たとえば今朝のことだが、私は北九州スマートコミュニティ構想の実情を視察した。1960年代までは製鉄や炭鉱のもたらす環境問題に苦しんだ経験がいま新たに実を結び、北九州はITなども取り入れ、スマートシティ (smart city) として 蘇りつつある。これは本当に素晴らしいことで、ドイツが学ぶべき点が多々ある。

3）第二次世界大戦の戦争体験をどう生かすか、過去とどう向き合うか――これはとりわけて大きなドイツと日本の共通問題であり、戦後70年の節目ということもあって、マスコミからもドイツのケースについてよく質問を受ける。

6日朝、妻と共に広島で、二人の小学生による平和宣言を聞いて感銘を受けた。子どもは経験していないが、子どもに伝えることが肝心なのだ。被爆体験者はますます少なくなってゆく、だからいま子どもたちに語り伝えなければならない。ヒロシマ、ナガサキが日本人にもたらした苦しみと犠牲はいくら語っても語り尽くされることはないだろう。

しかしその一方で、日本が他国の人々に与えた苦しみと犠牲のことも忘れてはなるまい。ドイツでは学校の授業で、ドイツが外国人に何をしたか、特にポーランドなどの東ヨーロッパで何をしたかについて、子どもたちに徹底的に教えている。自らの過去に対する記憶は、かつての敵国の人々や犠牲者が抱いている記憶、そして彼らが嘗めた辛酸の記憶を含まないかぎり完全とは言えない。戦後のドイツがかつての敵国フランスと予想外の早さで友好関係を回復できたのも、このようなドイツの姿勢と無関係ではない。

誤解がないように申し添えるが、ドイツが正しく日本が間違っているというわけでは決してない。ドイツが歩いた道が万能ではない。戦後

懇親会　右より　大使、フォン・デア・オステン女史、エリーザベト大使夫人

ドイツについていえば、1945年の段階ですでに、フランスから友情の手が差し伸べられ、未来志向の話し合いが持たれるという、まことに幸運な事態に恵まれた。同時にそれがフランス側のロベール・シューマン、ドゴール、ドイツ側のアデナウアーのような人物によって推し進められたということも幸運と呼ぶ他はない。ドイツ側はナチ時代の残虐行為の責任を認め、自分たちに直接の責任はないとしても二度と繰り返さない責任がある、1933年から45年までの事実を決して忘れないと誓い、かくして宿敵は和解し、友人となった。もちろん、ヨーロッパの戦後における経験をそのまま世界の他の国々や地域に適用することはできない。しかしながら、ドイツとフランスのような「不倶戴天の敵」ともいうべき国同士が親密な友好国になり得たという事実は、アジアの地で相互理解と合意を求めて努力する国々にとっても希望と励ましを意味するのではあるまいか。

この点で最後にぜひとも付け加えておきたいのは、独仏の友好関係回復の背景に、大きな原動力の一つとして、両国が取り組んだ「青少年交流事業」があったことである。実際上ほぼすべてといっていいドイツ人とフランス人がその青少年期に相手国の青少年たちと友情を結んだという事実は、国々や民族の相互理解の要因と

していくら高く評価してもしきれないほどである。同じように日本における日独協会とドイツにおける独日協会も、特に青少年や若者の相互交流を促進することによって、両国民の相互理解に多大の寄与をなすことは間違いない。

*

続いて活潑な質疑応答が行われたが、大使の答えから二点のみ以下に要約する。

1）ドイツは他ならぬフランスおよびポーランドとの和解のプロセスで、論より証拠というか、言葉よりも行為がはるかに重要であるということを経験した。周知のように当時の独首相ヴィリー・ブラントは1972年、ワルシャワのユダヤ人ゲットー蜂起記念碑の前で跪き、コール独首相とミッテラン仏大統領は1984年、ヴェルダンの戦没者墓地で握手を交わしたが、その行為は、ドイツがふたたび世界の信頼と尊敬を獲得する上で、おそらくは友好条約や謝罪や賠償金以上の力を発揮したのではないかと思われる。

2）外国人労働者が募集されたのは、講演の中でも触れたように、1960年代に始まるドイツの経済復興において労働力が不足したからである。なかでもドイツ人自身がやりたがらない仕事、たとえば重労働や汚い仕事で人手が足りなかった。今日でもドイツの農業では、機械では出来ない収穫作業については、東ヨーロッパないしは南東ヨーロッパからの季節労働者なしにはやっていけない。のちになって漸くドイツ人は、外国人労働者が豊かさをもたらす真の宝だということに気づいたのである。今日では、あらゆる社会層や職業においてドイツ移住者の第二、第三世代の進出が著しい。ドイツ緑の党の連邦議会議員ジェム・エズデミル（Cem Özdemir）や、高名な弁護士であり、かつてドイツ自由民主党（FDP）の政治家として活躍したメフメト・ダイマギューラー（Mehmet Daimagüler）などはその好い例である。

大使と若者たち

*

最後に懇親会の模様について少し紹介しておこう。これがどれほど異例ずくめで予想外の展開を示したかは、のちのち語り草になったほどである。立食パーティであったが、大使と同伴されたエリーザベト夫人とのまわりにはおよそ2時間近くの懇親会の間中人垣が解けず、特に青年部の会員をはじめとする若手会員が列をなして質問の番を待つというぐあいで、そばで見守っていた私の記憶では、大使は最初の乾杯のビールに口を付けられた以外は何も飲まれず、またお皿に取って差し上げた料理には結局手を伸ばされなかった。若者たちへの対応でその時間的余裕がなかったのである。最後に私は「大使は今夜は〈会話〉しか召し上がりませんでしたね」と申し上げたほどであった。

大使はどんな質問にも真剣そのもの、丁寧に言葉を選びながら、率直に、熱心に答えられ、若者たちの感激とこれを見つめる会員たちの讃嘆を一身に集められた。その一端は、以下の松本美和さんと森光一郎さんの文章からも窺い知られるであろう。

なお大使のブログ「ドイツ大使が見た日本」も興味深い。http://young-germany.jp/category/botschaft/

（いけだ こういち 会員、九州大学名誉教授）

8月特別例会感想

## 敗戦から70年・彼我の差

宮崎 亮

「ナチスの暴力支配による非人間的システムからの解放の日」から70年のドイツと「戦後」70年の日本の歴史認識の違いを考えさせられた2015年の夏であった。大使の講演から１週間後、我が国の首相は「あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」と述べた。この国の歴史教科書による先の大戦の記述が次第に少なくなっていることを考えると、私には「過去を忘れましょう」と言っているようにしか聞こえなかった。

今年の１月31日ベルリンでフォン・ヴァイツゼッカー元大統領が94歳の生涯を閉じられた。1985年５月８日（ドイツ敗戦40周年）連邦議会で行なわれた演説を引用させていただく。「罪の有無、老幼いずれを問わず、われわれ全員が過去を引き受けねばなりません。だれもが過去からの帰結に関わり合っており、過去に対する責任を負わされております。」「問題は過去を克服することではありません。さようなことができるわけはありません。後になって過去を変えたり、起こらなかったことにするわけにはまいりません。しかし過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります。非人間的な行為を心に刻もうとしない者は、またそうした危険に陥りやすいのです。」

歴史をめぐって、国際的に対話、協力することは当然である。ドイツとフランス間、ドイツとポーランド間では、長年にわたり、歴史の共通教科書作成の作業が続けられてきた。そこには、「ある国で使われている歴史教科書の記述が隣の国には受け入れがたいということがあってはならない」との考えが当然のこととして受け止められている。このヨーロッパでできていることを東アジアでどう構築できるか。すべての国や民族が同じ歴史観を持つことはできないであろうが、違う見方があっても、それが他者を傷つけず、多様性があって共存できることが必要である。

私たちは東アジアの市民として歴史を学び過去を真摯に反省したい。

（みやざき りょう 会員、木村病院副院長、外科医）

## 大使と出会って

松本 美和

私は、大使とお会いできることを楽しみに８月特別例会および懇親会に参加しました。

講演会で、大使は日独共通の挑戦的課題というテーマのもと、少子高齢化問題、エネルギー問題、そして歴史に何を学びそれを将来へどう活かすかの３つについて話をされました。中でも３つ目に関して「戦後70年を迎える今、その歴史を後世へ語り継ぐ上では、犠牲の片面つまり受けた苦しみだけではなく、もう片面の与えた苦しみをも伝えることが十分な理解に繋が

る」という言葉に、これまで戦争で与えた苦しみに触れることが少なかった私は衝撃を受けました。

また、「日独関係をより豊かにするためには、政治や経済以上に市民同士の交流が大切になる」との言葉はとても魅力的で心に響くものでした。懇親会では、私が日頃直面している問題、人口減少する地方は過疎化にどう取り組むべきかお尋ねすると、「特効薬はない。日独互いに知恵を出し合いそれぞれの地方に合う方策を見出せるよう交流を深めなくてはならない」とお答えいただきました。その姿は、市民の一声一声に真摯に向き合い、まさに市民との交流を大切にしてこられた大使の温かいお人柄を印象付けるものだったと感じています。

今回の特別例会は、日本にとってドイツは交流の関係以上に共に前進していく同志であると再認識できた会でもありました。大使をはじめ出会えた方々との素敵なご縁を大切に、これを機に今後も積極的に活動に参加し、それらを通じて交流を深めていきたいと心新たにしました。

（まつもと みわ 会員、青年部会員、佐賀県太良町役場勤務）

---

## 大使に聞いた“ハタラキカタ”

**森 光一郎**

西日本日独協会の8月特別例会にて、ドイツ大使のヴェアテルン氏とお話できる機会に恵まれました。私がいくつか質問をしてそれにお答え頂く形だったのですが、ヴェアテルン氏はひとつひとつ丁寧にご回答され、その真摯な対応と振る舞いに思慮深さを感じさせる、そういった方でした。会話の中で私が質問させて頂いた中で特に印象深かったのは、「ドイツはなぜ労働生産性の高い社会を維持できているのか」というテーマです。

ドイツは日本よりも総労働時間が少なく、一人当たりのGDPが高い水準で維持されている国際競争力の高い国。その違いは果たして何なのかというお話になったところ、ヴェアテルン氏は働き方に対する考え方の違いではないだろうかということでした。曰く、「働いた時間」を指標にするのではなく「自分の労働による成果」を意識するということだそうです。「自分が働いた時間の長さに満足するのではなく、自分が働くことによって何が得られるのかを常に考えてください」とアドバイスをいただきました。これは公務における会談等の中でも時折挙がるらしく、日本人が興味を抱くテーマの一つだと聞き、驚きました。また、次にスポーツの話になったのですが、ドイツはスポーツに対して非常に積極的で、ぜひ現地で体感してほしい。いつでもドイツにいらしてくださいと言ってくださいました。限られた時間ながら学べたことも多く、非常に有意義な時間でございました。

（もり こういちろう 会員、青年部会員、福岡商工会議所勤務）

# ウルリッヒ・ロスマン氏講演
## 「ドイツ近代史の足跡を訪ねて ― ベルリンとブランデンブルク州 ― 」



加藤 元也

見捨てられ朽ち果てた建物に滅びの美学を感じるのは日本人だけと思いきや、そのような景観を追い求めカメラ片手に世界中を旅行しているドイツ人がいました。それがウルリッヒ・ロスマン氏です（Ulrich Rossmann、ベルリン在住、Arup GmbH勤務、Senior IT Support Analyst/Berlin System Manager、写真家）。

9月例会では、氏が福岡を訪れたのを機に講演をお願いし、彼が撮りためた写真によってドイツ近代史の足跡をたどっていただきました。ここに氏のお話しを再現しながら、その中からいくつかご紹介しましょう。掲載されている写真は白黒ですが、元はカラーです。ドイツ語からの翻訳はベルリン独日協会の Tomoko Kato-Nolden さんが担当しました。

*

私どもの話に関心を持っていただきとても嬉しいです。これからお見せするのは荒れ果て、見捨てられた建物ばかりです。私はそういう建物が好きで写真を撮っており、今回はそのご紹介です。偶然通りかかって見つけたものもありますが、ベルリンにはそんな建物がまだ沢山あります。ではベルリンとブランデンブルク州の歴史的建物に絞って若干のコメントとともにご紹介しましょう。

### ベルリンオリンピック選手村

ベルリンオリンピックは1936年８月に開かれ、デーベリッツ（Döberitz）に選手村が置かれました。54ヘクタールの敷地に約150の建物があり、選手と関係者が宿泊しました。米国の黒人選手ジェシー・オーエンスはこの大会４種目で金メダルを獲得しました。走り幅跳びの銀メダルはドイツ人ルッツ・ロング、銅は日本の田島直人です。表彰式の後ドイツとアメリカの黒人選手が抱き合い会場を一周しました。これがアーリアンの選手としてあるまじき行動とナチ幹部の怒りを買ったのはいうまでもありません。

選手村の中心は「民族の食堂」という全長130mの楕円形の建物です。中には38のキッチンとチーム関係者の食堂、さらに暖房設備、発電設備、冷蔵室や貯蔵庫、作業場や消防署までありました。大会後は野戦病院、軍需工場、歩兵訓練場に使われました。戦後ソ連軍の兵士宿舎となりましたが92年に引き上げ、その後は長く略奪や破壊の対象となってしまいました。

ベルリンオリンピック選手村

### テンペルホーフ飛行場

テンペルホーフ（Tempelhof）の原野で、米国のライトが172m の飛行記録を出したのは1909年でした。24年から大規模な空港建設が始まり、新館が建つと軍・民共用になりまし

た。この空港はヒトラーと建設大臣シュペールの望みどおり当時世界最大規模の建築物でした。戦時中地下は防空壕に拡張され、壁には当時の絵が残っています。ソ連軍が占拠し地下壕の扉を爆破した際、所蔵フィルム・アーカイヴは全て焼け、貴重な記録映画などのフィルムが失われました。ここはベルリン封鎖、東西冷戦、西ベルリンの路線空港時代、ドイツ統一等、実にいろいろな出来事を見てきました。

そして2008年ベルリン州政府の決定により、空港営業は停止され、役目を終えた空港フィールドはイベント、メッセなど市民の憩いの場として開放されています。

テンペルホーフ飛行場

### ラーヴェンスブリュック女子強制収容所

ラーヴェンスブリュック（Ravensbrück）に、ナチがドイツ国内最大の女子強制収容所を建てたのは1939年です。囚人たちは各種作業所や道路工事、畑仕事などに駆り出されました。戦局が深まると計40カ国の占領地域から囚人や子供たちが次々と送られ、共産党員、レジスタンス闘士、ユダヤ系、ロマ・シンティ族、エホバの証人といった人々が収容されました。45年までに13万2000人の女性と子供、２万人の男性、1000人の少女が登録されました。囚人にはカール・ゲープハルト教授の主導で傷口感染の特効薬開発のために人体実験がなされました。ナチは火葬場の隣にガス室を作り、45年４月までに5000人から6000人におよぶ女性と子供を殺しています。当時16歳だったジュリエット・グレコは、レジスタンスの闘士だった母と姉と共に43年にゲシュタポに拘束され収監されました。その後彼女だけフランスのフレンヌ刑務所に移され、３週間後に出ることを許されました。彼女の母と姉も収容所生活と戦争を生き延びています。

45年４月赤軍は収容所を解放し建物を兵士宿舎としました。その後生き残った囚人たちが働きかけ、火葬場周辺を保存して追悼の場としました。

ラーヴェンスブリュック女子強制収容所

### ベーリッツ結核療養所

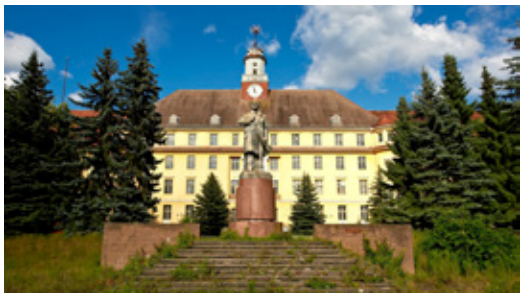
ベルリン南西50km に病棟が立ち並んだベーリッツ療養所（Beelitz-Heilstätten）があります。労働者の肺疾患療養のため1898年から1930年にかけて60棟建設され、敷地は200ヘクタール以上ありました。45年のソ連軍占領後は、国外最大のソ連軍用病院として利用されてきました

ベーリッツ結核療養所

が、ドイツ統一後空き家となり荒れ果てています。ここは映画ロケ地として人気があり、ポランスキーの『戦場のピアニスト』やトム・クルーズ主演『ヴァルキューレ作戦』の一部はここで撮影されました。

**ヴュンスドルフ ソ連赤軍最高司令部跡**

ヴュンスドルフ（Wünsdorf）はベルリンの約40km 南にあります。1910年から兵士宿舎が建てられ、第１次大戦時には帝国国防軍の司令部が置かれました。33年には戦車部隊の本部となっています。45年３月の攻撃で多くの建物が破壊され、ソ連軍にほとんど無抵抗で明け渡されました。ソ連軍はここを駐屯地と定め、７万５千人ものソ連人家族が生活していました。ドイツ人は立入禁止でしたが、幼稚園・学校・お店などもあり、リトル・モスクワと呼ばれていました。94年にソ連軍が引き上げると、260ヘクタールもの無人駐屯地と、地雷や実弾がどこに埋まっているかも分からない実に危険な土地が残されました。



ヴュンスドルフ ソ連赤軍最高司令部跡

*

ほかにもドイツ近代史の証言者として無言で佇んでいる建物を沢山ご紹介頂きましたが、紙面の関係で割愛いたします。

Web 上には、日本旅行の最新画像も含めてロスマン氏の視点で撮った建物や人物の写真が見られるサイトがあります。興味がある方は以下のサイトをご覧ください。

http://www.ulrichrossmann.de/

（かとう もとや 会員、元麒麟麦酒勤務）

---

## ベルリン メモアール

古賀 勲

９月例会の卓話は大変興味深く拝聴しました。日本の同時代と比べて考えると一段と興味深いものでした。全部の感想を書くことは紙数の関係で出来ませんが、テンペルホーフ空港とベルリンオリンピックについて述べてみたいと思います。

初めてベルリンを訪れたのは1973年、フランクフルトでの研修が決まり、会社に許可を貰い、数日前に東京を立ちベルリンを訪れたのです。ハンブルグでパンナムに乗り換えてベルリンへ向かいました。ドイツ統一までルフトハンザはベルリンへ乗り入れる事は出来ませんでした。到着した空港がテンペルホーフで、半円形のハンガーが戦前からの建物だと想像出来ました。この空港は閉鎖されたことを知り大変残念です。現在のテーゲルよりベルリンの中心、ティーアガルテンに近くて便利な空港でした。やはりテンペルホーフ空港で一番先に浮かぶのがベルリン大空輸です。旧東ドイツのほぼ真ん中に位置したベルリンはまさに陸の孤島でし

た。ベルリンへの物資輸送は決められた陸路と鉄道でしたが、冷戦のさなか、当時のソ連はこのルートを閉鎖してしまいました。そのためアメリカをはじめ、連合国側は全ての物資を空輸することにして、この時このテンペルホーフに航空機で物資を輸送したのです。

ドイツの再統一が達成され、その再統一の興奮から、ベルリンへ日本から一番に乗り入れるのはルフトハンザだと言っていました。だが冷静に考えてみると、ジャンボ機の乗り入れ可能な空港は旧東ベルリンのシェーネフェルト空港しかなく、設備の面やマーケティングを詳しく調査した結果、乗り入れを断念しました。JALはルフトハンザに代ってフランクフルト経由でベルリンに一番に乗り入れましたが、利益を全く上げる事が出来ずに２年足らずで運行を取りやめました。当時のルフトハンザトップの判断が正しかったと証明される結果になりました。首都になったベルリンへは、いまだ日本から乗り入れていませんし、乗り入れの検討もされていないようです。ルフトハンザもハブ空港はフランクフルトとミュンヘンに変更はありません。

この最初の訪問で、出来る限り市内を見て回りましたが、オリンピックスタジアムのある東ベルリンへ入るのは観光バスしか方法がありませんでした。有名なチェックポイント・チャーリーの厳重な検査、ミラーでバスの下まで調べ、ニコリともしない係員がパスポートをチェックしていたのを今もはっきり覚えています。１対１の交換レートで東ドイツのマルクと強制的に交換しなければなりませんでした。当時の東のマルクは西ドイツのマルクの５分の１程度の価値しかなかったと思います。オリンピックスタジアムはきれいに整備されていましたが、殺風景な感じで、前に観たレニー・リーフェンシュタールのベルリンオリンピックの記録映画「オリンピア」とは比較出来ないくらいさびしいものでした。勿論、比較するのもおかしいですが、旧東ドイツでは単なるオリンピック会場跡というだけで、生命力のない無機的なものに感じられました。

初めてのベルリン訪問で感じたことは、東西ドイツの経済の格差、そして東ベルリンでは表通りだけしか見る事ができませんでしたが、まだ瓦礫のまま残っているところを望遠レンズで遠くに少し見る事はできました。

卓話では日ごろ目にしないようなところを写真とともに詳しい説明もあり、機会があればベルリンに行って自分の目で確かめたくなりました。

（こが いさお 会員、元ルフトハンザ航空勤務）

# ドイツ近現代卓上ゲームの歴史にみるドイツらしさ



平松 智久

2015年３月７日、ドイツテレビ ZDF で夕刻のゴールデンタイムに「ゲームが始まるよ」(Das Spiel beginnt!) というバラエティ番組の放送が始まりました。出演者は、特別に設えられた巨大ボード上で、時には自らがゲームのコマとなって右往左往。毎回、俳優やコメディアン、歌手、料理人、政治家など有名ゲスト４名が、子供たちと約10種類の卓上ゲームで勝敗を競います。ゲストたちは観客を飽きさせることなくゲームとおしゃべりに興じ、３時間の放送時間もあっという間。平均視聴率も13.8％という高い水準を維持しています。

これまで３回の放送[1]で競われたゲームは、新旧様々。古いものから例を挙げると、反射系ゲーム『キャッチ・マウス』(1955年)、いわゆる神経衰弱の『メモリー』(1959年)、隠された暗号を推理する『マスターマインド』(1971年)、雑学クイズ『トリヴィアル・パスート』(1981年) など。これらは「団塊世代の定番ゲーム」と言えるでしょうか。その他にも、番組の副題に「３歳から99歳まで」と謳われるとおり、シンプルなルールで盛り上がるファミリーゲームの代表作が数多く紹介されています。飛行機乗りから鶏を守るアクションゲーム『くるりんパニック』(1992年)、落し穴を避けて頂上を目指す双六『ロッティ・カロッティ』(1999年)、型はめテトリス『ウボンゴ』(2003年)、口頭で絵の内容を伝える描写ゲーム『アイデンティク』(2005年)、バウンドさせたボールを狙いの穴に入れる『マッチボール』(2014年) 等々、いずれも老若男女が一緒に楽しめる名作ばかりです。

ドイツ TV 番組「ゲームが始まるよ！」
（2016 年３月 16 日放送分）

近年、ドイツではそのような卓上ゲームの新作が年間数百種のペースで生産されています。

「ドイツ・ゲーム」(German games) と総称されるそれらのゲームに対する熱気は、洋の東西を問わず世界中に広まり、現在、ドイツ玩具産業の輸出額もうなぎのぼりです。デジタルゲーム全盛のいまでもドイツでは次々と良質のアナログゲームが作られ続けているわけですが、しかし、それは一体なぜなのでしょうか。そしてその世界的人気にはどのようにして火が付いたのでしょうか。本稿では、卓上ゲームをめぐる近現代史を紐解きながら、その魅力の根底に潜むドイツらしさに光を当ててみましょう。

さて、卓上ゲーム（ボードゲームやカードゲーム）といえば、チェス、ドミノ、トランプ、双六、囲碁、将棋などの伝統的な「古典ゲーム」か、あるいは『人生ゲーム』、『モノポリー』、『UNO』等の「量産型ゲーム」、つまり大量生産が可能となった近代以降、余暇を持て余す大衆向けにマスメディアの宣伝を通じて大量販売され「定番」化したゲームが想定されるのではないでしょうか。「定番」の多くは英米産ですが、それに対して本稿で着目するドイツ産のゲームは、第二次

世界大戦後（特に1979年以降）に発展したホビーゲームに属し、多種多様であるため批評や口コミで伝播するのが特徴的です。

そもそもホビーゲームの源流は、19世紀の変形チェスから作られたプロイセン王国の戦争（クリーク）ゲーム（Kriegsspiel）にありました。それは、ナポレオン率いるフランス軍にイェーナで1806年に敗れたプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム３世が、参謀総長の勧めで、1813年頃、新軍隊編成のための改革の一環として将校たちの軍事戦略教育用に採用したミニチュア戦争ゲームです。考案し制作したのはフォン・ライスヴィッツ（G. L. Baron von Reißwitz, 1764-1829）。のちに後継者たちによって改良が重ねられたその拡張版で、初代ドイツ皇帝ヴィルヘルム１世も若い頃に兵棋演習を行ったといいます。

これが近現代ボードゲームの嚆矢といえるのは、国王が全連隊に兵棋セットを備えるように命じて、大量生産されたからです。戦果を上げたこの兵棋演習は、機密事項とはされなかったため、1870年のドイツ統一戦争後、他国の軍隊にも広まり、のちに英米で戦争（ウォー）ゲームに発展していきます[2]。その戦争ゲームは第二次世界大戦時に軍上層部が実際の戦略を練るシミュレーションとしても利用されていたようですが、その一方で趣味（ホビー）としての戦争ゲームは反対にファンタジーの要素を強め、闘争相手を非人間（モンスター）に設定することで比較的間接的な戦争表現に形を変えたテーブルトーク・ロール・プレーイング・ゲームやトレーディング・カード・ゲーム[3]へと展開しました。さらに1960年から1976年にかけてアメリカの３M社[4]がS. サクソンやA. ランドルフらに、複数人で遊べて戦争をテーマとしないボードゲームを作らせるようになったことがドイツ卓上ゲーム界に大きな影響を与え、のちに革命をもたらす契機となります[5]。

つまり、第二次世界大戦の戦勝国では戦争モノが販売ゲームの主流だったのに対して、たとえゲームであっても直接的な闘いが法的にも禁じられていた敗戦国ドイツでは、ヨーロッパで新しく販路を開いた３M社の、非戦争をテーマにしたゲームデザインが大いに歓迎されたのです。３M社のゲームはいずれも、「ルールが簡単」であるにもかかわらず「戦略的可能性が豊富」で、戦争（ウォー）ゲームとは異なり「長くても１時間半程度で遊べる」だけでなく、「他者に直接的な攻撃作用は及ぼさない」が「プレーヤー間の交流を促す」特徴があります。これらの特徴は、３M社のゲーム部門が1976年に戦争（ウォー）ゲームの販売大手アヴァロン・ヒル社へ売却された後にも、そのまま「ドイツ・ゲーム」に引き継がれることになりました。敗戦国ドイツのゲーム出版社が戦後も生き延びるにはそれ以外に選択肢がなかったのです。『メモリー』（1959年）でいち早く一山当てていたゲーム出版最大手のラーヴェンスバーガー社のような例外を除けば、出版社は敗戦の影響で復興に時間を要しました。その間、「団塊世代の定番ゲーム」として当時人気があった量産型ゲームのヨーロッパにおける版権は1960年代のうちに英仏に根こそぎ持っていかれ、ようやく1970年代に経営の目途が立った時には手遅れで、稼ぎになるような海外製ゲームの版権は彼らに残されていませんでした。ドイツのゲーム出版社が国内でビジネスを展開し続けるには、３M方式の「新しい定番」を自国で育てるしかなかったのです。

その試みを強く後押ししたのは市井のゲーム評論家たちでした。ドイツでは新聞や雑誌に、本や映画についてと同様、卓上ゲームについての紹介や批評が掲載されるほど、市民にゲーム文化が根付いています。ゲームの新商品がテレビ広告でしか宣伝されない英米では一般市民には商品内容が知られていないことも多いのですが、ドイツでは、実際にゲームで遊んだ人による内容評価の口コミで商品情報が伝えられるのです。そのような環境の中で有志のゲーム評論

家10名によって1979年に創設されたのが「ドイツ年間ゲーム大賞」でした。受賞作は、玩具売り場の最も人目を引く場所に飾られ、売り上げも10倍は伸びるといいます。ドイツではその権威こそが、隆盛を極めたデジタルゲームにも押されずに良質なアナログゲームを次々と生み出し続ける原動力となっているのです。

なかでも受賞・推薦リストの常連として活躍したのが、「ドイツ・ゲームの３K」と呼ばれるヴォルフガング・クラマー、クラウス・トイバー、ライナー・クニツィアなどのゲーム作家（デザイナー）です。「ドイツ・ゲーム」は外箱に出版社名だけでなく作家名も記載されていて、どの作家のデザインかが一目瞭然ですが、彼らの生み出したゲーム構造こそが「ドイツらしさ」を規定し、ドイツ特有の卓上ゲーム文化を盛り上げてきたといっても過言ではないでしょう。今では、『スコットランドヤード』（1983年）、『６ニムト』（1994年）、『カタンの開拓者たち』（1995年）、『カルカソンヌ』（2000年）、『ケルト』（2008年）などがドイツ産の「新しい定番」となっています。

「新しい定番」となったドイツ・ゲーム

その主な特徴は、「ゲームの舞台設定に前史や物語がある」こと、ゲームは「運の要素と戦略的思考のバランスが良い」ので「初心者と熟練者が一緒に遊ぶことも可能」なこと、負けたとしても「遊ぶたびに知識と技術が身に付いて上達していく快感が得られる」こと、そして「木製の内容物（コンポーネント）」が基本であるということです。木の材質が使われる文化的背景には、エルツ地方に代表される高品質な木製工芸に対するドイツ人の誇りとこだわりがあり、それはバウハウスのチェス等にも看取することができます。

20世紀末には、「ドイツ・ゲーム」の特殊性と面白さを認識した国内外のゲーム熱狂者（フリーク）たちが、ドイツにおけるこの新たな動きを専門誌やインターネット上で発信し始めます。このネットワークの情報交流こそが人気の火種となり、「ドイツ・ゲーム」の人気は燎原の火のごとく全世界に広まったのでした。さらに21世紀に入ると、世界に広く知れ渡ったドイツ式のゲームがユーロ圏や北米からも出版されるようになり、それらは現在「ユーロ・ゲーム」（Euro games）と呼ばれるようになっています。アメリカ産の『ドミニオン』（2008年）やフランス産の『ディクシット』（2009年）はその代表です。

以上のように世界的にも「新しい定番」となりつつある「ドイツ・ゲーム」ですが、その結果、量産型化して大量生産されるようになり、内容物（コンポーネント）を木製からプラスチック製に変更する作品も残念ながら出てきました。また最近ではデジタル化されるゲームも現れ、インターネット上で未知の人と対戦することも可能です。しかし電子ゲームからはアナログの醍醐味は消え、どこか冷たく感じられます。画面上では気軽にゲームができるかもしれませんが、直接相手と対面することで初めて得られる一種の人間的化学反応とでもいうべきものはやはりアナログならではのものでしょう。五感を刺激する質感だけでなく、遊び相手の素の姿を垣間見させる力こそまさに、「ドイツ・ゲーム」の尽きせぬ魅力なのです。けだし、デジタル化志向の今の世だからこそアナログな人間的感覚を取り戻そうと

する人がドイツ式のゲームを求めるのでしょうか。本稿でも新旧合わせて約30作の卓上ゲームに触れましたが、とにかく、みんなで一所に集まり、一緒に競い遊びながら語らうこと、これが肝心です。さあ、「ゲームが始まるよ！」

（ひらまつ ともひさ 会員、福岡大学人文学部准教授）

【注】

1　第２回は2015年12月19日、第３回は2016年３月19日に放送された。最新の放送は番組ホームページで視聴することができる。

2　ライスヴィッツ（1811年）以前にも、チェスの変化した戦争チェスで記録に残る世界最古のゲームとしてドイツにChr. ウェイクマンの『ケーニヒ・シュピール』（1664年）があるが、未成熟で、改良されることもなく、後世に継承されていない。

3　『地下牢と竜』、『マジック：ザ・ギャザリング』が有名で、のちに日本のデジタルゲームで『ドラゴンクエスト』、『ファイナルファンタジー』、『ポケットモンスター』になるその原型でもある。

4　3M社は、ポスト・イットを開発した会社として有名。当時、新規に卓上ゲーム業界へ参入し、従来にはないオシャレ志向の販売戦略で成功した。

5　S. サクソンのゲーム『キャント・ストップ』は「年報37号」で、A. ランドルフの『ザーガラント』は「年報38号」でも紹介したとおりだが、それが、「年報39号」で紹介した『イライラしないで』以来の、世代を越えて人気を保ち続けていたドイツの卓上ゲーム文化に結びついたのである。


同学社　新刊

上江憲治／野口広明 編
**カフカ後期作品論集**
第一部では短編集『断食芸人―四つの物語―』に収められた四編を、第二部では『批判版カフカ全集』の『遺稿と断章Ⅱ』に収められた作品を論じた。
B6判　四三二頁　本体３０００円（税別）

荻野蔵平／齋藤治之 著
**歴史言語学とドイツ語史**
A5判　四七四頁　本体４５００円（税別）

根本道也 編著
**オノマトペ（擬音語 擬態語）和独小辞典**
新書判　二二〇頁　本体２５００円（税別）

斎藤成夫 著
**エディプスとドイツ近代小説**
**ドイツ的言説にみる神話志向**
A5判　二八〇頁　本体３８００円（税別）

Chr・M・ヴィーラント 著　小黒康正 訳
**王子ビリビンカー物語**
四六変型　一七〇頁　本体１５００円（税別）

Fr・デュレンマット 著　平尾浩三 訳
**約束**
**―推理小説に捧げる鎮魂歌―**
四六変型　二九八頁　本体１３００円（税別）

ドーリス・デリエ 著　小川さくえ 訳
**サンサーラ**
四六判　四〇〇頁　本体２８００円（税別）

〒112-0005　東京都文京区水道1-10-7
TEL 03(3816)7011　FAX 03(3816)7044
同学社
http://www.dogakusha.co.jp/
振替00150-7-166920　（価格税別）

# クリスマス会
## ― 子どもたち、ドイツ人留学生と祝う 楽しいドイツ風クリスマス ―

12月特別例会 Dezember

池田 園子

恒例のクリスマス会は12月17日（木）に開かれ、全部で120名の参加者がありました。プログラム順に会の主な内容を記しておきましょう。「オープニング」（小川弘毅名誉会長・ドイツ名誉領事のご挨拶など）―「全員での〈聖夜〉合唱」― 歓談と会食 ―「ドイツ語圏留学生の自己紹介と〈もみの木〉合唱」― グリューワインとシュトレン！ ―「聖ニコラウスと従僕ループレヒト登場、子どもたちへの贈物」―「プレゼント抽選会」―、そして最後は全員で〈歓喜の歌〉を歌い、Fröhliche Weihnachten und ein glückliches neues Jahr! の挨拶で幕を閉じました。

「子どもたち」、「留学生」、「ドイツ風」という趣向は過去２年と同じで、プログラムもご覧の通りほぼ同じですから、詳細については年報第38号、第39号の横川洋さん、岡嶋美佐子さんによる魅力的な報告をご覧いただくとして、ここでは重複を避け、今年特記に値すると思われたことを中心に、個人的な印象も含めて書き留めておくことにします。

まずは、ドイツ語による司会進行です。司会役は昨年に引き続き堺雅志さん、しかし今年はマーレン・ゴツィックさんのドイツ語も加わり、ゴツィックさんの明快で美しいドイツ語が独特の雰囲気を醸し出し、大好評でした。お二人は福岡大学ドイツ語学科の同僚でもあり、息のぴったり合った名コンビぶりでした。

二つ目はトーンチャイムです。合唱の伴奏を含めトーンチャイムの美しい響きが耳を楽しませてくれたのは例年通りですが、特筆すべきは、今年は大人による演奏も披露されたことです。この楽器を協会で購い求めたのは昨年のことですが、宝の持ち腐れにしてはいけないと会員の有志が協会事務所で何度か練習を重ねた成果でした。

歌をうたう留学生たち

三つ目は招待されたドイツ人留学生のことです。今年は九州大学、福岡女子大学の交換留学生を中心に10名の参加があり、彼らを囲んであちこちに人の輪もでき、サンタのプレゼントのときは留学生も子どもになって舞台に上がってもらいました。そして今年はスイスからの女子留学生１名の参加もあって、当日配布のプログラムのキャッチフレーズは「ドイツ語圏留学生と祝う」に急に改められるという一幕もありました。スイスやオーストリアなどドイツ語圏の留学生にも声をかけるのは素晴らしいことです。

最後に、「子どもたち」、「留学生」、「ドイツ風」という趣向についても少し触れておきましょう。実は今回の年報にもドイツ人留学生のモーア君とスイス人留学生のベギッチさんに感想を

聖ニコラウスと子どもたち

お寄せいただきました。クリスマス会の雰囲気についてはこれで十分言い尽くされているという思いの他に私が感じたのは、この三本柱の趣向は、まさにクリスマス会そのものの意義をぴたりと言い当てているという事実です。クリスマスのお祝いの主役は何といっても幼な子イエスと子どもたちであり、子どもたちのいないクリスマスは考えられない。同時にクリスマスはドイツ語圏の人々にとっては故郷・家族・幼年時代そのものである。そして私たちのクリスマス会は、聖ニコラウスと従僕ループレヒトと子どもたち、本物のグリューワインとシュトレン、ドイツのワイン・ソーセージ・パンを含めてまさに「ドイツ風」であることによって、異郷にある留学生たちへの最大のクリスマスプレゼントになっているのだと感じさせられたのです。

もう一つ大事なことがありました。長年協会のために尽力され今はご高齢のある会員が私に、「一年に一度皆さんにお会いするために、このパーティにだけは必ず来るようにしています」と言われたのです。ドイツでもクリスマスは年に一度このときだけは故郷に帰り家族や友人たちに再会するのが習わしです。そのことも思い合わせて、なるほどクリスマス会にはこんな意義もあるのだと感銘を受けた次第です。

（いけだ そのこ 会員、元図書館司書）

---

## 12月特別例会感想

# Ein Weihnachtsfest in Fukuoka

Emina Begic

Im Dezember vergangenen Jahres veranstaltete die Japanisch-Deutsche Gesellschaft Westjapan wie jedes Jahr ein Weihnachtsfest. Das Fest war nicht nur offen für Mitglieder, sondern auch für Freunde der deutsch-japanischen Beziehung, der Deutschen Sprache und Kultur und auch für Austauschstudenten aus dem deutschsprachigen Raum. Fern von der Heimat kamen dabei weihnachtliche Gefühle auf, denn es herrschte ein reger Austausch zwischen Freunden und Bekannten, sowie neugewonnenen Freunden bei einem Deutschen Festessen. Dabei wurden auch Weihnachtslieder, zuerst von Studenten, anschliessend vom ganzen Saal, gesungen. Es gab originalen Christstollen und Glühwein, wobei es mir bei dem Geruch warm ums Herz wurde, da es mich an den Weihnachtsmarkt in Zürich erinnerte. Zum Schluss

gab es ebenfalls ein wunderschönes Konzert mit Klangstäben. Die schönste Erinnerung des Abends war jedoch, als die Kinder auf die Bühne gebeten wurden und Sankt Nikolaus mit Knecht Ruprecht in den Saal trat. Anfangs etwas zögerlich, dann immer mutiger nahmen die Kinder die Geschenke entgegen und bedankten sich. Dabei wurde man unweigerlich in die eigenen Kindheitserinnerungen zurück versetzt.

In der Schweiz kommt der „Samichlaus“ (Sankt Nikolaus) mit seinem Gehilfen, dem „Schmutzli“ (Knecht Ruprecht), am 6. Dezember vorbei, belehrt die Kinder was sie gut gemacht haben und was sie verbessern müssen und gibt ihnen einen Sack mit Nüssen, Mandarinen und Schokolade. Genau wie die Kinder am oben erwähnten Weihnachtsfest, haben wir etwas zögerlich zuerst zu den Eltern geschaut, uns dann aber bedankt und das Geschenk entgegengenommen. Es ist eine schöne Kindheitserinnerung, die immer wieder bei solchen Anlässen auflebt, auch wenn man fern von der Heimat und der Familie ist.

Weihnachten selbst wird in der Schweiz mit der Familie und den Liebsten gefeiert; sei es beim Raclette, einem Fondue oder sonst einem Festmahl. Auch während der Adventszeit verbringt man die Zeit mit Freunden, während die Strassen weihnachtlich beleuchtet und voll mit Menschen sind und die kalte Luft geschwängert ist mit dem Duft von Glühwein, Raclette, „Maroni“ (gebratenen Kastanien) und anderen deftigen Leckereien. Obwohl man in Fukuoka fern von all dem ist, liess das Weihnachtsfest mit seiner familiären, warmen Stimmung das Weihnachtsgefühl wieder aufleben!

---

## 福岡でのクリスマスパーティ

エミーナ・ベギッチ（九州大学留学生／チューリッヒ大学院生）

昨年12月、クリスマスを祝って西日本日独協会が主催する恒例のクリスマス会が開かれました。このお祝いのパーティには協会所属の会員だけでなく、独日友好や、ドイツ語やドイツ文化に関心を寄せる人々、さらにはドイツ語圏からの交換留学生も参加を許されていて、その場にいると遠く故郷を離れていながら、懐かしいクリスマスの感情が蘇ってきました。友人や知人が集まり、新たに友となった人も加わって、ドイツ風のクリスマス料理をいただきながら、楽しく賑やかな交流や会話がくりひろげられていたからです。クリスマスの歌もありました。まず私たち留学生が歌い、続いてホール全体の人々が唱和するのです。さらには正真正銘本物のシュトレンにグリューワイン！ グリューワインの香りを嗅いだだけで心がほんのりと温かくなりました。故郷チューリヒのクリスマス市を思い出したからです。最後にトーンチャイムによる実に美しい合奏のことも忘れてはなりません。けれどもこの夕べで最も記憶に残ったのは、子どもたちが舞台上に呼び寄せられ、聖ニコラウスが従僕ループレヒトを伴ってホールに登場したときのあの素晴らしい光景です。最初は少しおずおずしていた子どもたちが、だんだん勇気が出てきて、プレゼントを受け取って元気にありがとうと言う。私は否応なく自分の子どもの頃に引き戻され、そのときの自分を見ているようでした。

スイスではザミクラウス（Samichlaus）とシュムツリ（Schmutzli）は――聖ニコラウスと従僕ループレヒトのことをドイツ語のスイス方言ではこう言います――12月６日に家々を訪ね歩き、子どもたちがその一年にやった良いことと、これから直さなくてはならないことを教え諭し、胡桃とマンダリンとチョコレート菓子を詰めた袋をプレゼントとして手渡すのですが、そんなとき私たち子どもは、先ほど

触れたクリスマス会の子どもたちとそっくり同じで、はじめは少しおずおずと両親の方をうかがい、そのあとでお礼を言いながら贈物を受け取ったものです。それは、こういう機会に接するたびに、たとい故郷や家族から遠く離れていても、いつも蘇ってくる子どもの頃の良い思い出です。

クリスマスそのものは、スイスでは家族や最愛の人たちと一緒に祝います。ラクレットであれフォンデュであれ、これに類するお祝い料理であれ、それを囲んで内輪で祝うのです。その前の待降節の期間も友だちと過ごす時で、街路はクリスマス用に飾り付けられた明かりに輝き、人で溢れかえり、冷たい大気はグリューワインやラクレットやマロニ（Maroni、焼き栗）の香りや、こってりと甘いものの匂いに満たされます。福岡ではこれらすべてから遠く離れてはいますが、家族的で温かい雰囲気の日独協会クリスマス会に触れたおかげで、懐かしいクリスマスの感情をふたたび味わうことができました！

（訳 池田 紘一）

---

## Knecht Ruprecht und der Nikolaus reisen auch nach Fukuoka

Oliver Mohr

Im vergangenen Dezember hatte ich gemeinsam mit weiteren Austauschstudenten aus Deutschland die Gelegenheit, der Einladung der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Westjapan zu ihrer jährlichen Weihnachtsfeier nachzukommen. Der zweistündige Abend war vollgepackt mit vielen Programmpunkten, die auch die Beteiligung der deutschen Studenten erforderten: Vom Anstimmen deutscher Weihnachtslieder auf der Bühne über das Ziehen der Losnummern für die große Verlosung bis zum Begleiten der Bescherung: Bei Letzterer betraten auf einmal Knecht Ruprecht mit seiner Rute sowie der Nikolaus mit seinem großen roten, allwissenden Buch den abgedunkelten Saal und erwiesen sich sowohl des Deutschen als auch Japanischen mächtig, als sie die auf der Bühne versammelten Kinder nach ihren Wünschen befragten und immerhin mit einer Tüte voller Schokolade beschenken konnten.

Das war nur eines der typisch deutschen Elemente des Abends. Für besonders leuchtende Augen sorgte bei mir das reichhaltige Buffet mit Dingen, die man während der Zeit in Japan nur schwer bekommt: Roastbeef, deutsche Wurst, Käsehäppchen, ja sogar die Weihnachtsklassiker Stollen und Glühwein wurden gereicht! Da vergisst man schon fast, dieses Jahr die Weihnachtszeit nicht daheim verbringen zu können. Generell war es schön, bei der Stehparty immer in Bewegung zu sein und sich daher mit vielen unterschiedlichen Menschen unterhalten zu können. Besonders herzlich fand ich zudem, dass auch persönliche Einladungen nach Hause ausgesprochen wurden.

Die Vorweihnachtszeit in Deutschland, das ist jedes Jahr auf ein Neues eine stressige Zeit, in der viele Geschenke gefunden und besorgt werden müssen, in der man sich fragt, wie um alles in der Welt ein weiteres Jahr so an einem vorbeirauschen konnte, aber es ist nicht zuletzt auch die Zeit, um mit Freunden auf den Weihnachtsmarkt zu gehen. Und der ist in meiner derzeitigen Heimat Braunschweig einer der schönsten in Deutschland! Der historische Burgplatz in der Innenstadt bildet die perfekte Kulisse – da kann Hakata Eki leider nicht mithalten. Aber die nächste Vorweihnachtszeit kommt bestimmt!

## 従僕ループレヒトと聖ニコラウス、福岡にも現わる

**オーリヴァー・モーア**（九州大学交換留学生／ブラウンシュヴァイク大学院生）

昨年の12月17日、クリスマス本番を前にしたこの日、私は福岡で学ぶドイツ人交換留学生たちと一緒に、西日本日独協会恒例のクリスマス会に招待されました。２時間におよぶこのクリスマスの夕べは、色とりどりのプログラムがぎっしり詰まっていて、ドイツ人学生も一役買う仕掛けになっています。舞台上でクリスマスの歌を合唱したり、素晴らしい景品が用意されたくじ引きの番号札を引く役回りを演じたり、さらには子どもたちと一緒にクリスマスプレゼントを受ける儀式にも参加します。ホールの照明が暗くなり、そこに突然、おきまりの鞭杖を手にした従僕ループレヒトと、万人の素行のすべてが記載されている、これまたおきまりの大きな赤表紙の本を携えた聖ニコラウスが姿を現わし、達者なドイツ語と日本語を駆使してみせ、舞台上に集まって待ち受けている子どもたちにそれぞれの願いや将来の夢などを尋ね、最後には袋一杯のチョコレート菓子をプレゼントすることになります。

しかしこれは、この夕べを飾る典型的なドイツ的要素の一つにすぎません。私が目を輝かせたのは、立食用テーブルにずらりと並べられた、日本滞在中にはめったに口にできない盛り沢山の品々です。ローストビーフあり、ドイツソーセージあり、一口大に切られたチーズあり……。しかも驚くなかれ、クリスマスの定番中の定番ともいうべきシュトレンとグリューワインまで出てくるではありませんか。今年はクリスマスの時期を故郷では送れないという事実を思わず忘れてしまうほどでした。その他、全体として良かったのは、立食形式のパーティだったのでいつでも自由に動きまわれ、おかげで多くの人と話せたことです。それればかりか、何人かの方からはご自宅にお招きいただく約束までいただき、そのご好意には心うたれました。

ドイツではクリスマス前のこの時節になると、毎年毎年あらためて頭を悩ませ、ストレスにさいなまれることになります。たくさんの贈り物を何にするか考え、準備しなければならないからです。よくもまあこんな慌ただしさの中で一年一年が過ぎてきたものだと改めて思い知らされる時期です。しかしそれはまた、何よりも友だちと連れ立ってクリスマス市を楽しむかけがえのない時期でもあり、しかも、私がドイツで学生生活を送っている目下の故郷ブラウンシュヴァイクのクリスマス市は、ドイツで最も美しいクリスマス市の一つで、旧市街にある歴史的な宮廷広場には非の打ちどころのない絵のような光景がくりひろげられます。ちなみに博多駅広場もこの点では残念ながら足許にも及びません。ストレスとクリスマス市の楽しみ ――しかしいずれにせよ、この次もまたこの時節は確実にやってくるでしょう。嗚呼！

（訳 池田 紘一）

編集委員会注　ブラウンシュヴァイクのクリスマス市の光景は、以下のウェブサイトで参照可：
*http://braunschweig.de/politik_verwaltung/fb_institutionen/staedtische_gesellschaften/bsmportal/presseportal/pressemappe_weihnachtsmarkt_bildmaterial.html*

# 日本語指導を通じて国際交流20年
## ― 活動の中で見えてきたこと ―



中村 昭

私は企業退職後、日本語教育の道を歩み、この20年、九大国際交流会館や日本語学校、ボランティア教室などで、外国人に日本語を教えてきた。短期ながら中国各地でも教えた。都合56の国と地域から異文化を抱いて日本へきた1600人ほどの学習者を指導支援してきた。この間の活動の中で見えてきたこと、感じてきたことを、率直にお話したい。

### 普遍的な人間性への信頼が原動力

ところで、20年と言っても、模索と修行の15年を経て、真に社会還元に専心できたのはここ５年に過ぎないが、たゆむことなく、この道を歩んで来られた第一の原動力は、民族、言語、宗教の違いを超えた人間性、つまり我々日本人と同じように喜怒哀楽を感じ、同じ心理を持つという外国人学習者たちの普遍的な人間性への信頼にあったと思う。

九大国際交流会館「留学生家族のための日本語教室」では、当時国交断絶中の中国と台湾の人たちや、イスラエルとガザ出身のパレスチナの人たちが机を並べて日本語を学び合い、共に「世界で一つだけの花」を歌った。アジア系の日本語学校では、東北部組と福建省組の中国人学生南北対立を、中国語も使って収めていく中で、優しく、家族、友人思いで、厳しいアルバイトを続けながら自らの道を歩んで行こうとする彼らの心の機微に触れた。欧米系日本語学校では、声楽家の亡母が好きだったというモーツァルトの「魔笛『夜の女王』」の１節を、美声のコロラチュラで歌い出したドイツ人女性や、夏目漱石の話に感動して、熊本市の彼の旧居を尋ね歩いたルフトハンザのドイツ人男性パイロットなど、多彩な人間模様に接した。また、反日デモの直後、ボランティア授業に訪れた上海の外語中学での生徒たちの心からの歓迎体験、直近では、昨秋のことだが、中国厦門大学での、日本語学科の学生との熱い交流経験などを通じて、彼らの笑顔こそが何よりの私の喜びであり、誠に人間の心に国境はないと、痛感した次第である。

九大国際交流会館のクラス

### “ずれ”も行動力のバネに

ところで、日本語教育の長い修行の道のりの中で、私の常識では納得できない、“ずれ”を感じることもあった。

まず、学校では学習者の母語の差異による不公平感をなくすため、日本語で日本語を教える直接法が原則で外国語の使用はご法度であることに驚いた。学習者は、母語の文法解説書や辞書で予習してくる。すなわち、既に母語に引き寄せて第二言語としての日本語を学んでいるのであり実態は間接法である。教える側こそ彼ら

の母語の基本文法や構造を学んでおくべきで、これは日本語を教える有効な手段を生み出すことにも繋がる。特に初歩日本語学習では、媒介語抜きで教えるのには無理がある。私自身15年継続している中国語の夜学通いの経験から、比較言語的視点の利点を実感させられている。

また、アジア系の日本語学校での、音声指導は専ら CD 頼りで、ネイティブの教師として自身の肉声で指導すべき自覚が乏しく、読み書きはできるが話せない学生を育てかねない状況に直面した。欧米系学校では、学習者の質問に寄り添って丁寧に回答することは他の講師との均衡上禁じ手とされ、歯がゆい思いを経験した。そして、ボランティア教室では、最も支援を必要としている日本語ゼロレベルの学習者が、五十音の読み書きができないという理由で入会を断られている実態を知るなど、違和感を覚えざるを得なかった。

なお、東京から来た先生の研修会では、外国人の社会参入に際して多言語化が進んでいず、日本語が障壁となっている日本の現状を先ず詫びて、その償いとして漢字ゼロの簡易日本語を広めて提供すべきだとする「補償教育論」、さらには、ボランティア教室が現役教師も参加して学校の補講塾的役割を果たしている実態を知らずに、地域ボランティアは交流を主体とすべきで、日本語の学習は学校に任せた方がよいとする「棲み分け論」が提唱されたが、そのいずれにも“ずれ”を感じた。これらの違和感や、“ずれ”を埋めたいとする力も活動のバネになっているのかも知れない。

## 国際交流活動で社会還元

さて、５年前、東北大震災で多くの独墺の学生が帰国したのを機に日本語学校を辞した後、些かでも社会へご恩返ししたいと思い、NPO 団体「福岡日本語講師教育研究会」を作り、幅広い学習者のニーズに応えられるスタッフの養成を始めた。難関といわれる日本語教育能力検定試験にも、昨年は複数の合格者を出した。一方、日本語教師だけでなく、日本語に関わりのある新聞やテレビ局など異業種の方も講師に招き、市民向けに「日本語面白講座」を開いたり、九大箱崎キャンパスで開催されたポスター発表に参加したりして、PR に努めた。また授業支援も続け、指導していた中国人女性が、スピーチコンテストで最優秀賞を受けるというようなこともあった。

「日本語クラスみらい」の発足

スタッフが育ってきて、自前の教室で教えたいという声が高まる中、昨夏、学習者の心に寄り添う指導支援を目指し、天神大名地区に、「日本語クラスみらい（未来）」を発足させた。指導指針として次の６点を掲げ、指導スキルの向上に努めている。

1．学習者の想いに寄り沿い、学習者の視点に立った、指導支援を。
2．覚える日本語から使える日本語へ。
3．文字より音声、文法より機能の重視。
4．「かたまり」と「つながり」で言葉を楽しく学ぼう。
5．学習者に「ゴール」が見えてくる指導を心がける。
6．教えることは学ぶために、学ぶことは教えるために。

活動は緒についたばかりだ。現在の天神大名の本拠である青年センターの廃止に伴いこの４月に開館する天神今泉の「西鉄天神クラス」に移転するが、これを新しい段階への契機と捉え、支えてくれている仲間と共に、今後とも草の根の国際交流活動を続けていきたい。

（なかむら あきら 会員、福岡日本語講師研究会 / 日本語クラスみらい代表）

---

## 2月例会感想

### 夢と情熱、研究と実践

葉 照子

中村氏は九州電力を定年退職したのち日本語教師を目指し、それ以来20年になる。日本語を外国語として教えるには、自らの言語を日本語として見直し、山なす問題の数々を分析しなければならない。その作業は難しいが、一旦始めるとその奥深さと興味深さにハマっていく人が多い。中村氏は間違いなくそのお一人であろう。

1999年に日本語教育検定試験に合格ののち、九州大学国際交流会館で開講されている留学生家族向け日本語クラスで日本語を熱心に教えられた。そのうち、日本語学校から声が掛かり、いろいろな国の留学生に日本語のみならず、歌も、人の心も教えられた。そして感じたのは、国籍や人種を問わず、普遍的人間性という点では誰もが同じだということであった。

その他、中国各地で短期の授業を行い、上海では小六から高三まで多様な年齢の生徒に接し、延辺では北朝鮮との国境付近で南との30度もの温度差を感じ、福建省厦門大学では、ダ行、ナ行、ラ行の発音を教える難しさに直面するなど、多くの経験を積まれた。さらにはタスマニア大学でも教壇に立たれた。20年間に教えられた生徒数はなんと都合1600人、出身国の総数は56ヵ国に及ぶ。

そんな活動の中で、湧き起こる「ナゼ」も多くある。ここにこうして日本語話者（教師）が居るのにナゼCDを聴かせるのか？ 生徒自身の母語（媒介言語）を無視してナゼ日本語だけに頼る直接法教育に拘るのか？ 社会人、主婦、ワーキングホリデー、観光ビザの人々、日本人妻、残留孤児など、学習者の多様性にナゼもっと目を向けないのか？　言葉のコロケーション（語のかたまり・つながり）にナゼもっと力を入れないのか？ ――考え出したら止まらない。とうとう、必要なのは教師側のスキルアップだということに思い至る。

以来、中村氏は「日本語面白講座」と銘打った研究会・勉強会を通じて人材を育てることに力を注ぎ、ついには独り立ちした教え子たちが教師を務める日本語教室「日本語クラスみらい（未来）」を立ち上げる。「教えることは学ぶために、学ぶことは教えるために」という中村氏の哲学がこうしていま、実を結びつつある。第二の人生における日本語教育への夢と情熱、20年にわたる研究と実践に脱帽せざるを得ない。

（よう てるこ 会員、元九州大学、釜山大学日本語講師）

# 「若手会員の集い」と「秋祭り」に参加して

田野 武夫

## 若手会員の集い

2015年９月23日（水）に福岡の西日本日独協会の一員として、東京日独協会にて開催された「若手会員の集い」およびドイツ大使主催の「秋祭り」（「日独協会秋祭り」）に参加させて頂きました。

「集い」では、北は北海道から南は九州まで、日本全国各地から日独協会の若手会員が集まり、各協会の活動報告が行われました。全国各地で様々なドイツ関連のイベントが開催され、日独友好の活動が継続されていることに感銘を受けました。ドイツの姉妹都市との交流事業、ドイツの大学教授の講演会、ドイツ人留学生の休日アテンドなど、各地で様々な取り組みが行われています。こういった具体的な取り組みを直接聞く機会はこれまでほとんどなかったので、大変参考になりました。志を同じくする者同士ですので、会の始まりから一体感が感じられました。これは感動的な体験でした。

また同時に各地域の日独協会が抱えている課題が、共通していることも知りました。ほとんどの日独協会が課題として挙げていたのは、若い世代の会員不足や高齢化です。もちろんベテラン会員の経験や知識は、必要不可欠です。しかし同時に、様々なドイツ関連行事の企画、運営には、若い力とその機動力が必要となります。全国の日独協会で、この若手会員が不足していることにより、活動が停滞気味になっていることが共通の認識として確認されました。

若手会員の集い

若手会員の不足という問題は、これまでも指摘されてきたことと思います。そこで今回の「集い」で若手会員の活性化のテーマとして挙げられたのが、「全国青年部会」（仮称）立ち上げでした。この部会は、各日独協会の若手会員の全国レベルでの連携強化を目的とした組織で、「日独ユースサミット」や「Tanz im Sommer」、「全国日独協会連合会若手会員の集い」、各協会の連携イベント等などの企画・運営を担います。また DJJG（独日青少年協会）のパートナー窓口といった役割も想定しています。この部会を具体的にどのように機能させていくか、熱心な議論が行われました。「全国青年部会」（仮）については、対象年齢を何歳以下とするか、予算をどのように捻出するかなど、課題も残されています。今後も若手協会員同士のスムーズな連絡体制を通して、議論が前進していくことと思います。

## 秋祭り

「集い」の後、信濃町の日独協会から南麻布のドイツ大使公邸に移動し、「秋祭り」に参加しま

大使公邸の庭で

した。フォン・ヴェアテルン大使は、ドイツのお母さまのワイナリーから取り寄せたというゼクトを振舞って下さいました。大使は日独協会の若者が集結したことに、大変感動されていました。個人的に大使と日独協会の活動のみならず、日独関係全般についてお話しすることが出来たことで、自分にとって大変有益な場となりました。

「秋祭り」にはベテランの日独協会員や大使館員なども参加し、盛大な会となりました。多くのドイツ料理やビール、ワインなどが振舞われ、楽しいひと時を過ごしました。「秋祭り」とはいえ汗ばむほどの陽気で、ビールがとてもおいしく感じられました。年長の日独協会員の方から、戦後間もない頃のドイツ留学の話や日独協会の活動について、大変興味深いお話を数多く伺いました。

「秋祭り」の会場でも、各協会の抱えている問題や様々な取り組みについて、情報交換を行いました。地方にもドイツ人は在住していますが、留学生が多く、彼らの交流範囲が大学内で完結しているといった点が話題となっていました。また日本国内を旅行しているドイツ人旅行客について日独協会間で情報を共有し、各地で案内役の活動を行うなど、積極的な取り組みの案についても、話が出ました。

首都圏と違い、地方にはドイツ人がそれ程多くなく、直接的な交流の機会も制限されます。しかしそれ故に、数少ないドイツ人と濃密な関係を築くことができると感じています。私が大学院生時代の頃、西日本日独協会において、ドイツ語講座の立ち上げやドイツ人とドイツ語学習者との交流、生活面でのプライベートな相談など様々な活動を行いました。交流というよりも、苦楽を共にするといった感じの付き合いでした。こうした濃密な関係の構築は、地方ならではのものと思います。

## 今後に向けて

現在私は、勤務先の関係で東京に在住しております。今回は在京の西日本日独協会会員という形での参加となりました。2016年４月に福岡で開催予定の「日独協会連合会総会」に合わせ、西日本日独協会として「日独若者の集い」を開催したいとの要望を出し、全会一致で承認されました。今後は同イベントの成功に向けて、東京、福岡、全国の日独協会と緊密に連絡を取りつつ、活動を行う予定です。

現在の勤務先の大学でドイツ語教育に携わっていますが、不幸にも我が大学にはドイツ人留学生がいません。そのため学生たちは、日独協会のカウフさんのイベント等を通して若いドイツ人たちと交流しています。また九州に旅行したいと思っているドイツ人は数多くいますので、夏のキャンプなど何らかの形でイベントができないかとも思案しております。その前にまずは、福岡での「日独若者の集い」を成功させたいと願っております。

（たの たけお 会員、青年部副部長、拓殖大学准教授）

# ようこそ、日独ボードゲーム会へ!
## ― 童心に返り、大人げなく楽しもう ―

緒方 愛実

9月27日の日曜日は、秋晴れで過ごしやすく、絶好のゲーム日和となりました。今回の集いは、青年部再出発となる記念すべき第1回目です。心配性の私は前日まで、参加者が集まらなかったらどうしようか、盛り上がらなかったらどうしようか、などなど頭の中でぐるぐると考えておりました。

しかし、当日は、そのような心配もどこ吹く風、会場をお貸しくださった「シュタット・マインツ」の店長のお子さんたちをはじめ、多くの飛び入り参加もあり盛会となりました。

また、無類のゲーム好きである青年部副部長の平松さんが用意したゲームの他、同じくボードゲーム愛好家の参加者の皆さんが持ち寄ってくださった日独ボードゲームの数々がテーブル上に並び、店内はさまざまなゲームに興じる参加者でにぎわいました。

ゲーム会の最初は参加者全員で、カードゲームを使い、遊びながら自己紹介を行いました。今回のスローガン「童心に返って（今日だけは）大人げなくゲームを思い切り楽しもう！」の通り、年齢・性別の垣根を越え、大変盛り上がりました。神経衰弱形式のゲームに皆さん、大人げなく全力で挑みましたが、流石に若き記憶力！子供たちの圧勝でした。その最初のゲームが終わるころには、誰もがすっかり打ち解けていました。

その後、参加者が多いこともあり、3グループに分かれて各テーブルにゲームと、ルール説明を行う「ゲームマスター」を配置し、各々興味のあるゲームに参加するという形式をとりました。ここでも、参加者の方々、お子さんもゲームマスターをかって出てくださり大変助かりました。

会場入口の告知板

ドイツ語学習者やドイツ人の参加者が多かったこともあり、簡単なドイツ語を使いながらゲームを楽しみました。ボードゲーム、立体的なバランスゲームなど様々なゲームが卓上を彩っていました。どのテーブルでも時折、歓声と悲鳴が上がり、そのたびにますますゲームが盛り上がり、あっという間に時間が過ぎ、気が付くと日が落ちていました。

夜の部の Stammtisch（懇親会）ではさらに参加者が増え、今度はテーブルには「シュタット・マインツ」店長さんの手作りのハムや福岡の旬の野菜を使った数々の料理が色鮮やかに並びました。さらに、私個人としても憧れの、アイスバインまで提供していただき、普段なかな

ゲーム会場

か出会うことができない本場仕込みのドイツ料理の数々に皆さんも舌鼓を打って感動されていたようです。お帰りの際に提出していただいたアンケート結果でもお料理は満点５つ星評価でした。

料理を楽しみながら、ドイツボードゲームの話やドイツの方からドイツの話などをお聞きし、ドイツ語と日本語を交えての会話も盛り上がり、満月が輝く時刻まで話は尽きませんでした。

最後に皆さんに今回の会のアンケートを書いていただきながら、次回の催しについても尋ねさせていただいたところ、「ぜひ次回も参加したい」という声が多く上がり、中でも子供たちからは目を輝かせながら「来週もまた皆で遊ぼうよ！」とお誘いを受けてしまい、大変感激しました。

参加者同志も交流を深めてくださっていたようで、別れ際に名残惜しそうに手を振り合う姿もお見受けし、今回この会を開いて良かったと感慨深く思いました。

今回の青年部活動再出発となる会には、主催者側の予想をはるかに超える反響をいただきました。福岡県内だけでなく大分県や佐賀県といった遠方からはるばる来てくださった方、大学生、小学生のお子さん、そして日本人だけでなくドイツ人も集まり、総勢16人の参加となりました。また、嬉しいことに日独協会に１名、青年部に３名の入会希望者もありました。

進行をしつつ、私も皆さんに交じってゲームに参加し、時間を忘れて楽しませていただきました。皆さんと笑顔でお別れしながら、私の心配と緊張は杞憂であったな、としみじみと考えました。青年部の活動、日本とドイツについて興味のある方がこんなにもいらっしゃることを目の当たりにし、今後の青年部における活動に関しても背中を押していただいた様で心強く思いました。

しかし、反省するべき点も少なくありませんでしたので、次回に備え気を引き締めてのぞみたいと考えております。次回も皆さんが楽しく交流できる場を目指し、青年部一同力を合わせて前に進んで参りますので、どうかこれからもよろしくお願いいたします。

また童心に返り、大人げなく盛り上がりましょう！

（おがた まなみ 会員、青年部副部長）

# 会員だより

## 近況

**中村 昭**

知友の訃報が相次ぐこの夏、今日また馬齢を重ねました。妻は終“活”を急げとのたまいます。要は部屋部屋に積み上がった本や楽譜を始末しろということですが、軌道に乗ってきた終“括”まではそんな暇はありません。そこへ東京の長女から生きてるだけで嬉しいよと祝いのエール。“その時”にはきれいに捨ててあげる、無駄な終活止めといてと。序でに、作曲一途の変わり種、22歳の孫が、某有名アイドルグループの新曲コンペで当選との報せも。クラシック一辺倒の妻の“ABC48”ってなあに？の天然振りに、“怪”挙を分かってくれぬと不服の娘。まあ、このチグハグも冥土への土産話が増えたってことと合点収束した次第でした。

（2015年7月記，なかむら あきら　日本語講師）

## 独立記念日のブダペスト

**立花 雅子**

2015年３月、久しぶりのベルリン、ドレスデンを含めた旅行計画をたてたが、ISなどによるテロの危険が取り沙汰されたためドイツはやむなく諦め、懐かしのプラハ、ウィーンとともに初めてブダペストを訪れた。

ブダペストでは、たまたま３月15日のハンガリー独立記念日に居合わせ、ドナウの真珠と呼ばれる美しい重厚な街並みに染みこむ、めまぐるしい歴史に思いを馳せた。

この日は、町中が様々な記念行事で沸き立っていた。ペストの中心街では、胸に赤、白、緑の国章のリボンをつけた老若男女が、交通規制がされた大通り一杯に広がって楽しそうに行進していた。ブダペスト中の人々が総出で参加しているのではないかと目を疑うほどの夥しい数で、いつ終わるとも知れぬ延々と続く人の波であった。

行進に参加している人々の顔には、オスマン帝国、ハプスブルク家による支配、ナチスの侵略、ソ連の強権下における共産圏時代と、長い苦難の歴史を乗り越えて真の独立を勝ち得た誇り高いハンガリー国民の、祖国を愛する熱い思いがあふれているように思え、見ていて感動さえ覚える光景だった。

（たちばな まさこ　元高校教員）

## 私の仕事

**石井 裕美**

JTBで旅行の企画、添乗などに携わっています。主な担当地域はEU圏内。ドイツでサッカーWC観戦、音楽祭体験等々、素敵な体験です。中でも私の一番の楽しみは旅中の出会いと会話。史跡巡りでは歴史上の人物に語りかけることも……。

世界は常に変化しています。EU圏内では通貨など、国境を感じなくなりました。変わり行く世界を見ながら、「へぇ〜」とか「なるほど」とか、旅中の嬉しい出会いと会話の楽しみを求めて、次の企画に心躍らせる日々です。

（2015年8月記，いしい ひろみ　JTB勤務）

## 初秋のミュンヒェン

**福元 圭太**

2015年９月半ば、マクデブルクとミュンヒェンに行ってきた。ミュンヒェンを訪れたのは研究資料収集のためではあったが、シリアから押し寄せる難民たちの様子を直接この目で見てみたい、そして帰国後に授業でその様子を学生たちに伝えたい、という別の目的もあった。中央駅横に難民たちを迎えるテントはあったものの、ハンガリー国境で西への逃避行が一時阻止されることになった時期と重なったため、実際に難民を目にすることはなかった。中央駅は折しも始まったオクトーバーフェストの酔客で溢れていた。もしも難民たちが以前のペースでミュンヒェン中央駅に押し寄せていたら、どのような光景になっていたのだろうと、複雑な気持ちになった。裕福な酔客と痩せ細った難民たち……。ちなみに泊まっていた安ホテル（56ユーロ）の同じ部屋の代金が、ビール祭りが始まった途端、160ユーロに跳ね上がった。次回は「騒つかない」いつものミュンヒェンを訪れたい。

（ふくもと けいた　九州大学教授）

## スイスの峠巡り

**藤野 成爾**

鉄道好きの私は今までスイスパスで方々の路線（密度は世界一）を楽しんできた。2015年の夏は、スイスならではの郵便バス（黄色い車体にホルンの警笛）を乗り継ぎ、氷河特急で有名なローヌ氷河の周りを反時計回りに、グリムゼル峠（2165m）、フルカ峠（2431m）、スーステン峠（2224m）を巡った。一帯は、ライン川、ローヌ川、ポー川、イン川（ドナウ川の上流）の源で、若きゲーテが訪れ、後のイタリア旅行への憧憬を抱いたサンゴッタルド峠（2108m）へも近い。牧草地からカーブの多い道を上り樹木限界を超えると岩肌が現れ、U字谷や氷河湖が見える。雄大なローヌ氷河だが、温暖化により100年間で1000mも後退している。現在の氷河特急はトンネル通過のため、車窓から氷河は見えなくなった。この峠巡りの道路はライダーが引きも切らず走っているが、私のバスのすぐ前で事故が起き、10分ほどで赤いドクターヘリが山道の路肩に着陸という現場に遭遇した。スイスやドイツでは山奥でも短時間でヘリが到着するシステムが整っており、日本でも元駐スイス大使國松孝次氏の熱意で導入が始まっている。

（ふじの せいじ　チーズプロフェッショナル協会顧問）

## 教師のつぶやき

**尾張 充典**

勤務している大学での所属が変更になり、ドイツの文化や社会を紹介する講義が増えた。教師としては文化や社会の多彩な姿を伝えたくて大衆文化や移民の話をするのだが、学生から寄せられるレポートなどを読むと、型にはまったイメージでドイツが語られることが多い。「勤勉で律儀な国民性」からはじまり、「クラシック音楽の国」、「キリスト教国」、さらには「アーリア人の国」というのまで出てきたりする。

良いイメージも悪いイメージも、それらはステレオタイプ。偏見である。「典型的なドイツ像」を否定するつもりはないが、それだけではつまらない。学生たちには、ステレオタイプの向こうにある本当の豊かさにこそ触れてもらいたい。

（おわり みつのり　九州産業大学教授）

## ドイツ研修旅行について

**野口 広明**

九州産業大学で2015年10月17日（土）～18日（日）と12月12日（土）～13日（日）にドイツ研修旅行の合宿がおこなわれました。ドイツ研修旅行は平成27年度で33回目となります。２週間のドイツ語講習、１週間のホームステイ、そして１週間の自主研修の３部構成です。自主研修旅行では自分で計画を立て、ドイツ語圏（ドイツ、オーストリア、スイス）を一人で旅行します。以下に「第33回ドイツ研修旅行 Studienreise nach Deutschland」の案内より一部をご紹介します。

「旅行社による営業企画ではないので、この研修に要する費用・労力・時間はすべて自分たちで負担しなければなりません。参加者全員で力を合わせて自分たちの手で作り上げていくところに、他の旅行では味わえない喜びがあります。一人一人が自分の胸一杯に満足できるような研修体験をすること、これが唯一最大の目的です。この目的のためにみんなで力を出し合っているうちに、〈自主性〉と〈協調性〉が身についていきます。〈自主性と協調性〉のハーモニーという精神は、これからの皆さんの勉学、いや人生そのものに大きな意味をもつことになるでしょう。」

（のぐち ひろあき　九州産業大学教授）

## Danke Deutschland

**佐田 正之**

早いもので、1984年に西ドイツに留学してから32年が経ちます。３年間のドイツ留学における臨床経験は私にとってかけがえのない財産です。

「外科医は数多くの手術をこなし、症例数を積み重ねて腕を磨かねばならない」という教えのもと、朝から晩まで手術に明け暮れたことが懐かしく思い出されます。

そして留学を終えて戻った自院の将来に危機感を抱き、現状を打破すべく現在佐田病院のコア技術となっている内視鏡手術を学びに行った国もドイツでした。

こうして振り返ると、ドイツで学んだことは私の血となり肉となり民間中小病院を取り巻く厳しい経営環境の中で大いに役に立っています。

私は今64歳ですが、まだまだ現役として腕を磨いていく所存です。

（さだ まさゆき　医療法人 佐田厚生会 佐田病院 理事長）

## 自由ヶ丘の春の日差しに

**横川 洋**

この研究室で迎える春は３度目。阿蘇が重要文化的景観に選定されるための基礎調査のお手伝いや福岡県の協同組合活動のささやかな支援で過ごした３年間。研究室からの折尾・自由ヶ丘の眺望は明るい。近くにサッカー・ラグビー・ハンドボール・陸上競技のグランド・トラック、野球場。遠くに高校の校舎や野球グランド……。規則正しい早朝の電車通勤が健康に良いのかもしれない。母校の学科同窓会や学部同窓会の理事もなんとかこなせている。これからどれだけ続くかわからないが、電車に揺られながらの日々を密度濃く過ごせたら良いかなと思う。

（2016年3月記，よこがわ ひろし　九州共立大学総合研究所客員研究員）

## ジルヴェスターコンサート

**浴 麻里子**

初めまして。浴麻里子と申します。現在防衛省所属の医官をしており、普段は部隊の医務室で内科診療を、週に１回は大学病院で勉強をしております。私とドイツ語の出会いは小学校２、３年生の頃でしょうか。

高校３年生まで音大進学を考えており、生活はピアノ中心、10代の思い出もほとんどがピアノにまつわるものです。当時教えてくださったピアノの先生がミュンヘンの音大で勉強されていた方で、幼かった私にもド、レ、ミではなく、C, D, E ……と感情表現も含めドイツ語で楽譜に書き込んでいたため身近なものでした。

結局迷った挙句医学部へ変更しましたが、大学は全寮制で少し特殊な環境であったためピアノを保有することはできず、以来専ら聴衆側となりました。大学時代は休暇のたびヨーロッパへ旅行する機会に恵まれましたが、やはりドイツの風景や街並みが一番心に残りました。

臨床に出てからは外来 → 手術 → 当直の繰り返しで、とても旅行にいく余裕はありませんでしたが、現在の勤務地になり徐々に仕事に慣れはじめ、６年前からベルリン限定ではありますが旅行へ行けるようになりました。目的はベルリンフィルのジルヴェスターコンサートで毎年素敵なゲストが来られるので私にとっては１年間のご褒美になっております。ドイツ語の語彙も増やしたいと思いつつ……、一向に進みませんが今年こそは……？

（えき まりこ　医師）

## 隅田公園の風

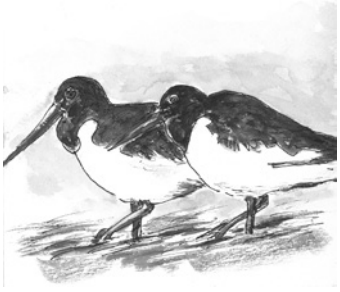
**三枝 保子**

今年の同窓会は桜満開の隅田公園散策とあり、久しぶりに参加した。半世紀以上前に一度行ったきりの、言問橋の前、薄と葦が茂った川岸に面して、ひっそりと建っていた茅葺き屋根のおだんご屋が目当てだった。“名にし負はばいざ言問はむ都鳥、わが思ふ人はありやなしやと”の小さな栞も忘れ難かった。当日風よけに、かって夫の出張に同伴した折、ミラノでお世話になった商社駐在の方におみやげに頂いたが、あまり使うこともなかった大判のスカーフを手に持ち出かけた。隅田川周辺は隅々まで整備され、見事な公園になり、おだんご屋も立派な建物に変り、店内は買い求める人が列をなし、昔日の面影はどこにもなかった。まさに往時茫々……。

友人たちと談笑しつつ歩いていると、前から来た紳士が突然「お久し振りです」と立ち止まった。スカーフを頂いた商社の方だった。彼も帰国以来、今日初めて隅田公園を歩いているとのこと。二十年以上の月日が経っているのに、スカーフのお礼を言うのも忘れ、昨日逢った人のように立ち話をして別れた。

何もかも移り変わり流れ去る中、一瞬立ち帰る風のような偶然の出来事に、ただ呆然とした。スカーフが運んでくれた魔法のような風だった。

（2015年12月記，さえぐさ やすこ）



## 50年ぶりのドイツ紀行

**中里 公哉**

最近、ボケ防止には語学の復習が良いと言われ、50年前に覚えたドイツ語に挑戦することにした。私は、1962年に日本航空南回り線開設のためフランクフルトに赴任、３年後は北回り線開設のためハンブルグに転勤となった。しかし、滞在中は仕事に追われ、観光どころではなかった。

そのため、今回2015年８月は、ドイツ語実習を兼ねてインターネットで、フライト、ホテル、電車を予約しフランクフルトを中心に観光旅行に出かけた。フランクフルトでは、昔、住んでいたザクセンハウゼンに行き、昔の小さなリンゴ酒の店が大きなレストランに変わっているのには驚いた。次に、ローテンブルグへ、ヴュルツブルグ経由でICE（超特急）を利用したが、30分も遅延し、後のローカル線にうまく接続せず時間をロスした。新しかったのは車内に自転車を持ち込む人が多いことで、若い人は楽しそうだった。古いのは支線のトイレが昔の「垂れ流し」であること、穴から線路が見える事が懐かしかった。リューデスハイムではケーブルカーで丘の上まで登り、ブドウ畑を見渡し、ふもとのドロッセルガッセの酒場でラインワインを味わって幸せであった。

（なかざと きみや　元日本航空勤務）

いると想像してほしい。

ここはアルペン・ワールドカップもしばしば開催される名の知られたところだが、私には難易度が高すぎる。30年前にはスピードをコントロールできなくなった男性に体当たりされて脳震とうを起こし、しばらく記憶がなくなった。今回は若い女性と衝突し、胸部震とうを起こしてしばらく呼吸が出来ず、立ち上がれなかった。気がつくと女性は顔に小さな傷を負い、血を流していた。今度行く時は厄払いをして行くことにする。

（ふなつ くにひこ　伊都の丘病院理事長・院長）

スキーヤーの楽しみを増す手書きの
スキー場鳥瞰図

## 猪突のアルペンスキー in オーストリア

**舩津 邦比古**

2015年３月スキーに行った。場所はオーストリア、ザルツブルク州のツェル・アム・ゼー(Zell am See)。この地域のザールバッハ・ヒンターグレム・スキー場は谷を挟んで約10kmに渡って幾つものゲレンデが並び、滑り降りては反対側の斜面に上がってまた谷に降りる、つまり谷全体がスノボーのハーフパイプ様になって

## ドイツ留学を振り返って

**石村 善治**

西日本日独協会とのお付き合いがいつ頃から始まったのか記憶が定かではありませんが、江崎シャルロッテ先生の会話教室ははっきりと覚えています。フンボルト財団による留学前だったので、1960年頃だったと思いますが、会話と同時にドイツでの食事のマナーや、ドイツ人との対応の仕方も教わりました。1961年10月から

ゲーテ・インスティテュートの語学研修をミュンヘンからさらに南の山の中のデガンドルフという「村」で受けました。零下25度の冬も経験しました。翌年から１年８ヶ月、フンボルト財団の奨学研究者として、ボン・ゲッチンゲン・ギーセン大学で研究することができました。数週間のドイツ国内研修旅行も素晴らしい思い出です。 その後、フンボルト財団から1973年と1983年にそれぞれ３ヶ月の研修滞在資金をいただき、ドイツで研究することができました。

「教育は100年の大計」というドイツ政府およびドイツ人の教育観・文化観を直接実感した者として、日本政府の「軽薄」な教育観にいつも憤慨しているというのが現状です。とくに多くの若い日本人がこれからも、ドイツについて知り学んでほしいと思っています。そのための有力な「力」としての日独協会の発展を念じています。

（いしむら ぜんじ　福岡大学名誉教授）

## ドイツ語教室「チーズを楽しむ会」

**喜多村 由布子**

ドイツ語教室受講者相互の懇親の場として初めて企画された「チーズを楽しむ会」が2016年３月１日夜７時から西日本日独協会の事務所の部屋を利用して開かれました。参加者はドイツ語教室受講者と少数の一般会員合わせて12名でした。

まず同教室受講者で、チーズの専門家でいらっしゃる会員の藤野成爾さんがチーズについてお話しをしてくださいました。チーズは製造方法によって以下のように大きく２つに分類されるとのことでした。

A　生きている、なまもの
- フレッシュタイプ：乳を固めて水切りしただけ（カッテージなど）
- ソフトタイプ：短期間（１～２ヶ月）熟成したもの（カマンベールなど）
- ハードタイプ：長期間（３ヶ月以上）熟成したもの（ゴーダなど）

B　生きていないもの、上記ハードタイプを加熱処理した加工食品
- プロセスタイプ：日本に多いプロセスチーズ

それぞれ代表的なチーズ８種類を味わいましたが、食べ比べると本当にそれぞれの特性があり、大きな違いがあることに改めて驚きました。

次にワインとの組み合わせについてお話しが進み、チーズをワインと共に味わいました。藤野さんのお話しを伺い、チーズひとつをとっても、いろいろな国々の風土や生活習慣が大きく関わっていることに改めて気づかされました。

いつもは、殺風景な事務所が、チーズとワインの香りと笑い声につつまれ、気がつくとあっという間に２時間が過ぎていました。参加者の皆様がぜひ第２回目も企画してほしいと希望され、次回の開催を楽しみに閉会となりました。またこれを機にチーズ専門店に行ってチーズを選んでみたいという新たな楽しみもできました。

初めての企画でしたが、この様ないろいろな形で事務所の部屋が利用され、協会関係の皆様方の交流の場になればと思います。

（きたむら ゆふこ　事務局員）

## ● 2016年度役員等名簿

（注：敬称略。五〇音順）

### 1．名誉職等

| 役職等 | 氏　名 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 名誉会長 | 小川 弘毅 | 在福岡ドイツ連邦共和国名誉領事<br>西部ガス株式会社相談役 |
| 顧問 | 末永 直行 | 寿軒社長、末永文化振興財団代表 |

### 2．役員

| 役　職 | 氏　名 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 会長 | 池田 紘一 | 九州大学名誉教授 |
| 副会長 | 岡嶋 泰一郎 | 社会保険仲原病院院長 |
| | 北芝 幹怡 | (株)千鳥饅頭総本舗顧問 |
| | 高田 淑 | 佐賀大学名誉教授 |
| 財務 | 高﨑 隆一 | (株)西日本マネジメント開発代表取締役 |
| 事務局長 | 藤野 成爾 | チーズプロフェッショナル協会顧問 |
| 理事 | 小黒 康正(企画) | 九州大学人文科学研究院(独文学講座)教授 |
| | 立花 雅子(年報編集) | 元高等学校教員(英語) |
| | 堺 雅志(ドイツ語教室) | 福岡大学人文学部教授 |
| | 中村 昭(国際交流) | 元九州電力関連会社代表取締役常務、日本語講師 |
| | 立花 健吾(青年部) | 福岡大学名誉教授 |
| | Holst, Sven(国際交流等) | スウェン・ホルスト、福岡女子大学文学部准教授 |
| | Godzik, Maren(国際交流等) | マーレン・ゴツィック、福岡大学人文学部准教授 |
| | 松野 正邦(企画等) | |
| | 宮崎 亮(企画等) | 木村病院副院長 |
| | 山崎 勝幸(企画等) | 声楽家 |
| 監事 | 福元 圭太 | 九州大学言語文化研究院教授 |
| | 原田 広太郎 | (株)千鳥饅頭総本舗・取締役企画室長 |
| 評議員 | 荒木 啓子、有吉 泰徳、石村 善治、大塚 潤、緒方 敏郎、加島 清士、木村 竜、<br>久保 敬司、古賀 勲、小杉 依子、萱野 通子、佐田 正之、藤 真理、二本木 一哉、<br>舩津 邦比古、村上 康子、葉 照子、横川 洋、分山邦子(以上19名) | |

## 3．委員会

| 委員会 | 委員長 | 委　　員 |
|---|---|---|
| 企画委員会 | 小黒 康正 | 池田 園子、岡嶋 美佐子、加藤 元也、北芝 幹怡、<br>堺 雅志、高田 淑、松野 正邦、宮崎 亮、<br>山崎 勝幸、葉 照子 |
| 年報編集委員会 | 立花 雅子 | 池田 園子、垣本 知子、加藤 道子、二本木 一哉 |
| ドイツ語教室委員会 | 堺 雅志 | 平松 智久、Martin Strodthoff、本田 和親 |
| 国際交流委員会 | 中村 昭 | 緒方 愛実、Sven Holst、藤 真理、宮崎 亮 |
| 青年部委員会 | 立花 健吾 | 青年部委員：緒方 愛実、木村 竜、平松 智久、高橋 明子 |

## 4．実行委員会・特別委員会

| 委員会 | 委員長 | 委　　員 |
|---|---|---|
| 連合会総会実行委員会<br>（2016年4月28日解散） | 正：池田 紘一<br>副：岡嶋 泰一郎、<br>北芝 幹怡、立花 健吾 | 委員：2015年度および2016年度全理事<br>スタッフ：全委員および会員有志より |
| HP運営特別委員会 | 正：立花 健吾<br>副：二本木 一哉 | 緒方 愛実、喜多村 由布子、木村 竜、堺 雅志、平松 智久、<br>藤野 成爾、Sven Holst |

## 5．事務局

| 役職 | 氏名 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 事務局長 | 藤野 成爾 | |
| webmaster | 立花 健吾 | 青年部委員会委員長兼務 |
| subwebmaster | 二本木 一哉 | 年報編集委員会委員兼務 |
| 事務局員 | 喜多村 由布子 | |

## 6．青年部役員

| 役　職 | 氏　名 |
|---|---|
| 部長 | 木村 竜 |
| 副部長 | 緒方 愛美、田野 武夫（東京駐在）、平松 智久、高橋 明子 |

## ● 事務局報告

# Ⅰ．2015年度会員動向および2016年度会員（敬称略）

1．2015年度退会者：24名

井上 由佳、川邊 秀樹、執行 龍美、新保 弼彬、新鹿 安夫、髙松 基助、堤 愼一郎、冨永 康彦、冨盛 美和子、中川 寿美、林 伸行、前田 睦子、前田 美紀子、丑山 優、榎本 亜紀子、江村 あずさ、金山 正道、上加世田 久美子、川原 典子、高 仁淑、定行 慶一、園本 琴音、西野 有哉、東口 豊

2．2015年度入会者：18名

加藤 元也、松重 昂志、濱砂 あかり、志田尾 友晴、黒須 眞紀子、南州マイスターヴェルク店長、井口 哲也、森 光一郎、梅野 健、喜多村 由布子、岸原 よしえ、藤野 萬璃子、大塚 潤、黒川 教子、久保 寛展（以上15名）

【2016/04/01入会】加藤 道子、森山 順子、平野 智香（以上3名）

3．2016年度会員　― 2016年4月1日現在 ―

(1) 名誉会員：　大河内 Roswitha、Dr. Gross, Helmut、Hamer, Heyo E.、Hofmann, Klaus R.、Dr. Knof, Wolfgang、Dr. Stickel, Gerhard（以上 6 名）

(2) 法人会員：　城島印刷（株）、西部ガス（株）、（株）佐賀銀行、（株）JTB 九州福岡支店、（株）千鳥饅頭総本舗、南州マイスターヴェルク（以上 6 法人）

(3) 個人会員：　合計 165 名

1) 一般会員：122 名
2) 家族会員：11 名
3) 青年会員：18 名
4) 学生会員：6 名
5) 法人指名会員：8 名

4．2016年度青年部会員　―2016年4月1日現在―

(1) 協会会員：24 名（青年会員 18 名、学生会員 6 名）

(2) 非協会会員：15 名（内、学生 5 名）

(3) 合計：39 名

# Ⅱ．2015年度活動報告

1．諸会議

(1) 2015 年度定期総会

2015年4月12日（日）17:15～18:30、KKR ホテル博多「オリオン」、出席者 32名、懇親会参加者 27名。

(2) 第 1 回理事会・第 1 回評議員会

総会当日、総会前 16:15～17:15、KKR ホテル博多「オリオン」、出席者 17名。

(3) 理事会

＊ 第2回理事会：2015年5月9日（土）16:00～18:00、協会事務所、出席者 10名。

＊ 第3回理事会・第1回60周年特別委員会：2015年7月25日（土）16:00～18:20、協会事務所、出席者 13名。

＊ 第4回理事会・第2回60周年特別委員会（第1回連合会総会実行委員会)、2015年10月10日（土）16:30～18:30、協会事務所、出席者 14名。

＊ 第5回（拡大）理事会：2016年1月17日（日）16:00～18:00、ドイツ料理レストラン「シュタット・マインツ」、出席者 19名。新年会：理事会終了後、参加者 17名。

＊ 第6回理事会：2016年2月13日（日）16:00～17:10、KKR ホテル博多、出席者 14名。

(4) 評議員会

＊ 第2回評議員会：2016年3月19日（土）16:00～18:00、福岡学生交流会館大会議室、出席者 16名。

(5) その他（所属団体・機関・組織等）

＊ 2015年全国日独協会連合会年次総会：2015年4月17日（金）14:00～18:00／18日（土）09:30～14:00、福島県いわき市勿来町、いわき勿来の関「吹風殿」、出席者 事務局長 立花 健吾。

＊「福岡オクトーバーフェスト2015」第1回実行委員会：2015年8月5日（水）14:00～18:00、RKB 毎日放送本社会議室、出席者 副会長 北芝 幹怡。

＊ 全国日独協会連合会副会長協会会議：2015年10月16日（金）14:00～18:30、(公財）日独協会事務所（東京)、出席者 事務局長 立花 健吾。

２．例会・特別例会

(1) 5 月特別例会：「ドイツのワインと料理を楽しむ会」（担当：ワインの会実行委員会）

日　時：5 月 30 日（土）14:00 ～ 16:30。

場　所：千鳥饅頭総本舗呉服町本店。

参加者：42 名。

(2) 6 月例会：卓話と懇親会（担当：企画委員会）

日　時：6 月 13 日（土）17:30 ～ 20:30。

場　所：KKR ホテル博多。

＊ 卓　話：17:30～18:30 「オリオン」

演　者：立花 健吾氏（福岡大学名誉教授、会員・事務局長)。

演　題：ベネズエラ・ギアナ高地旅行 ― ロライマ山・グランサバナトレッキング、エンジェルフォール ―。

参加者：卓話 21名

＊ 懇親会：18:30～20:30、「はくちょう」、参加者 18名。

(3) 8 月特別例会：ドイツ大使講演と「ドイツ大使歓迎の夕べ」（担当：理事会・企画委員会）

日　時：8 月 7 日（金）18:30 ～ 21:00。

場　所：KKR ホテル博多。

＊ ドイツ大使講演：18:30～19:30 「オリオン」。

演　者：ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン駐日ドイツ連邦共和国大使(Dr. Hans Carl von Werthern)。

演　題：メルケル首相訪日後の今後の日独関係［ドイツ語・通訳付］。
参加者：50 名（内、ドイツ人 3 名）。
＊ ドイツ大使歓迎の夕べ：19:30～21:00 「スバル」。
お客様：ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン駐日ドイツ大使、大使夫人、ベアーテ・フォン・デア・オステン通訳・翻訳部長（Beate von der Osten）。
参加者：39名（内、ドイツ人2名）。

(4) 9 月例会：招待講演と懇親会（担当：企画委員会）
日　時：9月19日（土）17:30～20:30。
場　所：KKR ホテル博多。
＊ 講　演：17:30～19:00 「オリオン」。
演　者：ウルリッヒ・ロスマン氏（Ulrich Rossmann）（Arup GmbH 勤務、Senior IT Support Analyst/Berlin System Manager、写真家）。
通訳・日本語解説：トモコ・カトウ＝ノルデンさん（Tomoko Kato-Nolden）（1984年より在独、ベルリン独日協会会員）。
演　題：ドイツ近代史の足跡を訪ねて ―ベルリンとブランデンブルク州―［ドイツ語・通訳付］。
参加者：42名（内、ドイツ人2名）。
＊ 懇親会：19030～20:30 「はくちょう」、参加者 38名（内、ドイツ人2名）。

(5) 11 月例会：卓話と懇親会（担当：企画委員会）
日　時：11月14日（土）18:00～20:30。
場　所：KKR ホテル博多。
＊ 卓　話：18:00～19:00 「オリオン」。
演　者：平松 智久氏（福岡大学人文学部ドイツ語学科准教授、協会 / 青年部会員）。
演　題：ドイツ卓上ゲームの歴史にみるドイツらしさ。
参加者：25名（内、ドイツ人2名）。
＊ 懇親会：19:00～20:30、「はくちょう」、参加者 24名（内、ドイツ人2名）。

(6) 12 月特別例会：「クリスマス会」（担当：クリスマス会実行委員会）
日　時：12月17日（木）18:30～20:30。
場　所：KKR ホテル博多（大ホール）。
参加者：合計120名。
会員（協会・青年部）56名、非会員 64名（子ども・招待留学生を含む）。
中学生以上の学生 4名、小学生以下の子ども 16名。
ドイツ人（外国人を含む）16名（内招待留学生 10名）

(7) 2016 年 2 月例会：卓話と懇親会（担当：企画委員会）
日　時：2016年2月13日（土）17:40～18:40。
場　所：KKR ホテル博多。
＊ 卓　話：17:40～18:40 「オリオン」。
演　者：中村 昭氏（「日本語クラスみらい」代表、会員・国際交流委員長）。
演　題：日本語指導を通じて国際交流20年 ― 活動の中で見えてきたこと ―。

参加者：卓話 45名。

＊ 懇親会：18:40～20:30 「はくちょう」、参加者 30名。

3．委員会

(1) 企画委員会：上記「2．例会・特別例会」参照。

(2) 年報編集委員会：『年報第 39 号』発行（2015 年 5 月 21 日）。

(3) ドイツ語教室委員会。

2015年度春期ドイツ語教室：合計6クラス、2015年4月～7月、受講者 合計51名。

2015年度秋期ドイツ語教室：合計6クラス、2015年10月～2016年1月、受講者 合計51名。

(4) 国際交流委員会：2016 年夏日独青少年交流企画のためのアンケート調査、および実施計画検討。

(5) ワインの会実行委員会、クリスマス会実行委員会：上記「2．例会・特別例会」参照。

(6) 60 周年特別委員会：60 周年記念事業の基本的理念と概要案検討。

(7) 連合会総会実行委員会：2016 年全国日独協会連合会年次総会開催準備。

4．共催

(1) 第 6 回福岡オクトーバーフェスト 2015

2015年10月16日（金）～10月25日（日）、冷泉公園。

(2) 第 7 回福岡で楽しむ EU

2016年2月22日（月）、西鉄グランドホテル2F「鳳凰の間」。

参加者：会員 9名、同伴者 3名、合計 12名。

5．後援・協賛・支援

(1)（支援）「子ども村 福岡」募金

2015年12月17日（木）、「クリスマス会」会場での募金。

(2)（後援）デュッセルドルフ美術館所蔵アールヌーヴォーのガラス展

2016年2月11日（木）～3月27日（土）、福岡市博物館（福岡市早良区）

主催：福岡市博物館、TVQ 九州放送、西日本新聞社。

## Ⅲ．2015年度協会会計・留学生基金収支決算報告および会計監査報告

1．2015年度会計決算報告 ―2014年4月1日～2015年3月31日―

(1) 収入

| 費　目 | 項目 | | 予算 | 決算 | 増減（予算－決算） |
|---|---|---|---|---|---|
| | 区分 | 項目 | | | |
| 運営費 | | 繰越金 | 189,728 | 189,728 | 0 |
| | 年会費 | 次年度前納金 | 0 | 56,000 | △ 56,000 |
| | | 個人年会費 | 960,000 | 851,500 | 108,500 |
| | | 法人年会費 | 160,000 | 140,000 | 20,000 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 運営費 | 広告費 | 個人広告費 | 20,000 | 0 | 20,000 |
| | | 法人広告費 | 100,000 | 110,000 | △ 10,000 |
| | | 寄付 | 0 | 8,500 | △ 8,500 |
| | | 雑収入 | 272 | 19,923 | △ 19,651 |
| 活動費<br>（参加費等） | | 定期総会懇親会 | 100,000 | 88,500 | 11,500 |
| | | 例会参加費 | 400,000 | 352,000 | 48,000 |
| | 特別<br>例会 | ワインと料理の会 | 120,000 | 147,500 | △ 27,500 |
| | | 日独交流夏祭 | 150,000 | 0 | 150,000 |
| | | クリスマス会 | 450,000 | 447,000 | 3,000 |
| | | 講演会 | 100,000 | 0 | 100,000 |
| | | その他 | 0 | 150,000 | △ 150,000 |
| 事業費<br>（ドイツ語教室） | | 春期受講料等 | 1,000,000 | 1,155,292 | △ 155,292 |
| | | 秋期受講料等 | 1,000,000 | 1,036,100 | △ 36,100 |
| | | 16春期受講料等 | 0 | 726,820 | △ 726,820 |
| 合計 | | | 4,750,000 | 5,478,863 | △ 728,863 |

(2) 支出

| 費　　目 | 項目 | | 予算 | 決算 | 増減<br>（予算－決算） |
|---|---|---|---|---|---|
| | 区分 | 項目 | | | |
| 運営費 | 経常費 | 事務所家賃 | 240,000 | 240,000 | 0 |
| | | 光熱水道費 | 65,000 | 57,289 | 7,711 |
| | | 電話代 | 80,000 | 81,045 | △ 1,045 |
| | | インターネット | 30,000 | 4,838 | 25,162 |
| | | 人件費 | 600,000 | 600,000 | 0 |
| | | 事務経費 | 50,000 | 22,741 | 27,259 |
| | | 通信印刷費 | 90,000 | 113,538 | △ 23,538 |
| | | 会議費 | 20,000 | 13,861 | 6,139 |
| | | 渉外費 | 50,000 | 63,336 | △ 13,336 |
| | | 旅費交通費 | 50,000 | 87,600 | △ 37,600 |
| | | 青年部補助費 | 30,000 | 0 | 30,000 |
| | | 年報発行費 | 270,000 | 275,400 | △ 5,400 |
| | | 会員名簿発行費 | 30,000 | 0 | 30,000 |
| | | 雑費 | 30,000 | 17,358 | 12,642 |
| | | 予備費 | 145,000 | 61,560 | 83,440 |
| 活動費<br>（参加費等） | | 定期総会懇親会 | 100,000 | 73,248 | 26,752 |
| | | 例会 | 400,000 | 375,329 | 24,671 |
| | 特別<br>例会 | ワインと料理の会 | 120,000 | 126,185 | △ 6,185 |
| | | 日独交流夏祭 | 150,000 | 0 | 150,000 |
| | | クリスマス会 | 450,000 | 446,746 | 3,254 |
| | | 講演会 | 100,000 | 0 | 100,000 |
| | | その他 | 0 | 119,360 | △ 119,360 |
| 事業費<br>（ドイツ語教室） | | 春期教室経費 | 825,000 | 923,897 | △ 98,897 |
| | | 秋期教室経費 | 825,000 | 801,926 | 23,074 |
| | | 16春期教室経費 | 0 | 39,300 | △ 39,300 |
| 合計 | | | 4,750,000 | 4,544,557 | 205,443 |

(3) 決算収支計算

収入合計－支出合計＝5,478,863－4,544,557＝934,306円（残金）

(4) 残金内訳

| 残金 | 前受金(注) | 繰越金 |
|---|---|---|
| 934,306 | 687,520 | 246,786 |

(注)前受金＝16春期受講料等前受金収入－16春期教室経費(16年春期教室教科書代)

2．2015年度留学生基金収支決算 ― 2015年4月1日～2016年3月31日 ―

(注：当活動基金は協会会計とは別会計である。)

| 月/日 | 項目 | 備考 | 収入 | 支出 | 残金 |
|---|---|---|---|---|---|
| 4/1 | 前年度繰越金 | | 35,196 | | 35,196 |
| 12/17 | クリスマス会 | 留学生招待:2,500円×10名 | | 25,000 | 10,196 |
| 合計(残金は次年度へ繰越) | | | 35,196 | 25,000 | 10,196 |

3．2015年度会計監査報告

2015年度西日本日独協会会計および留学生基金監査報告書

西日本日独協会
会長　池田 紘一 殿

2015年度（2015年4月1日～2016年3月31日）西日本日独協会会計および留学生基金について、諸帳簿、収支決算書、預金通帳および関係書類に基づき監査した結果、その内容が適正かつ経理事務が正確であることを報告します。

2016年4月8日
監事　有村 隆広　印
監事　高田　淑　印

## Ⅳ．2016年度活動計画

1．創立60周年記念事業

(1)「留学生基金」の充実。

(2) 年報「創立 60 周年記念号」（第 41 号）発行（発刊は 2017 年 5 月予定)。

(3) 2016 年全国日独協会連合会年次総会、および「若手会員の集い」開催。

(4) バイエルン独日協会との青少年交流（相互訪問)。

2．企画委員会関係

(1) 創立 60 周年オープニング・セレモニー＆パーティ（4 月 17 日定期総会に引続き開催)。

(2) 創立 60 周年記念例会。

1)　5 月 28 日（土）卓話：「人間はみな一つの太陽を仰ぐ―ケンペルの日本研究について」。
ヴォルフガング・ミヒェル氏（会員、九州大学名誉教授）。

2)　7 月 22 日（金）音楽会：くちぶえコンサート。
分山 貴美子氏（国際口笛コンサート優勝者）。

3)　9 月 17 日（土）卓話：「ドイツビールよもやま話」（仮題）。
松沢 幸一氏（元麒麟麦酒社長、ドイツ・ビアマイスター）。

4) 11 月 19 日（土）卓話：「ドイツの歴史～文化史・日常史にも注目」（仮題）。
神寶 秀夫氏（九州大学名誉教授）。

5) 12 月 15 日（木）クリスマス会。

6) 2017 年 1 月　　卓話：未定。

7) 2017 年 3 月　　卓話：未定。

(3) 2016 年初夏（6 月）または 2017 年初春（2 月）:大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事講演会（予定）。

3．連合会総会実行委員会関係（創立 60 周年記念事業）

(1) 4 月 22 日（金）～ 23 日（土）全国日独協会連合会年次総会、およびエクスカーション。

(2) 4 月 23 日（土）　全国日独協会連合会「若手会員の集い」。

4．年報編集委員会関係

(1)「年報第 40 号」発行：2016 年 5 月 25 日。

5．ドイツ語教室委員会関係

(1) 2016 年度春期ドイツ語教室：4 月～ 7 月、6 クラス開設。

(2) 2016 年度秋期ドイツ語教室：10 月～ 2017 年 1 月、6 クラス開設。

6．国際交流委員会関係

(1) バイエルン独日協会との青少年交流（創立 60 周年記念事業）。

(2) 各種日独交流。

7．青年部委員会関係：以下の青年部活動サポート

(1) 福岡・西日本地域における日独若者交流の促進・企画。

(2) 福岡大学ドイツ語学科・エクステンションセンター主催「ドイツ語映画鑑賞会」参加。

(3) 全国日独協会連合会およびドイツの若者関連団体・組織との交流。

(4) 青年部独自の催し。

8．事務局関係

(1)「会員名簿」発行：2016 年 5 月 25 日。

9．他団体との共催・後援・支援行事

(1) 4 月 16 日（土）～ 6 月 5 日（日） 福岡県立美術館・TNC テレビ西日本・西日本新聞社主催「色彩の奇跡　印象派展　ドイツ・ケルン ヴァルラフ＝リヒャルツ美術館コレクションから」 福岡県立美術館（後援）。

(2) 4 月 23 日（土）「シンフォニエッタ福岡 室内オーケストラシリーズ J.S. バッハのカンタータ」（後援）。

(3) 6 月 18 日（土）在福 3 大学有志主催「ドイツ語スピーチコンテスト 2016」（後援）。

(4) 10 月「第 7 回 福岡オクトーバーフェスト」（共催）。

(5) 11 月 22 日（火）朗読オペラ・宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」福岡公演（後援）。

(6) 12 月 15 日（木）「子どもの村 福岡」募金（支援）。

(7) 2017 年 2 月「第 8 回　福岡で楽しむ EU」（共催）。

## Ⅴ．2016年度協会会計・留学生基金収支予算　―2016年4月1日～2017年3月31日―

1．2016年度協会会計収支予算

(1) 収入

| 費　目 | 項目 | | 2015年度 | | 2016年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 区分 | 項目 | 予算 | 決算 | 予算 | 前年度比 |
| 運営費 | | 繰越金 | 189,728 | 189,728 | 246,786 | 57,058 |
| | 年会費 | 次年度前納金 | 0 | 56,000 | 0 | 0 |
| | | 個人年会費 | 960,000 | 851,500 | 900,000 | △ 60,000 |
| | | 法人年会費 | 160,000 | 140,000 | 160,000 | 0 |
| | 広告費 | 個人広告費 | 20,000 | 0 | | △ 20,000 |
| | | 法人広告費 | 100,000 | 110,000 | 120,000 | 20,000 |
| | | 寄付 | 0 | 8,500 | 0 | 0 |
| | | 雑収入 | 272 | 19,923 | 214 | △ 58 |
| 活動費（参加費等） | | 定期総会懇親会 | 100,000 | 88,500 | 150,000 | 50,000 |
| | | 例会参加費 | 400,000 | 352,000 | 1,050,000 | 650,000 |
| | 特別例会 | ワインと料理の会 | 120,000 | 147,500 | 0 | △ 120,000 |
| | | 日独交流夏祭 | 150,000 | 0 | 0 | △ 150,000 |
| | | クリスマス会 | 450,000 | 447,000 | 0 | △ 450,000 |
| | | 講演会 | 100,000 | 0 | 200,000 | 100,000 |
| | | その他 | 0 | 150,000 | 0 | 0 |
| 事業費（ドイツ語教室） | | 春期受講料等 | 1,000,000 | 1,155,292 | 890,000 | △ 110,000 |
| | | 秋期受講料等 | 1,000,000 | 1,036,100 | 950,000 | △ 50,000 |
| | | 次年度春期受講料等 | 0 | 726,820 | 0 | 0 |
| 合計 | | | 4,750,000 | 5,478,863 | 4,667,000 | △ 83,000 |

(2) 支出

| 費　目 | 項目 | | 2015年度 | | 2016年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 区分 | 項目 | 予算 | 決算 | 予算 | 前年度比 |
| 運営費 | 経常費 | 事務所家賃 | 240,000 | 240,000 | 240,000 | 0 |
| | | 光熱水道費 | 65,000 | 57,289 | 65,000 | 0 |
| | | 電話代 | 80,000 | 81,045 | 80,000 | 0 |
| | | インターネット | 30,000 | 4,838 | 5,000 | △ 25,000 |
| | | 人件費 | 600,000 | 600,000 | 600,000 | 0 |
| | | 事務経費 | 50,000 | 22,741 | 20,000 | △ 30,000 |
| | | 通信印刷費 | 90,000 | 113,538 | 110,000 | 20,000 |
| | | 会議費 | 20,000 | 13,861 | 10,000 | △ 10,000 |
| | | 渉外費 | 50,000 | 63,336 | 65,000 | 15,000 |
| | | 旅費交通費 | 50,000 | 87,600 | 25,000 | △ 25,000 |
| | | 青年部補助費 | 30,000 | 0 | 30,000 | 0 |
| | | 年報発行費 | 270,000 | 275,400 | 270,000 | 0 |
| | | 会員名簿発行費 | 30,000 | 0 | 25,000 | △ 5,000 |
| | | 雑費 | 30,000 | 17,358 | 20,000 | △ 10,000 |
| | | 予備費 | 145,000 | 61,560 | 22,000 | △ 123,000 |
| 活動費<br>(参加費等) | | 定期総会懇親会 | 100,000 | 73,248 | 150,000 | 50,000 |
| | | 例会 | 400,000 | 375,329 | 1,050,000 | 650,000 |
| | 特別<br>例会 | ワインと料理の会 | 120,000 | 126,185 | 0 | △ 120,000 |
| | | 日独交流夏祭 | 150,000 | 0 | 0 | △ 150,000 |
| | | クリスマス会 | 450,000 | 446,746 | 0 | △ 450,000 |
| | | 講演会 | 100,000 | 0 | 200,000 | 100,000 |
| | | その他 | 0 | 119,360 | 0 | 0 |
| 事業費<br>(ドイツ語教室) | | 春期教室経費 | 825,000 | 923,897 | 830,000 | 5,000 |
| | | 秋期教室経費 | 825,000 | 801,926 | 850,000 | 25,000 |
| | | 次年度春期教室経費 | 0 | 39,300 | 0 | 0 |
| 合計 | | | 4,750,000 | 4,544,557 | 4,667,000 | △ 83,000 |

2．2016年度留学生基金予算（注：当基金は協会会計とは別会計である。）

| 月/日 | 摘要 | 収入 | 支出 | 差引残高 |
|---|---|---|---|---|
| 4/1 | 前年度繰越金 | 10,196 | | 10,196 |
| | 募金より移管(注) | 200,000 | | 210,196 |
| | クリスマス会 | | 25,000 | 185,196 |
| 合計 | | 210,196 | 25,000 | 185,196 |

(注) この募金は「創立60周年記念事業募金」。

## ● 青年部報告

# Ⅰ．2016年度青年部役員および青年部会員

協会の「2016年度役員等名簿」および「事務局報告」の「Ⅰ．2015年度会員動向および2016年度会員」参照。

# Ⅱ．2015年度青年部活動報告

1．諸会議

(1) 2015 年度定期総会：2015 年 4 月 12 日（日)、KKR ホテル博多「オリオン」。

(2) 第 1 回青年部委員会：2015 年 6 月 27 日（土)、KKR ホテル博多 1 階喫茶店。

(3) 第 1 回青年部運営会議：2015 年 7 月 19 日（日)、アクロス福岡 1 階喫茶店。

(4) 第 2 回青年部委員会（持ち回り)：2016 年 1 月 26 日（火）/27 日（水)。

(5) その他（所属団体・機関・組織等）

1) 日独協会「若手会員の集い」:2015 年 9 月 23 日（水、祝日、午前)、(公財）日独協会事務所（東京)。
出席者：田野 武夫、松重 昂志。

2．活動・イベント

(1) 第 2 回ドイツゲーム会と懇親会：2015 年 9 月 27 日（日)、「シュタット・マインツ」。
参加者：ゲーム会 15 名（内、ドイツ人 2 名、子ども 3 名)、懇親会 18 名（内、ドイツ人 3 名、子ども 3 名)。

(2) 第 3 回ドイツゲーム会と懇親会：2016 年 1 月 10 日（日)、「シュタット・マインツ」
参加者：ゲーム会 21 名、大人 13 名（内ドイツ人 2 名)、子ども 8 名（内、ドイツ人 2 名)。
懇親会 17 名、大人 11 名（内ドイツ人 2 名)、子ども 6 名（内、ドイツ人 2 名)。

(3) ドイツ語映画鑑賞会

【各回共通事項】

＊ 主　催：福岡大学人文学部ドイツ語学科、福岡大学エクステンションセンターとの共催。
（市民カレッジ「映像に見るヨーロッパ文化―ドイツ語圏―」）

＊ 企画・運営：福岡大学公認愛好会「ドイツ語クラブ」。

＊ 場所：福岡大学図書館 多目的ホール（第23回・24回は、A 棟2階 A 201教室)。

1) 第 17 回ドイツ語映画観賞会：『マーサの幸せレシピ』（日本語字幕・解説付) 4 月 23 日（木)。

2) 第 18 回ドイツ語映画観賞会：『幸せのレシピ』（日本語字幕・解説付) 5 月 7 日（木)。

3) 第 19 回ドイツ語映画観賞会：『ミケランジェロの暗号』（日本語字幕・解説付) 6 月 4 日（木)。

4) 第 20 回ドイツ語映画鑑賞会：『9000 マイルの約束』（日本語字幕・解説付) 7 月 23 日（土)。

5) 第 21 回ドイツ語映画鑑賞会：『おじいちゃんの里帰り』（日本語字幕・解説付) 10 月 1 日（木)。

6) 第 22 回ドイツ語映画鑑賞会：『ウェイヴ』（日本語字幕・解説付) 11 月 5 日（木)。

7) 第 23 回特別篇･第 3 回ドイツ音楽鑑賞会:メンデルスゾーン『夏の夜の夢』(解説付) 12 月 3 日 (木)。

8）第 24 回ドイツ語映画鑑賞会:『千と千尋の神隠し』（ドイツ語吹き替え版･解説付）12 月 10 日（木）。

(4）その他

1）ドイツ大使館主催「日独協会 秋祭り」:2015 年 9 月 23 日（水、祝日）午後、ドイツ大使公邸（東京）。
主催：ハンス・カール・フォン・ヴェアテルン駐日ドイツ連邦共和国大使。
参加者（青年部会員）：田野 武夫、松重 昂志。

## Ⅲ．2015年度青年部会計収支決算報告および会計監査報告

(1）2015 年度会計収支決算

1）収入

| 費　　目 | 予算 | 決算 | 増減<br>予算－決算 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 繰越金 | 16,879 | 16,879 | 0 | |
| 青年部補助費 | 30,000 | 0 | 30,000 | 協会会計より |
| 行事参加費 | 30,000 | 9,500 | 20,500 | |
| 雑収入 | 0 | 10 | △ 10 | 寄付､銀行利子他 |
| 合計 | 76,879 | 26,389 | 50,490 | |

2）支出

| 費　　目 | 予算 | 決算 | 増減<br>予算－決算 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 運営費 | 5,000 | 1,600 | 3,400 | |
| 活動費 | 50,000 | 216 | 49,784 | |
| 雑費 | 0 | 0 | 0 | |
| 予備費 | 21,879 | 0 | 21,879 | |
| 合計 | 76,879 | 1,816 | 75,063 | |

3）収支計算

収入合計－支出合計＝26,389－1,816＝24,573円（繰越金）

(2）2015 年度青年部会計監査報告

2015年度西日本日独協会青年部会計監査報告書

西日本日独協会
会長　池田 紘一 殿

2015年度（2015年4月1日～2016年3月31日）西日本日独協会青年部会計について、諸帳簿、収支決算書、預金通帳および関係書類に基づき監査した結果、その内容が適正かつ経理事務が正確であることを報告します。

2016年4月5日　西日本日独協会
事務局長　立花 健吾　印

## Ⅳ．2016年度青年部活動計画

(1) 2016 年度青年部定期総会

日　時：2016 年 4 月 17 日（日）　15：00 ～ 15：45。

場　所：KKR ホテル博多。

(2) 全国日独協会連合会「若手会員の集い」

日　時：2016 年 4 月 23 日（土)。

場　所：ドイツ料理レストラン「シュタット・マインツ」。

(3) 青年部メーリングリスト

活動開始時期：未定。

参加者：協会 / 青年部会員、その他誰でも自由。

内　容：メールを利用した協会 / 青年部会員同士の情報共有、青年部活動企画の検討。

(4) ドイツゲーム会＆懇親会

日時、場所：未定。

(5) *****cafe（仮称）：日独交流の場

日　時：未定（1 ヶ月～隔月毎の定期的な開催を予定)。

場　所：アクロス福岡 3 階の「こくさいひろば」「交流スペース」(予定)。

参加者：協会 / 青年部会員、その他誰でも自由。

（特にドイツおよびドイツ語圏の人たちの参加が望まれる。）

内　容：自由なおしゃべり、情報交換等々。

## Ⅴ．2016年度青年部会計収支予算

(1) 収入

| 費　目 | 2015年度 | | 2016年度 | |
|---|---|---|---|---|
| | 予算 | 決算 | 予算 | 前年度比 |
| 繰越金 | 16,879 | 16,879 | 24,563 | 7,684 |
| 青年部補助費 | 30,000 | 0 | 30,000 | 0 |
| 行事参加費 | 30,000 | 9,500 | 70,000 | 40,000 |
| 雑収入 | 0 | 0 | 437 | 437 |
| 合計 | 76,879 | 26,379 | 125,000 | 48,121 |

(2) 支出

| 費　目 | 2015年度 | | 2016年度 | |
|---|---|---|---|---|
| | 予算 | 決算 | 予算 | 前年度比 |
| 運営費 | 5,000 | 1,600 | 30,000 | 25,000 |
| 活動費 | 50,000 | 216 | 70,000 | 20,000 |
| 予備費 | 21,879 | 0 | 20,000 | △ 1,879 |
| 雑費 | 0 | 0 | 5,000 | 5,000 |
| 合計 | 76,879 | 1,816 | 125,000 | 48,121 |

## ● 西日本日独協会会則

第１章　総則

第１条　名称　本会は西日本日独協会と称する。

第２条　事務局　本会の事務局は福岡市中央区白金2-9-6 城島印刷内におく。

第２章　目的および事業

第３条　目的　本会は日独両国間の学術、経済および文化面における交流を助長し、あわせて両国民の親善を図ることを目的とする。

第４条　事業　本会は第３条の目的を達成するために次の事業を行う。
１．例会および特別例会。
２．ドイツ語教室および各種関連講座。
３．年報の発行。
４．ドイツからの留学生などとの交流および支援。
５．本会の目的に合致する催しなどの主催、共催および後援。

第５条　青年部　本会はその目的および基本方針に沿って、青年部を設ける。青年部の規定は別に定める。

第３章　会員

第６条 会員の種別と区分　本会の会員の種別および区分は次の通りとする。
１．名誉会員　本会発展のために多大の寄与または特別の功労があり、理事会で承認された者とする。
２．法人会員　理事会の議を経て会長が承認した法人。法人会員は代表者2名を個人会員として指名することができる。
３．個人会員　個人会員は本会の目的に賛同し、第７条に定める規定により入会を承認された個人であり、以下の通り区分される。
(1) 一般会員
(2) 家族会員　一般会員の家族で、郵送物を同封する個人会員。
(3) 青年会員　4月1日時点において44歳以下の個人会員。
(4) 学生会員　4月1日時点において34歳以下で、大学、専門学校および高等学校に在籍する個人会員。
(5) 法人指名会員　法人会員によって指名された個人会員。

第７条　入会　個人会員および法人会員は、所定の入会申込書を提出し、申込書受理後、所定の会費を納入することで入会手続きを完了する。

第８条　退会
１．退会を希望する者は退会届を提出しなければならない。
２．退会に際しての会費納入は会費細則に定める。
３．2年以上会費を滞納した場合は退会と見なされる。

第４章　名誉会長および顧問

第９条　名誉会長　本会に２名以内の名誉会長を置くことができる。
１．名誉会長は理事会の推薦により、会長がこれを委嘱する。
２．名誉会長は、会長の求めに応じ、協会の諸会議および諸事業に出席もしくは参加することができる。

第10条　顧問　本会に若干名の顧問を置くことができる。
1．顧問は理事会の推薦により、会長がこれを委嘱する。
2．顧問は、会長の求めに応じ、理事会に出席して意見を述べることができる。

## 第5章　役員

第11条　役員　本会に次の役員を置く。
1．会長　1名。
2．副会長　3名以内。
3．財務　1名。
4．事務局長　1名。
5．理事　常設の委員会担当理事および各種専門理事、計12名以内。
6．監事　2名。
7．評議員　20名以内。

第12条　役員の選出
1．会長は理事会が推薦し、評議員会および総会の承認を得る。
2．副会長、財務および事務局長は会長が個人会員の中から推薦し、理事会の議を経て、評議員会および総会の承認を得る。
3．理事は理事会が個人会員の中から推薦し、評議員会および総会の承認を得る。
4．監事は理事会が第11条1.～5.の役員を除く個人会員の中から推薦し、評議員会および総会の承認を得て、会長が委嘱する。
5．評議員は理事会が第11条1.～6.の役員を除く個人会員の中から推薦し、評議員会および総会の承認を得て、会長が委嘱する。

第13条　役員の職務
1．会長は本会を代表し、会務を統括する。
2．副会長は会長を補佐し、会長に事故ある時はその職務を代行する。
3．財務は本会の財産を総合的に管理する。
4．事務局長は本会の会務に関わる業務を統括する。
(1) 事務局業務遂行のため、事務局員を置くことができる。事務局員は理事会により任命される。
5．理事は理事会を組織し、会務を執行するとともに、会長の求めに応じて会務の一部を処理し、理事会、評議員会および総会で処理すべき事項につき資料の収集および準備などを行う。
6．監事は本会の財産および業務の執行を監査する。
7．評議員は評議員会を組織し、本会の運営および活動に関する重要事項を審議する。

第14条　役員の任期　役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

## 第6章　委員会

第15条　本会の事業遂行のために常設の委員会を設ける。
1．常設委員会とその任務は以下の通りとする。
(1) 企画委員会　企画委員会は、例会、特別例会、協会主催あるいは共催各種イベントなどの事業を企画し、そのすべての業務を行う。
(2) 年報編集委員会　年報編集委員会は年報の編集および発行に関するすべての業務を行う。
(3) ドイツ語教室委員会　ドイツ語教室委員会はドイツ語教室およびドイツ語やドイツに関する各種講座およびイベントに関するすべての業務を行う。
(4) 国際交流委員会　国際交流委員会は日独および国際的交流に関するすべての業務を行う。
(5) 青年部委員会　青年部委員会は協会の委員および青年部役員の委員をもって構成し、協会と青年部相互間の連絡および各種調整を行うとともに、青年部の運営および活動全般を監査する。

２．各委員会委員長は当該委員会担当理事とする。
３．各委員会委員は、委員長が個人会員の中から選び、会長が委嘱する。
４．各委員会は必要な場合、より専門的業務を担当する部会を設けることができる。部会員は委員長が個人会員の中から選び、会長が委嘱する。

第16条　実行委員会等　会長が必要と認めた場合、理事会の議を経て、実行委員会等を設けることができる。この委員会の委員長および委員は会長が個人会員の中から指名あるいは選定する。

## 第７章　会議

第17条　本会の会議は総会、理事会および評議員会とする。

第18条　総会
１．総会は第６条2. に規定する個人会員をもって構成する。
２．定期総会　定期総会は年１回会長が招集し、以下の事項を審議承認する。
(1) 活動報告および活動計画。
(2) 予算および決算。
(3) 役員の承認。
(4) 会則の変更。
(5) その他会長が認めた重要事項。
３．臨時総会　臨時総会は会長が必要と認めた場合、招集する。また、理事会からの請求があった場合、会長はこれを招集しなければならない。
４．総会の議事は出席者の過半数の賛成をもって決議する。

第19条　理事会
１．理事会は会長、副会長、財務、事務局長および理事をもって構成する。
２．理事会は必要に応じて会長が招集し、議長は会長とする。
３．理事会は以下の事項を審議する。
(1) 会長の推薦。
(2) 副会長、財務および事務局長の承認。
(3) 理事、監事および評議員の推薦。
(4) 活動報告、活動計画、決算および予算に関する事項。
(5) 会則の変更。
(6) その他審議することが必要な事項。

第20条　評議員会
１．評議員会は会長、副会長、財務、事務局長、理事、監事および評議員をもって構成する。
２．評議員会は会長が必要と認めた場合、これを招集する。
３．理事および評議員の1/3 以上、または個人会員の1/2 以上の請求があった場合、会長は評議員会を招集しなければならない。
４．評議員会は以下の事項を審議する。
(1) 総会に付議すべき事項。
(2) 会長、副会長、財務、事務局長、理事、監事および評議員の承認。
(3) 活動計画。
(4) その他の重要事項。
５．評議員会の議事は出席者の過半数の賛成をもって決議する。

## 第８章　会費および会計

第21条　会費　会員はその種別および区分により、会費細則に定める会費を納入しなければならない。

第22条　経費　本会の経費は会費、寄付およびその他の収入をもってこれに当てる。

第23条　会計年度　本会の会計年度は毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

## 第９章　会則の変更

第24条　会則の変更　本会則の変更は理事会で審議し、評議員会の決議を経て、総会の承認を得ることを要する。

## 付則

１．昭和51（1976）年　会則制定。
２．この間、数回の一部改正。
３．平成25年5月12日　一部改正。
４．平成26年4月13日　全面改定。
５．2015年4月12日　一部改正。

## 会費細則

１．個人会員の年会費は以下の通りとする。
(1) 一般会員 6,000円
(2) 家族会員 3,000円
(3) 青年会員 4,000円
(4) 学生会員 1,000円
２．法人会員の年会費は20,000 円以上とし、当該年度に全額納入するものとする。
３．年度下半期、10月～翌年3月まで入会の場合、当該年度の年会費は半額とする。ただし、学生会員および法人会員には適用されない。
４．名誉会員および法人指名会員は会費の納入を要しないものとする。
５．退会の際の会費納入は以下の通りとする。
(1) 当該年度の4月1日～9月30日申し出の場合所定年会費の半額を、10月1日～翌年3月31日申し出の場合全額を納入するものとする。
(2) 学生会員および法人会員はその申し出の時期にかかわらず、当該年度の会費全額を納入しなければならない。
６．この細則の変更は理事会で審議し、評議員会および総会の承認を得ることを要する。
７．付則
(1) 昭和51（1976）年（?）　会費細則制定。
(2) この間、数回の一部改正。
(3) 平成25年5月12日　一部改正。
(4) 平成26年4月13日　全面改定。
(5) 2015年4月12日　一部改正。

## 西日本日独協会青年部規定

第１章　総則

第１条　名称　本組織は西日本日独協会青年部（以下、青年部と略称）と称する。

第２条　組織　青年部は西日本日独協会（以下、協会と略称）の会則第５条に基づき設けられる協会の下部組織であり、協会の青年部委員会の監査下に置かれる。

第３条　本拠　青年部の本拠は、福岡市中央区白金2-9-6 城島印刷気付 西日本日独協会内とする。

第２章　目的、運営と活動および事業

第４条　目的　青年部は協会の目的に沿い、若者の立場から日独交流の発展に寄与するべく、日独の若者たちの多方面にわたる交流を促進し、日本の若者たちのドイツに対する興味・関心を喚起するとともに、その活動を通じて自らの文化的・国際的視野を広げ、国際交流という面において地域社会に貢献できる力を身につけることを目的とする。

第５条　運営と活動
１．青年部の運営および活動は青年部によって自主的になされる。
２．ただし、その運営と活動は協会青年部委員会における審議と承認を前提とする。
３．青年部は上記目的に沿い、日独の関連諸団体との交流を行う。
４．青年部の活動は自由であるが、"Die Verantwortung in der Freiheit" というモットーのもと、品格ある活動を心がける。
５．青年部は協会の諸活動に、積極的に参加・協力する。

第６条　事業　青年部は第４条の目的を達成するために、その目的に合致する催しの主催、共催および後援等の事業を行う。

第３章　青年部会員

第７条　青年部会員　青年部構成員は青年部会員と称し、45歳以下の協会会員、および第４条の青年部の目的に賛同する非協会会員とする。

第８条　入会　青年部への入会は以下の通りとする。
１．協会の学生会員および青年会員は自動的に青年部会員となる。
２．非協会会員は、所定の入会申込書を提出し、その受理をもって入会手続きを完了する。

第９条　退会　青年部からの退会は以下の通りとする。
１．青年部会員が４月１日時点で45歳に達した時は、自動的に退会する。
２．非協会会員青年部会員が４月１日時点で45歳に達する前に退会を希望する場合は、退会届を提出しなければならない。

第４章　役員

第10条　役員　青年部に次の役員を置く。
１．部長　１名。
２．副部長　４名以内。
３．青年部の役員は協会青年部委員会の委員となる。
第11条　役員の選出
１．部長は青年部総会で選出する。
２．副部長は部長が推薦し、青年部総会の承認を得る。

第12条　役員の職務
１．部長は青年部を代表し、青年部を統括する。
２．副部長は部長を補佐し、部長に事故ある時はその職務を代行する。

第13条　役員の任期　役員の任期は２年とする。ただし再任を妨げない。

## 第５章　委員会

第14条　実行委員会　実行委員会は、部長が必要と認めた場合、運営会議の議を経て、設けることができる。
１．実行委員会は個々のイベントや行事等の業務を行う。
２．実行委員会の委員長および委員は、部長が青年部会員の中から指名あるいは選定する。

## 第６章　会議

第15条　青年部の会議は総会および運営会議とする。

第16条　総会
１．総会は第７条に定める青年部会員をもって構成する。
２．定期総会　定期総会は年度はじめ、１回部長が招集し、以下の事項を審議、決定する。
(1) 活動計画および活動報告。
(2) 予算および決算。
(3) 部長の選出。
(4) 副部長、委員長の承認。
(5) 規定の変更。
(6) その他部長が認めた重要事項。
３．臨時総会　臨時総会は運営会議、もしくは協会青年部委員会からの請求があった場合、部長はこれを招集しなければならない。
４．総会の議事は出席者の過半数の賛成をもって決議する。
５．総会には協会青年部委員会の委員長および委員がオブザーバーとして出席することができる。

第17条　運営会議
１．運営会議は、部長、副部長で構成する。
２．運営会議は青年部の運営および活動に関するすべての事項を審議する。
３．運営会議には協会青年部委員会の委員長および委員がオブザーバーとして出席することができる。

## 第７章　会費および会計

第18条　会費　青年部の会費は無料とする。

第19条　会計
１．青年部の運営費および活動費は協会予算、寄付およびその他の収入をもってこれに当てる。
２．青年部の活動費は活動ごとに検討し、決定する。

第20条　会計年度　青年部の会計年度は毎年４月１日から翌年３月31日までとする。

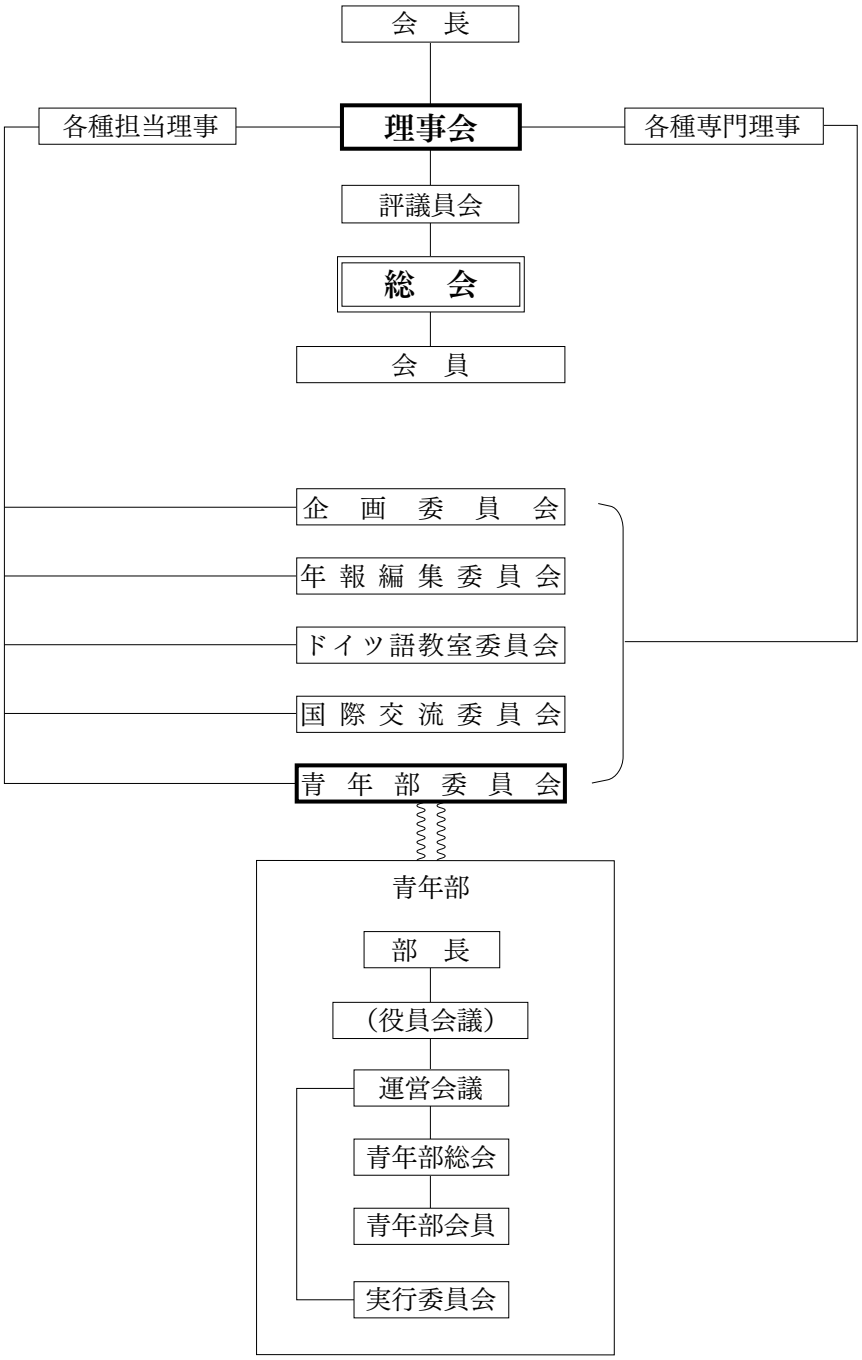
## 第８章　規定の変更

第21条　規定の変更　青年部規定の変更は運営会議および協会青年部委員会で審議し、青年部総会で決定の後、協会の理事会および評議員会の承認を経て、協会総会の承認を得ることを要する。

## 付則

１．本規定は平成26年４月13日より発効するものとする。
２．2015年４月12日　一部改正。
３．2016年４月17日　一部改正。

## ● 西日本日独協会組織図


会　長
各種担当理事
理事会
各種専門理事
評議員会
総　会
会　員
企　画　委　員　会
年 報 編 集 委 員 会
ドイツ語教室委員会
国 際 交 流 委 員 会
青　年　部　委　員　会
青年部
部　長
（役員会議）
運営会議
青年部総会
青年部会員
実行委員会

## ● 入会のご案内

1．「個人会員入会申込書」（下に縮小版の見本）の諸事項をご記入、署名・捺印の上、協会事務局へ提出、または郵送してください。なお、法人会員については事務局へお問い合わせください。

2．「入会申込書」のダウンロードおよび手続き等の詳細は協会ホームページ「入会のご案内」をご覧ください。http://jdg-nishinihon.org/

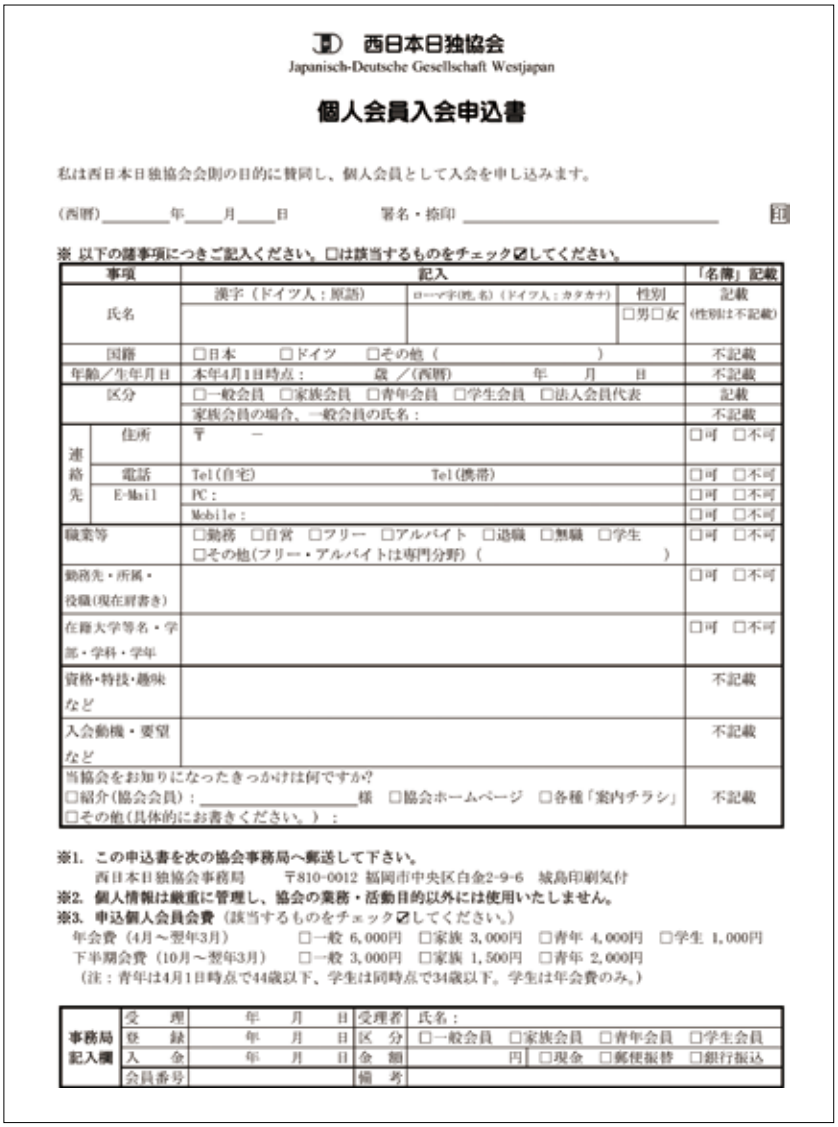
3．インターネットをご利用でない場合は、「入会申込書」送付をメール、ファックスまたは郵便にて、協会事務局へ請求してください。郵送いたします。お問合せも事務局へどうぞ。

**西日本日独協会事務局**

〒810-0012　福岡市中央区白金2-9-6　城島印刷株式会社 気付

ファックス・電話：092-524-0059（電話対応：火＆金 12:00～15:00）

E-mail：info@jdg-nishinihon.org



西日本日独協会
Japanisch-Deutsche Gesellschaft Westjapan

**個人会員入会申込書**

私は西日本日独協会会則の目的に賛同し、個人会員として入会を申し込みます。

（西暦）＿＿＿＿年＿＿月＿＿日　　署名・捺印 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　印

※ 以下の諸事項につきご記入ください。□は該当するものをチェック☑してください。

| 事項 | | 記入 | | | 「名簿」記載 |
|---|---|---|---|---|---|
| 氏名 | | 漢字（ドイツ人：原語） | ローマ字(姓, 名)（ドイツ人：カタカナ） | 性別 □男□女 | 記載（性別は不記載） |
| 国籍 | | □日本　□ドイツ　□その他（　　） | | | 不記載 |
| 年齢／生年月日 | | 本年4月1日時点：　　歳 ／(西暦)　　年　月　日 | | | 不記載 |
| 区分 | | □一般会員 □家族会員 □青年会員 □学生会員 □法人会員代表 | | | 記載 |
| | | 家族会員の場合、一般会員の氏名： | | | 不記載 |
| 連絡先 | 住所 | 〒　－ | | | □可 □不可 |
| | 電話 | Tel(自宅)　　Tel(携帯) | | | □可 □不可 |
| | E-Mail | PC： | | | □可 □不可 |
| | | Mobile： | | | □可 □不可 |
| 職業等 | | □勤務 □自営 □フリー □アルバイト □退職 □無職 □学生<br>□その他(フリー・アルバイトは専門分野)（　　） | | | □可 □不可 |
| 勤務先・所属・役職(現在順書き) | | | | | □可 □不可 |
| 在籍大学等名・学部・学科・学年 | | | | | □可 □不可 |
| 資格・特技・趣味など | | | | | 不記載 |
| 入会動機・要望など | | | | | 不記載 |
| 当協会をお知りになったきっかけは何ですか?<br>□紹介(協会会員)：＿＿＿＿＿＿＿＿様 □協会ホームページ □各種「案内チラシ」<br>□その他(具体的にお書きください。)： | | | | | 不記載 |

※1. この申込書を次の協会事務局へ郵送して下さい。
西日本日独協会事務局　〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 城島印刷気付
※2. 個人情報は厳重に管理し、協会の業務・活動目的以外には使用いたしません。
※3. 申込個人会員会費（該当するものをチェック☑してください。）
年会費（4月～翌年3月）　□一般 6,000円 □家族 3,000円 □青年 4,000円 □学生 1,000円
下半期会費（10月～翌年3月）　□一般 3,000円 □家族 1,500円 □青年 2,000円
（注：青年は4月1日時点で44歳以下、学生は同時点で34歳以下。学生は年会費のみ。）

| 事務局記入欄 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | 受　理 | 年　月　日 | 受理者 | 氏名： | |
| | 登　録 | 年　月　日 | 区　分 | □一般会員 □家族会員 □青年会員 □学生会員 | |
| | 入　金 | 年　月　日 | 金　額 | 円 | □現金 □郵便振替 □銀行振込 |
| | 会員番号 | | 備　考 | | |

# いつもの街に、いつもどおりの毎日を。

守りたい街があります。
守りたい暮らしがあります。
かけがえのない毎日を大切にしたいから。
私たちは、暮らしの中のガスを
より安全に使っていただくために、
さまざまな工夫や対策を行ない、
いつも皆様のそばで
快適な暮らしを見守っています。
お客さまの安心が、
私たち西部ガスの使命です。

西部ガス

1F 京風会席 萌木 ディナーのご案内 17:00～21:30(オーダーストップ 20:30)

博多名物いいとこどり！ オール博多

# どんたく御膳

お献立 ごまカンパチ / おきゅうと / くらげの酢物 / 辛子明太子 / がめ煮 / もつ鍋 / にぎり鮨 / 糸島ポークと季節野菜の天麩羅 / ちゃんぽん麺（もつ鍋用）

特 典 グラスビール１杯、又は 食後のデザート＆コーヒー

お１人様 ￥3,100(税込)

写真はイメージです。

KKRホテル博多 〒810-0022 福岡市中央区薬院 4-21-1

京風会席 萌木 お問合わせ ご予約 TEL092-521-1432
(10:00～21:00)

## 本物の鹿児島黒豚の品質とドイツ食肉マイスターの技が見事に融合しました。

農場から食卓までの一貫システムこが安心安全の源です。そして、そこには「南州マイスターヴェルク」の究極の“本物へのこだわりと自信”があります。私たちは、南国の太陽と大地が育てた鹿児島黒豚を徹底した衛生管理のもと、生産から販売までを確立しています。そして世界基準のISOやHACCPなど安心安全のための努力を惜しみません。
ぜひ、品質と技術が融合した本物の味覚をご堪能下さい。



ドイツには「もの造り」を支えている
手工業マイスター制度があります。
もの造りの伝統を維持し、そのレベルを保持し
後継者を育てるための制度です。
マイスターに求められるものは高いレベルの技術
と専門知識、経営の知識、次の世代を育てるための
職業訓練生養成者としての知識能力です。

ドイツ・バイエルン州ニーダーバイエルン
オーバープファルツ手工業会議所認定ドイツ食肉マイスター
小林 武治郎



博多阪急 地階 南州マイスターヴェルク

鹿児島黒豚のハムとソーセージ

南州マイスターヴェルク
Nanshu Meisterwerk

南州マイスターヴェルク 検索
http://www.meister-werk.jp

Nanshu Meisterwerk
博多阪急 地階 南州マイスターヴェルク
〒812-0012 福岡市博多区中央街1番1号TEL & FAX(092)419-5103

# 編集後記

年報第40号をお送りします。気の早い話ですが、次号第41号は協会創立60周年記念号として、やや大部のカラー写真を盛り込んだ特集号の形で刊行することが既に決まっています。しかし年報それ自体としては40という数字も大きな区切りですから、表紙口絵だけでもと考え、カラーにしてみました。昨年８月の記念すべき特別例会「ドイツ大使歓迎の夕べ」の集合写真です。

さらに新機軸として「会員だより」欄を新設しました。年報は協会の前年度の事業・活動報告であると同時に、会員全員の相互交流と情報交換の場としても重要であり、「寄稿」や「例会と催し」の欄はむろんのこととして、先の第39号から例会参加者の《感想》を掲載するようにしたのもそのためです。そして年報のこの役割をもっと生かして、広くいろいろな会員の方々に、近況、ドイツとの関わり、協会や年報への意見など、あるいはその他なんでも気軽にお書きいただこうと設けたのが「会員だより」です（ちなみに、形は異なりますが第29号までは「会員通信」なるものがありました)。今回は応募者がやや少なく、こちらからお願いした方々もあります。これで様子がお分かりいただけたと思いますので、次号には本当に気軽に、多数の方が応募されることを期待しています。また「青年部通信」欄を設け、青年部の活動に関する文章はここに一本化しました。

最後に、多彩で興味深い文章をお寄せいただき、時には編集委員会の無理な注文にも快く耳を傾けていただいたすべての執筆者の方々に対し、そして今回もまた広告掲載を通じて多大のご支援をたまわりました各方面に対し、深甚の謝意を表します。

私の委員長としての役目は今号で終わりますが、皆さま、今後ともより良き年報の発行のためにご支援とご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

2015 年度 年報編集委員会委員長　垣本 知子

（委員　立花雅子、池田園子、二本木一哉）


**西日本日独協会年報　第 40号（2016）**

Jahresbericht 40 der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Westjapan 2016

発　行　平成28（2016）年 5 月25日

発行者　西日本日独協会会長　池田 紘一

編　集　西日本日独協会年報編集委員会

発行所　**西日本日独協会**

〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 城島印刷株式会社 気付

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Westjapan, Fukuoka

Präsident：Koichi Ikeda

Büro　：c/o Kijima-Insatsu, 2-9-6 Shirogane Chuo-ku, Fukuoka 810-0012, Japan

Tel/Fax　：092－524－0059

E-mail　：info@jdg-nishinihon.org　URL：http://jdg-nishinihon.org

郵便振替　口座番号： 01720-3-23959　名義人：西日本日独協会

福岡銀行 屋形原支店 普通預金 口座番号： 1194549

名義人：西日本日独協会会長　池田紘一

印　刷　城島印刷株式会社

〒810-0012　福岡市中央区白金2丁目9-6

Tel 092－531－7102㈹　Fax 092－524－4411